

# アイドルが生息する「現実空間」と「仮想空間」の二重構造

～「キャラクター」と「偶像」の合致と乖離～

西条 昇\*・木内 英太\*\*・植田 康孝\*\*\*

## 要 約

2015年は、アイドルシーンにとって画期的な年であった。ジャニーズやAKB48を中心としたアイドル・ブームはまだまだ堅調であったが、これが「仮想空間」にも拡大、一般化して「アイドルアニメ」がエンタテインメント市場を席捲した。現実のアイドルは近年、ちょっとでも容姿や体型が落ちるとインターネット上で「劣化」と騒がれてしまうが、アニメのアイドルは「劣化」せず純粋にグループのために頑張る理想の集団としてファンに映り、「ラブライブ!」「アイドルマスター」「うたの☆プリンスさまっ♪」の3大作品が大ヒット、「ラブライブ!」から派生した声優9人組によるユニット「μ's (ミューズ)」が2015年末の「第66回NHK紅白歌合戦」に出場、2015年流行語大賞の候補に熱狂的ファンを表す「ラブライバー」が選ばれるなど社会現象化した。「ラブライバー」が成立した背景には、「ヴァーチャル空間」拡大による「ファン母数増加」と「ファンコミュニティ内つながりの緊密化」の2点が挙げられる。

現代アイドルの魅力は、具体的な素の存在に基づく「現実空間」における「キャラクター」性と、アニメやマンガのキャラクターに通じるように、類型化されたイメージの中から選び取られた「仮想空間」における「偶像」性の二重構造を持っていることにある。「現実空間」における「キャラクター」と「仮想空間」における「偶像」が合致した時、アイドルの魅力は一気に高まる。一方、その乖離が露呈すると、虚構性が興ざめ感を惹起する危険性も兼備する。かつて安室奈美恵やSPEEDなどアーティスト志向が強かったグループはアイドルとして捉えられることに対し拒絶する動きを見せたが、SNSや動画配信など「ヴァーチャル空間」が拡大してファンとの距離が近く感じられるようになった現在においては、アーティスト然と振る舞うことは逆にカッコ悪く映り、身近に感じさせられるアイドル的行動がファンを増やす点で効果的になっている。ファンになってもらうためには、SNSやイベントを通して「人となり」を伝えることが求められる。アイドルはイベントで握手や写真撮影に応じることに加え、公式サイトやFacebook、Twitterでグループや自らの現況を積極的に発信して、実際に触れ合う「現実空間」とネットを通じた「ヴァーチャル空間」の両空間において、ファンに「楽しみ」を提供している。また、新曲が出るとPVの動画が「ヴァーチャル空間」に流れるため、ファンは無料で身近にアイドルに接することが可能となっている。

男性ファンは女性アイドルに対して、潜在的に疑似恋愛な視線を向ける傾向がある。可愛い女の子が一生懸命全身全霊でファンのために人生の応援歌を歌い踊り演じる。アイドルが頑張るから、自分も一緒に頑張ろうという意識の下、アイドルを応援する。AKB48で有名な「恋愛禁止」ルールは、個々のメンバーが切磋琢磨し高め合うことに一生懸命であれば恋愛している暇なんてないだろうという意味づけであり、結果として男性ファンの疑似恋愛を守ることに成功している。

一方、女性アイドルファンにとって、ジャニーズアイドルを中心とする男性アイドルは理想の恋愛相手という存在に留まらず、別機能を備えた存在となっている。ジャニーズアイドルは、「わちゃわちゃ感」と呼ばれる男性同士の親密さや絆を有する「現実空間」における「キャラクター」をアピールして、アイドルに付随する女性の存在を無化する「偶像」になることに成功している。以前の女性を救い上げる男性イコール王子様、選ばれる女性というジェンダー役割は変質して、男性アイドルは、身近な自分の好みと合致させやすい「キャラクター」であると同時に、自分とは異性愛関係を結べない「偶像」(仮想空間における「偶像」)でもある。女性ファンにとって、男性アイドルは手の届かない遠い「偶像」ではなく、現実空間に極めて近いところにいる「キャラクター」として認識されている。

**キーワード:** 現実空間, 仮想空間, ヴァーチャル空間, キャラクター, 偶像, 疑似恋愛, わちゃわちゃ感, 疑似環境 (pseudo-environment), 内向きとグローバル環境の実現, アイドルアニメの社会現象化, ファンコミュニティ, 社会関係資本, 非同期型応援, ギャップ萌え

2015年11月30日受付

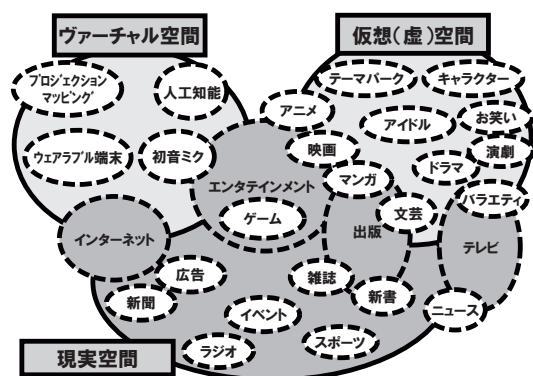
\* 江戸川大学 マス・コミュニケーション学科准教授 お笑い・エンタテインメント論, 大衆芸能論

\*\* 江戸川大学 マス・コミュニケーション学科准教授 英文学, 現代文化

\*\*\* 江戸川大学 マス・コミュニケーション学科教授 国際情報通信学 (理学), 計量経済学

## 1. はじめに

植田・木内・西条・田畑 [2015] が示す通り、近年、スマートフォンの普及により、「現実（リアル）」、「仮想」, 「ヴァーチャル」の3つの世界が複雑にからむようになってきている。メディアを「リアルな現実世界」「仮想世界」「ヴァーチャルな世界」の3つの世界で分類すると、図1の通りとなるが、アイドル<sup>(1)</sup> はファンの頭の中に「偶像」を作り上げ、「仮想空間」に位置する存在である。



【出典】田畑・植田 [2015]

図1 マス・コミュニケーション学科の3つの世界

近年、「アイドル・ブーム」と呼ばれる時期が長期に亘り継続してアイドルを取り巻く市場が活況を呈している。アイドルはうつろいゆく儂い存在であるが、アイドルが歌やダンスを必死に頑張るからファンも一緒に頑張ろうとファンが応援する流れは、近年の日本社会を包む空気を反映している。現在、都会で暮らす人間の間でメダカが人気となっている一方で、金魚は売り上げが落ちていく。パクパク、ひらひらと曲線的に泳ぐ金魚は優雅ではあるが、折れ線グラフのように潔く進むメダカの方が、現代人を透明な気分させてくれる存在である。「遊泳」よりも「懸命」が美しく映る時代である。

2016年初頭にSMAP解散騒動が表面化すると、「非常にショック」、「ご飯も食べられない」、「日本の財産」、「日本にとっての損失」、「キャンディ

ーズ解散にも匹敵する大きな出来事」（石破茂地方再生担当大臣）、「（世代を超えた歌が生まれにくい世の中で）この国の老若男女みんなが歌える歌を歌って親しまれている」、「広く海外にもあまたのファンを持つ」、「世論の声にジャニーズの関係者も驚いている」、「SMAPは日本のエンタテインメントで特別。SMAPだけのもんじゃない」（笑福亭鶴瓶）などのコメントが各方面から続出して、アイドルが有する現代社会に対する求心性の高さを示す一方、「経済損失は636億円」（宮本勝浩教授）、「いまやアイドルは数百億円単位のカネが動くビッグビジネス」、「ジャニーズ事務所の売り上げは1,000億円を超えるが、SMAPは250億円を突破」、「いまやニッポンの一大産業」などと伝えられ、アイドル活動が社会的・経済的に及ぼす影響力の大きさを示す出来事となった。

表面化した2016年1月13日（水）にNHKがニュースで取り扱った放送時間は、「正午のニュース」1分33秒、「14時のニュース」1分51秒、「ニュース7」1分29秒、「ニュースウォッチ9」55秒、「News Web」12分25秒で、総放送時間は15分34秒に亘り、国民が非常に関心を持つ重要「議題」に設定された。マスメディアに留まらず、グループ存続に向けた代表曲「世界に一つだけの花」の購買運動や署名運動が起こるなど、「ヴァーチャル空間」（SNS）におけるグループ解散回避を求める世論（SMAP愛）の盛り上がりは凄まじかった。「ビートルズ解散でもここまでの騒動になっていなかった」という声に代表されるように、「現実」と「仮想」の2空間を往来していた20世紀とはまったく異なる様相を呈したため、アイドルは「現実」「仮想」、「ヴァーチャル」の3つの世界が複雑にからむ時代に活動していることを示す証左になった。

更に、2016年1月16日に行われた台湾総統選挙でアイドルが選挙結果に大きな影響を与える事象が起きた。韓国アイドルグループ「TWICE」の最人気メンバーである16歳の台湾出身・ツイイ（周子瑜）は韓国のテレビ番組に出演した際、台湾を実体的に統治する「中華民国」の旗を掲げたことにより、中国から「台湾独立派」と非難が

集中したことを受け、ビデオで公式謝罪するに至った。ツイイ（周子瑜）が謝罪する動画が「ヴァーチャル」空間に流れた結果、「台湾人」としてのアイデンティティーを踏みにじられたと有権者の怒りが集中、親中路線を採用した与党・国民党に対して批判の矛先を向けると共に、投票で台湾人の怒りを示そうという機運が急速に高まった。結果、野党・民進党の蔡英文主席が国民党の朱立倫主席に圧勝、台湾史上初の女性総統が誕生した。アイドルは現代社会において社会的、経済的に加えて、政治的にも大きな影響力を有することを示す結果になった。

このように現代社会において大きな求心力を有するアイドルであるが、ジャーナリズムやレガシーメディアを分析する論文が多く存在する一方、アイドルのモデルを渉猟し体系的に学術的にまとめたものは非常に少ない。本論文では、「現代アイドルの魅力は、具体的な素の存在に基づく現実空間におけるキャラクター性と、アニメやマンガのキャラクターに通じるように、類型化されたイメージの中から選び取られた仮想空間における偶像性の二重構造を持っていることにある。現実空間におけるキャラクターと仮想空間における偶像が合致した時、アイドルの魅力は一気に高まる。一方、その乖離が露呈すると、虚構性が興ざめ感を惹起する危険性も兼ね備える。」という仮説を導出し、社会学、経済学、経営学、工学などの学術アプローチを援用しながら、国内外のアイドルを分類・俯瞰し、評価可能なフレームワークを提示することにより、仮説を検証した。

本論文で提案された「現実空間、仮想空間、ヴァーチャル空間という空間位置」に基づくフレームワークは、確認可能なアイドル研究への前提として位置づけられる。重要なのは、本論文の分析が単に事実の並列に終わらず、そこから導出された仮説が多種の事象に立脚している点である。アイドルの事象を十分に咀嚼し、そのなかから説得的なフレームワークを抽出すると共に、それを事象に当てはめて検証を行った。その検証は、分析対象のアイドルの態様を明らかにするだけでなく、理論自体を補強するものである。これまで未

整理のまま論じられることが多かったアイドルに関して、近年の研究に欠落した部分を補完している。

## 2. 女性アイドル

日本におけるアイドルの登場は、1970年代初頭とされる。大きな要因は2つ考えられる。1つの要因は、カラーテレビの普及である。もう1つの要因は、高度経済成長の中で子供たちがお小遣いをもらえるようになったことである。アイドルの人気は、コンサートに行き、グッズを買う子供たちの消費に支えられていた。

吉永小百合に代表されるような、映画館に足を運んで料金を払って見る高嶺の花の映画スターに対して、家でテレビのスイッチを入れれば接することができる、とても身近に感じられる存在として、テレビアイドルは登場した。テレビの普及を背景として、歌手が「聴かれる」存在よりも「視られる」存在に変質する。マスメディアとしての威力を持つテレビは、同世代に限らずアイドルのファン層を大きく広げる役割を果たすことに成功し、<sup>(2)</sup>「仮想空間」であったアイドルを「現実空間」に近付ける作用を果たした。映画スターは、映画館に行かないと動いている姿に触れることができない、「銀幕」の向こうに遠くから仰ぎ見る、星々のような存在であった<sup>(3)</sup>。

しかし、ブラウン管に映るテレビアイドルは、映画スターとは異なっていた。テレビのスイッチを入れれば、いつでも無料で見られる存在である。映画スターのような高嶺の花ではなく親しみがあり、視聴者の疑似恋愛の対象にもなれる存在であった<sup>(4)</sup>。まず、1961～1971年に、吉沢京子<sup>(5)</sup>、岡田可愛、紀比呂子、早瀬久美らがテレビドラマのアイドル的女優として活躍する。中でも、1970年秋放送の「おくさまは18歳」に出演した岡崎友紀の人気は凄まじく、視聴率やプロマイドの売り上げは記録的数字となった<sup>(6)</sup>。しかし、アイドルの厳密な定義はレコードを売ることがメインの「歌謡曲アイドル」と認識されるため、1971年の宝塚音楽学校出身で得大人びた魅力売り物

にした小柳ルミ子<sup>(7)</sup>、健康的で快活なイメージを押し出した南沙織<sup>(8)</sup>、丸顔で親しみやすさを前面に押し出した天地真理<sup>(9)</sup>、1972年麻丘めぐみ<sup>(10)</sup>のレコードデビューをもって、「アイドル」が誕生したと考えるのが一般的である。

中でも、天地真理は、1971年放送の人気ドラマ「時間ですよ」(TBS系)で、舞台となる「松の湯」隣家2階の窓辺で白いギターを弾きながら歌い、堺正章扮する「健ちゃん」に想いを寄せられる「となりの真理ちゃん」というキャラクターで人気を博し、1972年から1975年にかけてTBSの冠バラエティ番組「真理ちゃんとデート」「となりの真理ちゃん」「びっぴー!真理ちゃん」「アタック真理ちゃん」「はばたけ!真理ちゃん」に主演した。歌の小節ごとのポイントで男性ファンが「〇〇ちゃん!」と呼ぶ「コール」が女性アイドル応援の定番パターンとなる契機も天地真理からであった。

1971年の秋には、次々とアイドルを輩出することになるオーディション番組「スター誕生!」が始まった。森昌子が1972年に、桜田淳子と山口百恵<sup>(11)</sup>が1973年にレコードデビューを果たす。1973年に「時間ですよ」でデビューした浅田美代子、1978年に「コメントさん」で大ブレイクした大場久美子は、テレビドラマから火が付いたアイドルであった。1970年代後半のアイドルで特筆すべきは、キャンディーズ<sup>(12)</sup>とピンク・レディー<sup>(13)</sup>である。キャンディーズが結成されたのは1972年で、「8時だヨ!全員集合」にもレギュラー出演したが、レコードデビューは翌年の1973年であった。1975年に発売した「年下の男の子」からセンターを田中好子から伊藤蘭に変更してヒット曲を量産するようになる。1977年夏のコンサートでは運営側には一切相談せず自分たちだけで「普通の女の子に戻りたい」と解散宣言して、当時の流行語になった。

一方、ピンク・レディーは「スター誕生」出身で、1976年「ペッパー警部」でレコードデビューした。大胆な振り付けが特に子供たちを中心に受けて、1977年から1978年にかけてオリコンで9曲連続1位、10曲連続ミリオンセラーを記録し

た。しかし、1978年大晦日に「NHK紅白歌合戦」を辞退して日本テレビで冠番組を放送、さらに1979年にアメリカ進出を行ったことが裏目に出て、人気が低迷してしまう。結果、1981年には解散する。そのような中で、1979年秋には山口百恵が三浦友和との交際を発表、1980年春には婚約を表明して、同年秋に引退する<sup>(14)</sup>。

これら1970年代の女性アイドルはみな、「アイドル」という役柄を演じるように求められた。インタビューで「好きな食べ物」について聞かれた時に、「フルーツ」と答えることは頻繁に行われた。女性アイドルは「トイレにも行かない」「恋愛はしない」という「仮想」をファンに見せつけて楽しんでもらう。アイドルは、恋人がいても「いない」、焼き鳥や塩辛が好きでも「プリンやクレープが好き」とコメントし、年齢、体重、スリーサイズなどのプロフィールを虚偽報告して「仮想」の「偶像」を創り上げた。その文脈で「口パク」「エア演奏」などは「仮想空間」では許されることであった。ファンは、アイドルを認識する際に現実空間に位置するアイドルそのものを認識するのではなく、仮想空間に存在するアイドルのイメージを頭の中で作り上げた。この仮想イメージは「疑似環境(pseudo-environment)」と呼ぶべきものであり、ファン行動はこの疑似環境に対する反応として行われる。

一方で、アイドルは、「現実空間の実像」と「仮想空間の虚像」のギャップに悩むことになる。一部からは運営側による操り人形にされることへのスマートな抵抗の一つ<sup>(15)</sup>として、仮想空間における「偶像」から脱皮して現実空間における「キャラクター」に戻ろうとする行動が取られることがあった。キャンディーズの解散宣言や山口百恵の完全引退は、「仮想空間」から「現実空間」への復帰行為であった。1970年代アイドルは、期間限定の儚い存在であり、ファンにはそこが魅力に映った。

岡島・岡田[2011]は「アイドルの存在を支えていたのは、アイドルは特別なものであるというファンの中の幻想『アイドル幻想』とも呼べるものだ。アイドルは汗をかかない、アイドルはトイ

レに行かない、実際にはあり得ないがなんとなく  
そうであって欲しいとファンが願うものの総体と  
言っていかもしれない。秋元康が作詞した『なん  
てたってアイドル』、そして彼が作詞家、放  
送作家として関わったおニャン子クラブはそうし  
た幻想を破壊した。それはアイドルの敷居を下げ、  
一時的には大きな盛り上げを生むこととなっ  
た<sup>(16)</sup>と指摘している。また、村山 [2011] は、  
「彼女たちは『作られたアイドル』であることが  
評価され、ファンの間では『アイドル幻想』と呼  
ばれるものが生まれた。それは『アイドルは汗を  
かかない、トイレに行かない、おならをしない』  
といった偶像であり、彼女たちは『処女である』  
という幻想であった。マリア様のように処女のま  
ま子供を産み、最後は『清く正しく美しく』天に  
召されると思い込みをした。それに合わせて当時  
のアイドルたちも、雑誌などのインタビューでは、  
好きな食べ物と聞かれれば『いちご』や『ショ  
ートケーキ』と答え、ファンがアイドル幻想を抱き  
やすいようにしていた<sup>(17)</sup>」と言及している。

ファンが「あの可愛いアイドルと汚い自分とは  
まったく別な生き物だし、同じ人間とは思えない。  
だから好きなんだ」という感覚を抱くことが重要  
である。エゴがなくて清涼感溢れる存在を見るこ  
とによって、心が洗われる感覚を味わいたいとい  
う欲求である。疲れている時こそアイドルの曲は  
心に入って来ると言われる。アイドルは、疲れた  
人々の清涼感としての役割も持つ。斎藤 [2015]  
は、アイドルは「虚構内存在としての少女が荒唐  
無稽であるほどリアリティが増すような存在構造  
を有している」<sup>(18)</sup>と分析する。アイドルはステ  
ージ上で華やかな衣装を身にまとい、華麗なステ  
ップで舞い、ファンに「夢」と「勇気」と「元気」  
を与えた。その過程において、アイドルは日常か  
ら、ダンスや歌の練習に励む「リアリティ」の一  
つ一つの積み重ねが、清き「幻想」を作り上げた。  
歌い踊るアイドルに必死に声援を送ることによ  
り、明日への活力としたのである。

レコードの売り上げという側面では、ピンク・  
レディーに遠く及ばなかったキャンディーズであ  
るが、全国50か所以上で精力的にライブを行い、

着実に強固なファン層を築いた。この中で日本初  
の全国組織型ファンクラブ「全国キャンディーズ」  
(全キャン連)が発生した。このファンクラブは、  
1978年にリリースしたラストシングル「微笑が  
えし」で何とか1位を取らせたいと、各地で2枚、  
3枚以上の購入を呼び掛けたことが功を奏し、キ  
ャンディーズにとって最初で最後の1位を獲得し  
た。現在もアイドルのコンサート中に行われる「オ  
タ芸」は、キャンディーズの曲間に行われたコー  
ルが元祖とされる<sup>(19)</sup>。キャンディーズは、アイ  
ドルの存在をあくまでテレビメディアを通じて疑  
似恋愛の対象として「仮想空間」に位置する偶像  
であった存在から、応援する対象として「現実空  
間」に位置する実際に会える存在への転換を促す  
画期的なアイドルであった。キャンディーズのメ  
ンバーであった田中好子が2011年、ガンのため  
に亡くなった際、秋元康が「キャンディーズがい  
なければ、おニャン子クラブもAKB48もなかつ  
た」とコメントしたことにその貢献が見て取れ  
る<sup>(20)</sup>。

山口百恵が1980年に結婚・引退し、同じくヒ  
ット曲を連発したピンク・レディーが1981年に  
解散したのと入れ替わるように現れたのが松田聖  
子<sup>(21)</sup>である。松田聖子は、1980年4月、桜田  
淳子と同じサンミュージックから「裸足の季節」  
でレコードデビューした。山口百恵のファイナル  
コンサートが行われた1980年10月、松田聖子  
は3枚目のシングル「風は秋色」で初のヒット  
チャート1位を獲得する。抜群の声質と聖子ちゃん  
カットという独特の髪型で一躍人気アイドルにな  
った<sup>(22)</sup>。その影響力は抜群で、松本伊代<sup>(23)</sup>、堀  
ちえみ、小泉今日子<sup>(24)</sup>、早見優<sup>(25)</sup>、石川秀美<sup>(26)</sup>、  
中森明菜<sup>(27)</sup>など、「花の82年組」と呼ばれる新  
人アイドルが次々とデビューすることになる。

この時代、アイドルが仮想空間における「偶像」  
を大切に存在である傾向は続いていた。中森  
明菜の魅力は、作りものではない人間臭さを表現  
できるところであり、当時としては稀有な「現実  
空間」に近い存在であった。1985年に小泉今日  
子がアイドルとしての生活を戯画的に歌い上げた  
「なんてたってアイドル」では、「スキヤンダルな

らノーサンキュー」「イメージが大切よ、清く正しく美しく」と歌った<sup>(28)</sup>。小泉今日子は偶像としての「アイドル」に背を向けて「アーティスト」の道を歩き始めようとしたことが見て取れる<sup>(29)</sup>。「アイドル」の理念型から敢えて引き離すように、自分自身の進む道をデザインした<sup>(30)</sup>。

1970年代から1980年代半ばまで、アイドルは基本的にレコードを売ることがメインの歌謡曲アイドルであった<sup>(31)</sup>が、1980年代前半には、薬師丸ひろ子<sup>(32)</sup>や原田知世<sup>(33)</sup>が角川映画で映画アイドルとして活躍する。彼女たちは、かつての映画スターのように、テレビ出演を意図的に避けていた<sup>(34)</sup>が、角川映画自体がテレビCMを使って大々的なプロモーションを行っていたため、テレビの力を利用したアイドルであることに変わりはなかった。

その後、1985年から1987年にかけてアイドル絶頂期を迎える。アイドルドラマがゴールデンタイムで大成功し、中山美穂<sup>(35)</sup>、斉藤由貴<sup>(36)</sup>、南野陽子<sup>(37)</sup>、浅香唯<sup>(38)</sup>が人気を得た。さらに1985年月には、「夕やけニャンニャン」が始まった。「おニャン子クラブ<sup>(39)</sup>」ブームが始まり、長時間の放送枠があれば、集団アイドルであっても人気を得ることを証明した時代であった。アイドルを売るメディアとしてテレビが最も力を持っていた時代であったと言える。

「おニャン子クラブ」は、長時間テレビに映れば、どのような女の子でもアイドルになってしまうこと<sup>(40)</sup>、メンバーも質はあまり問われず、玉石混濁で多い方が良いこと、ファンはたくさんいる中から好きな子を選ぶことができること、美少女ばかりより引き立て役がいた方が効果的であること、引き立て役のメンバーが人気になったりすること、などの特徴を備えた。また、彼女たちにとっての芸能活動は「課外活動」の一環として捉えられ、高校の定期試験と重なったメンバーは「夕やけニャンニャン」の出演を欠席した。ハーモニーやダンスやコントも上手くこなしたキャンディーズやピンク・レディーのプロフェッショナルリズムに対し、おニャン子クラブは歌やダンスに関しては高校の学園祭レベルというアマチュアリズム

を前面に押し出してファンにとって親近感を抱きやすい存在となった。仕掛け人は、当時、夕方や深夜番組のカルト的な放送作家であった秋元康であった。1980年代半ばのテレビ空間（仮想空間）にあった可能性を、現在のインターネット（ヴァーチャル空間）とライブ劇場（現実空間）に移行したのが、AKB48である。「おニャン子クラブ」は、今日のグループアイドルブームの原点となっている。

さらに、後藤久美子<sup>(41)</sup>や宮沢りえ<sup>(42)</sup>などテレビCMを中心とした美少女ブームが重なった。ルックスで玉石混濁であった「おニャン子クラブ」に対するアンチテーゼとして、「アイドルは本当にそれで良いのか」というメッセージが「国民的美少女」後藤久美子であった。後藤久美子の次に脚光を浴びた宮沢りえが作った美少女ブームの中で、観月ありさ、牧瀬里穂が登場して「3M」と呼ばれるようになった<sup>(43)</sup>。アイドルもレコードを売るための歌謡曲アイドルからドラマ、CM出演がメインの存在へ変化した時代であった。

しかし、アイドル絶頂期の後にやって来たのは、「アイドル冬の時代」であった。1985年に結婚が決まった松田聖子と同じ事務所の後継者として順調に活動していた岡田有希子<sup>(44)</sup>の自殺（1986年）は、アイドルファンにとって衝撃であった。中でも、最大の難敵となったのがバブルに向かう経済の好景気であった。好景気期には、「疑似恋愛」の対象であるアイドルを求めるより、現実生活を充実させる「リア充」を求める気分になるからである。そのような中で、1989年には「無表情が売り」と呼ばれた異色のアイドル・デュオ「Wink<sup>(45)</sup>」がレコード大賞を受賞した。また1989年には「ザ・ベストテン」（TBS）、1990年には「夜のヒットスタジオ」シリーズ（フジテレビ）と「トップテン」シリーズ（日本テレビ）など各局の歌番組が相次いで終了し、「8時だョ！全員集合」「カッコラキン大放送!!」などアイドル歌手として持ち歌を披露できるバラエティ番組も1980年代半ば過ぎまでに大半が終了した。こうした状況に苦戦を強いられたのは女性アイドルばかりではなく、1991年にCDデビューしたSMAPが初めてオリ

コン1位を獲得したのは1994年3月に発売された12枚目のシングル「HeyHey おおきに毎度あり」においてであった。

1987年から始まった「アイドル冬の時代」は、1994年に「グラドル（グラビア・アイドル）<sup>(46)</sup>」雛形あきこ<sup>(47)</sup>が中高生の男子に人気となり終焉する。雛形の果たした大きな役割は、中高年男子の関心をアイドルに呼び戻したことにある。1996年にはNTTドコモのポケベルCMで一気に広末涼子<sup>(48)</sup>が脚光を浴び、「ヤングジャンプ」のグラビアとも連動して、演技ができるピュア系アイドルの地位を確立した。その後、上戸彩<sup>(49)</sup>や深田恭子<sup>(50)</sup>などが登場した。しかし音楽シーンではアイドルにとって相変わらず厳しい時代が続いた。篠原涼子<sup>(51)</sup>や安室奈美恵、華原朋美など小室哲哉プロデュースの歌手たちは、アイドルではなくアーティストとして売り出された<sup>(52)</sup>。沖縄アクターズスクール<sup>(53)</sup>出身の安室奈美恵は、デビュー当初こそアイドル的な活動をしたが、直ぐに路線変更し、ダンスが上手なカッコいい少女アーティストとして人気を博す<sup>(54)</sup>。そのような中で、1996年にデビューしたSPEEDは、「アイドル（仮想空間に生息する偶像）」と「実力派（現実空間における歌唱やダンスのクオリティの高さを見せるキャラクター）」の融合系であった。

1997年にオーディション番組「ASAYAN」から登場したモーニング娘。<sup>(55)</sup>は、アイドル展開して結果を出す。追加メンバーのオーディションなどで話題を提供し続け、グループアイドル復権の足掛かりとなった<sup>(56)</sup>。アイドルであることを拒否したSPEEDからの大きな変革であった。仮想空間における「偶像」性を求めていた男性ファンが反応して支持するようになる。当初こそセールスは伸び悩んだが、13歳の新メンバーとして後藤真希が加入した最初のシングルである1999年の「LOVEマシーン」以降、ミリオン級のヒット曲を連発し、現代に通じる「アイドル」再生の足掛かりとなった。卒業と新メンバーの加入を繰り返し、グループの新陳代謝を繰り返しながら、「プッチモニ」や「ミニモニ。」などの新グループを誕生させ、さらにメンバーをシャッフルするな

ど、後年のAKB48にもつながるアイドル手法を確立させた。

モーニング娘。の活躍は2000年代半ばからのAKB48に代表されるアイドルユニットに多大な影響を与えた。モーニング娘。を見て育った女の子たちが、後年のアイドルユニットの担い手となり、「アイドル戦国時代」と呼ばれる時代<sup>(57)</sup>を創出して、仮想空間における偶像を見せる「アイドル」が社会現象とも言われる復活を果たした。バブルの余韻があった1990年代のSPEEDや安室奈美恵など「現実空間」の「カッコ良さ」を売りにしたアイドルから、不況時期が長期に亘り続いた影響により、「かわいい」偶像性の高いアイドルに対する支持が復活するようになったが、踊りや歌などの練習に励む下積み経験などを経て実力がある子がブレイクする構図は、「おニャン子クラブ」が番組内オーディションで合格すると翌週直ぐに画面に出て売れた構図とはまったく異なるものであった。アイドルにとって、1980年代、1990年代は「テレビの時代」であった。ドラマやCMとタイアップする手法から、アイドルのキャラクターを魅力的に見せてヒットにつなげる手法を経て、アイドルを作り出すドキュメンタリー的手法へとシフトチェンジしながら、アイドルはテレビと密接に関わり、人気を得て来た。

しかし、音楽に触れる機会がテレビからインターネットにシフトした2000年代になると、アイドルのメディアとの関わり方も大きく変わることになる。秋葉原でのライブを中心に活動するAKB48は秋元康プロデュースで2005年12月に誕生した。秋葉原のドン・キホーテの8階に専用劇場を設け、ライブを中心に活動していく<sup>(58)</sup>アイドルユニットとしてスタートした<sup>(59)</sup>。2005年12月8日、秋葉原の専用劇場での初劇場公演を開催、劇場満員御礼、インディーズデビュー<sup>(60)</sup>、メジャーデビュー<sup>(61)</sup>と徐々にステップアップしていくと同時に、ファンと触れ合う「浅草・花やしきツアー<sup>(62)</sup>」「選抜メンバー制」などAKB48らしさが徐々に形成される。

「会いに行けるアイドル」のコンセプトは、映画、テレビ、CMなどが「仮想空間」内に偶像を作り

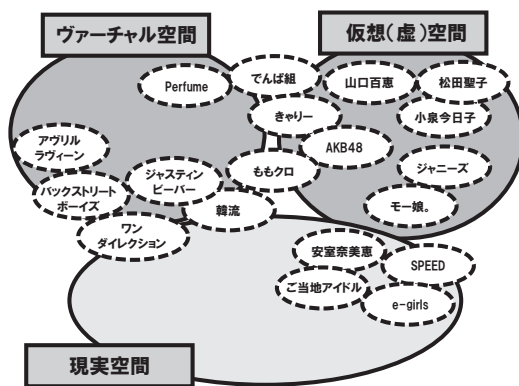
上げる「アイドル」の概念を完全に変えた。AKB48の公演はほぼ毎日行われたため、劇場に足を向ければ、アイドルに何度も会いに行けることが可能であった。劇場チケットが当初は1,000円（立ち見は500円）だったという気軽さもあった。常設劇場を持ち、公演期間中は毎日、公演を行う方法は、テレビ中心のかつてのアイドルと明確に違った。AKB48がテレビで冠番組を持ったのはデビューから2年も経った2008年1月である<sup>(63)</sup>。スターシステムを持ち、公演、新人公演などもある点で、宝塚歌劇団に類似するモデルである。普通の女優と異なりアイドルは「生」で見られる機会が圧倒的に多い存在となった。

また、SNSの普及に伴う「ヴァーチャル空間」の拡大と共に、テレビへの依存度が著しく低下し、メンバーとファンの接触や相互認知など、アイドルを取り巻く環境は大きく様変わりした。ファンにとって、ライブで握手会を催すことにより、「現実空間」において一対一で握手という身体接触コミュニケーション機会を持つことができるインパクトは強かった。ブログやツイッターなどヴァーチャル空間の成長により、女性アイドル自らが、現実空間の存在（キャラクター）と仮想空間の存在（偶像）との乖離を埋めようとする動きも見られ、アイドルをより身近な存在として感じたいファンから支持されるようになって行った。伴って、ファンを虜にし「ヴァーチャル空間」での評価を勝ち取るためには、現実空間での「キャラクター」性も同時に求められた。AKB48メンバーの中でも、あくまでも仮想空間における「偶像」を維持しようとする「渡辺麻友」と現実空間における「キャラクター」をさらけ出そうとする「指原莉乃」の空間対立である。

現代アイドルの魅力は、具体的な素の存在に基づく「現実空間」における「キャラクター」性と、アニメやマンガのキャラクターに通じるように、類型化されたイメージの中から選び取られた「仮想空間」における「偶像」性の二重構造を持っていることにある。「現実空間」におけるキャラクターと「仮想空間」における偶像が合致した時、アイドルの魅力は一気に高まることになる。一方、

その乖離が露呈すると、虚構性が興ざめ感を惹起する危険性にも満ちた<sup>(64)</sup>。

「現実空間」における「キャラクター」路線が必ずしもファンの満足に結びつかないことは、SPEEDなどアイドルの歴史が証明しており、仮想空間における偶像性を失わないことがファンの満足度を高めることが多い。しかし、「偶像」を長期に亘って維持することは、女性アイドルにとって難しく、「仮想空間」から「現実空間」に戻ろうとする行為を「卒業」として儀式化するが、これは空間移動に他ならない。マス・コミュニケーションも、仮想空間で偶像を演出していたアイドルが「現実空間」へ近づくに伴い、恋愛、未成年飲酒、悪口、いじめ、不倫、整形などの現実空間におけるネタを用いて攻撃して、ヴァーチャル空間ではしばしばネット炎上が引き起こされる事態を招いている。一方、「仮想空間」よりも「現実空間」を重視する欧米市場では、キャラクター路線であるBABYMETALやPerfumeが受け入れられている。プロフェッショナルイズムが評価される米国社会においては、17歳でデビューした美少女歌手アヴリル・ラヴィーンはアイドル的な扱われ方もされるが、本質はあくまでも歌手としての存在である。



【出典】筆者が独自に作成

図2 アイドルのポジショニング

### 3. ジャニーズアイドル

ジャニーズに代表される男性アイドル文化は、



日本の女性向けポピュラーカルチャーにおいて最も大規模なジャンルである。ジャニーズ事務所は、ジャニーズを振り出しに、フォーリーブス、たのきんトリオ、少年隊、光GENJI、SMAP、嵐と、時代を彩る数々の男性スターを送り出すアイドル帝国である。男性アイドルを輩出するジャニーズ事務所は、1960年代後半に4人組フォーリーブス、1970年代には郷ひろみを世に出して、男性アイドルに特化した芸能プロダクションとして存在感を發揮してきた。1979年に放送された「3年B組金八先生」に出演した田原俊彦、野村義男、近藤真彦を「たのきんトリオ」としてプロデュースすることに成功し、そこから「82年組」の一角を占めるシブがき隊に続き、少年隊、光GENJIと立て続けにトップ男性アイドルグループを輩出する中で、現在まで続くアイドル開発戦略とプロモーション戦略の基本形を確立している。「アイドル冬の時代」には各局の歌番組が相次いで終了した影響を受けて、1991年にデビューしたSMAPが1994年に12枚目のシングルで初めてオリコン1位を獲得するなど苦戦が強いられたが、冠バラエティ番組と人気ドラマへ出演する戦略が功を奏し、歌においてもミリオンヒットを連発する「国民的アイドル」となった。SMAPで成功した露出のスタンスを土台として、TOKIO、Kinki Kids、V6、嵐など人気グループを生み続けた。女性アイドルと異なり、女性ファンが疑似恋愛対象として男性アイドルに求める魅力の一つに「かっこ良さ」があるため、ジャニーズ事務所は忠誠度の高いファンをファンクラブとして組織化し、デビュー前から候補生たち（ジャニーズ Jr.）をファンたちに選別させるメカニズムを構築した<sup>(65)</sup>。

また、ジャニーズアイドルはファンにとっての疑似恋愛対象に留まらず、別の機能も備えた存在にもなっている。ジャニーズアイドルは「わちゃわちゃ感」と呼ばれる男性同士の親密さや絆をアピールして、男性アイドルに付随する女性の存在を無化する「偶像」になることに成功している。ジャニーズアイドルは「わちゃわちゃ感」を構築することにより、女性ファンは彼ら男同士の絆の

枠外に置かれ、アイドル同士の関係の内部に立ち入ることはできない。現在、日本のジャニーズファンは、マス・コミュニケーションを通じて表現される男性アイドル同士の親密さを「やおい」や「BL」へ読み替えることを行っている。この場合、女性ファンは彼らのやり取りを外部からの監視者として位置するようになる。

男性アイドルは基本的に、ファンである女性にとっての「王子様」、つまり憧れの恋愛相手としての役割を担う。しかし、近年、特に2000年代以降に人気を博している男性アイドルグループを映すメディアでは、異性愛のメッセージと並んでメンバー同士の強い友情や信頼関係が頻繁に表現される<sup>(66)</sup>。シンデレラ的な「女性を救い上げる男性」イコール「王子様」「選ばれる女性」というジェンダー役割は変質して、男性アイドル像（仮想空間が提供する偶像）は、女性ファンにとってアイドルを身近な自分の好みと合致させやすい「キャラクター」に変質すると同時に、自分とは異性愛関係を結べない「偶像」としても認識構築させている。「恋愛」面で指摘できるのは、異性愛の相手としてのアイドルの多様化である。いわゆる「キャラクター」の種類が増したことで「憧れ」の幅が広がっている。女性ファンにとっては男性アイドルが手の届かない遠い「偶像」ではなく、現実空間にいる「キャラクター」として認識されるようになってきている。

たとえば、現在ジャニーズアイドルの中で最も人気が高いとされる「嵐」は「普通度」の高いメンバーで構成される。「少年隊」の東山紀之<sup>(67)</sup>や、元「NEWS」の山下智久<sup>(68)</sup>のように、一人だけ抜きん出た美貌とスター性を持つメンバーが存在していないことが特徴である。逆にそれが女性ファンの心をとらえ、「最初は〇〇だけ好きだったけど、結局5人でわちゃわちゃしているのが一番いい」「嵐は家族のように仲良く、わちゃわちゃした5人が最高」と言わせる原因となっている。たとえば、メンバーの相葉雅紀は、スタイルが良いとされるが、それは5人のメンバー内の相対評価（嵐は全体的に小柄<sup>(69)</sup>）によるものであり、「近所のコンビニで立ち読みしていきそうな男の子」率

が最も高い。大野智は、普段は置物のように、ぼーと座っていて不器用で気の利いたことを言えないが、歌とダンスでスイッチが入ると別人のようなキレと色気を見せる。櫻井翔は、家柄（父親は総務省事務次官）も学歴も完璧で気配り上手の知性派として売っているが、実生活では長男坊で私生活では気が利かない感じを醸す。二宮和也は、歌を作ったり、演技が上手かったり、トークもさりげなく全体のバランスを把握して調整したり、色々と器用にこなすが、身長だけなら大野より高いはずが手足の短さにより小柄に見えてしまう。松本潤は、俺様だけど甘えん坊に見られるため、母性をくすぐるタイプと言われる。いずれのメンバーも、「隣のお兄さんの親しみやすさ」がファンの心を捉えている。アイドルに能力や美貌を求めていることは、女性アイドルだけでなく、ジャニーズアイドルにも共通して見られる共通する傾向である。

嵐に比較して、SMAPは「わちゃわちゃ感」がないと指摘される。メンバー間に緊張感が存在していることをファンは感じている。理由として、5人のメンバーの中で、年下3人の香取慎吾、稲垣吾郎、草彅剛にとって、年上2人の中居正広と木村拓哉が絶対的存在になっていることが挙げられる。SMAPが結成された時、香取慎吾はまだ小学生であったが、中居正広と木村拓哉は既に高校生であり、その後のメンバー間の関係を規定したと考えられる。しかし、メンバーが脱退<sup>(70)</sup>したり、一時的にメンバーが4人に減員<sup>(71)</sup>になったりしても、解散に至らななかった理由として、適度なメンバー間の距離感が存在したためであり、言いたいことを言い合うメンバー間の信頼感や絆が「わちゃわちゃ感」と違う形で形成されていたことが効果的に働いたためと見ることができ<sup>(72)</sup>る。中居正広は、メンバー間の関係について、「どこに住んでいるかとか、昨日何をしただとか、知ろうと思えばいくらでも知れますけど、日頃メンバーと喋ることはないですね。鮮度を保とうって意識みたいなものはあるかもしれない」と語ったことがある<sup>(73)</sup>。また、「僕の一方的な思いかもしれないですけど、お互いに干渉をせずにやって

るかな。仲よしこよしの、楽しくってしょうがないっていうチームとはちょっと違うので。でも、そこがここまでやってこられた要因だと思えます」とコメントした<sup>(74)</sup>ように、力のあるところである本番のためにネガティブな意味での馴れ合いを意識的に排除してきたため、その分、仕事の間におけるコミュニケーションの精度が高まることが出来ていると分析する。

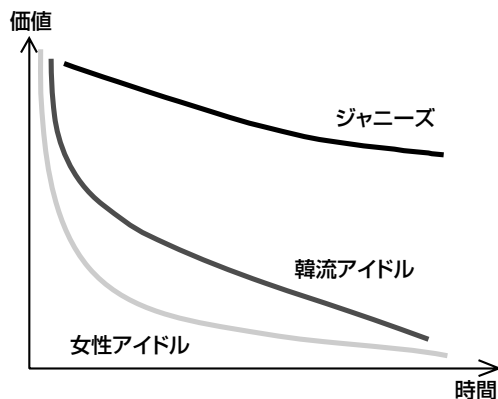
男性アイドルの情報を提供する上で重要な役割を果たすメディアが、女性向けのアイドル雑誌である。「絆」の面から見ると、近年、男性による親しい仲間同士の他愛のないおふざけや遊びの様子は「わちゃわちゃ感」と名指しされることがあるが、アイドル雑誌ではそれがまさに描き出されており、女性読者や女性ファンの存在がほとんどないものとされている。学校の友人や家族との親密性を表すもののほか、男性アイドル同士の親密な関係が「恋愛」と並行して描かれている。また、同性愛的な表現が少なくない。グラビアでは、アイドル同士で抱き合うなどの身体的接触が見られるほか、文章では「グループ内で恋人にするなら」や「〇〇とデート」といった、恋愛と結び付けられやすい表現が見受けられる。

ここで重要となるのは、学校や家での出来事というアイドルの「オフ」の演出である。マスコミでの仕事やコンサートといった従来のアイドル像を描く記事はかつても存在していたが、近年は、オンの姿よりも、むしろ学校生活を通じた友人との触れ合いや家族との関係や日々の出来事が描かれることが目立つようになっている。中でも学生服や私服として提示される服装、生活空間の提示などは、10代の読者に対する「オフ」の演出に大きな役割を担っている。つまり、男性アイドルは憧れの存在であっても手の届かない者ではなく、読者と同じように学校に通い、勉強やスポーツに励み、友人同士の「からかい」や「いじめ」、「失恋」をも経験する悩める者、読者に近い位置にある存在として表現されている。仮想空間における多様なアイドル像（「偶像」）の演出は、現実空間の「キャラクター」を意識的に見せることにより、かつては憧れの存在として「2次元の存在」

として捉えられていたアイドルが、より身近な「2.5次元」的な存在に変化したことを示す。憧れの存在であるアイドルとファンとの関係性は必ずしも従来の「異性愛」ではなく、男性アイドルが女性ファンにとって身近なレベルで自分の好みと合致させやすい存在であると同時に、自分と異性愛関係を結べない存在としても構築されるようになっていく。

#### 4. 「儂い存在」のアイドル

アイドルはうつろいゆくもの、儂い存在である。ファンは常にアイドルに「若さ」「フレッシュさ」を求める。一方で、アイドルや運営者は「いつ売れなくなるのか」と強い不安を抱えながら、少しでも長く人気を保ちたいと考える。たとえば、ジャニーズ事務所側は、ヴァーチャル空間における活動を制限して現実空間における活動を基本とすることにより、図3の通り、仮想空間における「偶像」を長期に亘って維持しようと配慮している。たとえば、「現実空間」における活動、ジャニーズ事務所若手アイドルを総出演させる2か月間のロングラン公演「ジャニーズ・ワールド」(2015年12月11日～2016年1月27日千秋楽、於帝国劇場)などを強化することにより、まだデビューを果たしていない候補生が一斉に振りを揃えるシーンとは別に隣の候補生とは異なるポーズを決めるシーンに、先輩たちのダンスや歌、アクロバ



【出典】筆者が独自に作成

図3 アイドルの時系列価値変化

ット、バトン、マジックなどの演技を横目に「自分が主役」と思いながら「群舞」に参加する「ジャニーズ精神」が先輩から後輩へと受け継がれているメカニズムが垣間見える(筆者の西条・植田は2015年12月22日に観覧した)。また、情報番組や大河ドラマ、紅白歌合戦など、高齢者が好んで視聴する番組に所属タレントを出演させることにより、幅広い世代の支持を得る戦略は、タレントが高齢化した時に若い女性ファンの獲得だけではジリ貧になるのではないかという危機感が背景にある。一方で、2015年10月26日からインターネット見逃し番組配信サービス「ティーバー(TVer)」が提供されるようになった際、フジテレビのドラマ「5→9～私に恋したお坊さん～」は配信されなかったが、出演した山下智久が所属するジャニーズ事務所の「ネット上での転載を認めない」方針が背景にあり、「ヴァーチャル空間」における肖像の氾濫についても徹底した管理が行われている。

君塚[2012]は、韓国アイドル<sup>(75)</sup>との比較において、「日本のアイドルはデビュー年齢が若く未完成であるからこそ支持を集めてきた歴史があるのは周知の事実だが、現実を広く見渡せば高齢化社会と言っていい」と指摘する<sup>(76)</sup>。韓国の音楽業界が若年化している理由として、日本の28分の1しかない狭いマーケットの中で、歌手たちが激しいサバイバルを常に広げていることにあることを挙げている。韓国で近年ヒットチャートを席巻している10～20代が中心のアイドルグループの寿命は約5年と言われており、そこから抜け出して40代まで音楽活動を続けて行くのは至難の業になっている。彼らは「いつ売れなくなるのか」と強い不安を抱え、ネットに悪い噂が書かれていないか、常にチェックしている。そのため、整形や極端なダイエットを繰り返すなど、「自分を改良しなくちゃ」という強迫観念に駆られている。

彼らは多忙でリフレッシュする余裕もない。そのため、韓国アイドルの中には「私たちは日本のSMAPのようにになりたい」との発言がしばしば見受けられる。1988年3月の結成以来、40代に

入ったメンバーがいても、グループとしてのキャリアを続け、さらに個々でも俳優としての活動やバラエティ番組への出演などで十分な活躍していることを「理想的なアイドルグループのあり方」だと捉えた発言である。

2016年1月、SMAP解散報道が伝えられたが、グループ結成（1988年3月）から28年、CDデビュー（1991年9月）から25年の長期に亘りアイドルの最前線に立ち続けて来たことになる。「(世代を超えた歌が生まれにくい世の中で)この国の老若男女みんなが歌える歌を歌って親しまれている」、「広く海外にもあまたのファンを持つ」という形容詞に示されるように、SMAPの存在には常に「抽象性」があり、存在そのものが「作品」であり、いつもアイドルとしての抽象性を失わない社会的「公共財」であった。アイドルとは時代の欲望の反映であり、だからこそ時代と共にアイドルは変わり、消費されて行く。アイドルはうつろいゆくもの、儂い存在であるため、永遠にアイドルであることは構造的に不可能であるが、SMAPはその不可能を可能に近付けてみせた。SMAPは時代と共に最前線に立つアイドルであり続けた。その都度、音楽スタイルも変わり、メンバーそれぞれが俳優やタレントとしても活躍しイメージも変わって行ったが、SMAPは時代を正確に映す鏡としての「アイドル」を一貫して高性能の水準で保ち続けた。それは「奇跡」としか言うことが出来ない「見事さ」をファンに供し続けて来たことになる。

ジャニーズアイドルにおいても、1980年代のシブがき隊や光GENJIまでは、10代の少女ファンに騒がれる人気の絶頂期は5年前後であった。SMAPは歌番組減少という逆境の中で、冠バラエティ番組と人気ドラマに出演し続けることで、幅広い世代に支持された「国民的アイドル」であり続ける方法を確立した。

SMAPに続くジャニーズのグループは皆、SMAPが確立した「息の長いアイドル」としての露出の方法を土台としている。「SMAPのようになりたい」という発言は「太く短く」駆け抜けようと思えるKPOPアイドル達にも、日本の

アイドルと同じように息の長い活動への願望があることの証左である<sup>(77)</sup>。

近年、その傾向はますます強まっている。熱しやすく冷めやすい韓国のファンに向け、次々と新人グループが登場するようになっている。10年前は、年に2～3の新人グループがデビューしている。デビューラッシュが加速した原因に、アジアでのアイドル・ビジネスの成功事例を見て、モデル事務所など、既存の芸能事務所以外の新興勢力が参入してきたことがある。VIXX<sup>(78)</sup>、防弾少年団<sup>(79)</sup>など、事務所が小さくても大健闘するグループが出現している。その結果、生き残り競争が激化して、新人グループもファンにいち早く名前を覚えてもらえるように、数ヶ国語を操るメンバーを入れる等、工夫している。3大事務所であるSM、YG、JYPなど大手事務所も自らの立場を守るため、最もチケットが入手困難な韓国アーティストと言われるEXO<sup>(80)</sup>(SM)、デビュー曲で本国1位を獲得したWINNER<sup>(81)</sup>(YG)、多国籍グループGOT7<sup>(82)</sup>(JYP)という若手グループを登場させ、群雄割拠になっている。また、徴兵制度が大きな壁として存在するため、入隊時期を期限ギリギリの30歳まで延ばすのが通例であるが、それでも日本の男性アイドルと比べれば芸能活動は短くなる<sup>(83)</sup>。日本でも人気を誇る東方神起や2PM<sup>(84)</sup>のメンバーも入隊年齢を迎えるようになった。

一方、女性アイドルの場合は、固定メンバーだけで、男性アイドルのSMAPのように、恋愛しても、結婚しても、支持され続けるグループは存在しない。特に、近年は、インターネットの発達により、ちょっとでも容姿や体型が落ちると、ネット上で「劣化」と騒がれてしまう。1970年代までは「アイドルの寿命は7年」と言われていた。南沙織や山口百恵の活動期間は約7年、ピンク・レディーとキャンディーズは約5年、おニャン子クラブは2年半<sup>(85)</sup>に満たなかった。アイドル出身で女優として活躍している人<sup>(86)</sup>はかなりいるが、一生アイドルとしてやっているのは松田聖子<sup>(87)</sup>や中森明菜に限られる<sup>(88)</sup>。

女性アイドルにとって、フレッシュさは常に重

要な要素となる。AKB48の成功として挙げられることが多い、2008年にデフスターズレコードからキングレコードへのレコード会社移籍第1弾<sup>(89)</sup>という大事なシングル「大声ダイヤモンド」にオーディションで選ばれたばかりの11歳の松井珠理奈が登場していきなりでセンターに大抜擢され、しかもCDジャケットには彼女しか写っていなかったことは、「フレッシュさ」と共に「衝撃」を与えた<sup>(90)</sup>。松井珠理奈をセンターにしたことがAKB48を大きく成長させる結果となり、「大声ダイヤモンド」は、オリコン・ランキングでAKB48過去最高の3位になった<sup>(91)</sup>。人は「フレッシュさ」の時間的な長さに関りがあることによって、「若さ」というものに高い価値を与える。「若さ」「フレッシュさ」は年齢と共に失われるものであり、それゆえに貴重なものである。「若さ」は、子供から大人へと至る途上にあって、その儚さゆえに独自の輝きを放つものであり、アイドルは、そのような「若さ」のかけがえのない魅力が凝縮された存在である<sup>(92)</sup>。

ファンは新しいグループに流れがちである。しかし、アイドル文化が成熟していく中、第一線で20年以上活躍し続けるアイドルグループが出てきてもおかしくないはずである。ビジネス的な側面を考えても、ファン心理を考えても、できることならグループは少しでも長く活動した方が望ましい。「アイドルは25歳まで」<sup>(93)</sup>としばしば言われ、大島優子（AKB48）、道重さゆみ（モーニング娘。）、八坂沙織（SUPER☆GiRLS）、遠藤舞（アイドリズ!!!）、古川愛李、宮沢佐江（SKE48）など25歳でグループを卒業した中心メンバーが目立つ<sup>(94)</sup>。しかし、女性アイドルは、宝塚やプロ野球のようにトップスターが辞めても、また新しいスターが現れるような人材育成システムを構築しつつある<sup>(95)</sup>。学校に通い、オーディションを受けるという道筋を示すことができたため、かつてと異なり新人層は厚くなった<sup>(96)</sup>。世代交代をどう進めるかが、女性アイドルグループの人気を継続する鍵となっている<sup>(97)</sup>。

たとえば、誕生日の2016年4月8日に卒業するAKB48総監督の高橋みなみは2014年12月8

日（AKB劇場デビュー9周年）に「1年後を目途に卒業」することを発表して、後輩の横山由依を後継者に指名して、1年間以上の長い期間を掛けて「世代交代」する準備を行なっている。

AKB48の継続的な人気は、2005年末から続けている秋葉原の専用劇場での公演によって培った、コアなファンの支持基盤の上に成り立っている<sup>(98)</sup>。また、初期メンバーに前田敦子がいたことにより、「AKB48に入りたい」「『マジすか学園』に出たい」という憧れを持って入る後輩が多かったことも、アイドルグループとして継続できた大きな要因であった<sup>(99)</sup>。常設劇場というホームタウンを持って公演を積み重ねることによりアットホームな雰囲気を作り上げると共に、表1の通り総勢252名のメンバーを独自の人材育成メカニズムを基に「世代交代」「新陳代謝」を繰り返しながら「若さ」「フレッシュさ」をファンに与え続けた結果、2005年12月8日の初日公演以来、10年を超える長期に亘ってトップ人気を獲得する女性アイドルグループの地位を維持することに成功した。2015年12月8日には常設劇場で現役と卒業生を合わせた総勢171人のメンバーで「AKB48劇場10周年記念特別公演」が開催された。

表3の通り、現在のアイドル・ブームを牽引するAKB48がデビュー満10周年を迎えた以外にも、2015年は、夏休み期間中にSKE48、乃木坂46、ももいろクローバーZなどがドーム・スタ

表1 AKB48グループ主要メンバー卒業

所属	名前	年齢	発表年月	卒業年月
AKB48	前田 敦子	20歳	2012年3月	2012年8月
AKB48	板野 友美	21歳	2012年3月	2013年8月
AKB48	秋元 友加	24歳	2013年4月	2013年8月
AKB48	篠田麻里子	27歳	2013年6月	2013年7月
AKB48	大島 優子	25歳	2013年12月	2014年6月
SKE48	古川 愛李	25歳	2015年2月	2015年3月
NMB48	山田 奈々	22歳	2014年10月	2015年4月
AKB48	高橋みなみ	23歳	2014年12月	2016年4月
AKB48	川栄 李奈	20歳	2015年3月	2015年8月
SKE48	松井 玲奈	23歳	2015年6月	2015年8月
AKB48	高城 亜樹	24歳	2015年12月	2016年1月
SKE48	宮沢 佐江	25歳	2015年12月	
乃木坂46	深川 麻衣	24歳	2016年1月	

※年齢は発表当時。

【出典】各種情報を基にして筆者が作成

表2 AKB48 活動10年間総括  
(2015年12月8日<10周年>時点)

劇場初日公演	2005年12月8日(観客は7人)
劇場公演総数	3,871公演(出張公演, SDN48を除く)
劇場公演観客総数	1,063,696人
劇場登壇メンバー総数	252人(AKB48のみ)
劇場公演最多出演メンバー	【1位】小林香菜 890回, 【2位】平嶋夏海(卒業) 838回, 【3位】峯岸みなみ 817回
インディーズデビュー	「桜の花びらたち」(2006年2月)
メジャーデビュー	「会いたかった」(2006年10月)
シングル発売枚数	42枚, 総売上枚数 3,615.8万枚(歴代1位)
シングルのミリオン売上作品数	23作(歴代1位) 初ミリオン「Beginner」 102.9万枚(2010) 【1位】「さよならクロール」 195.6万枚 【2位】「真夏の Sounds good!」 182.2万枚 【3位】「ラブラドル・レトリバー」 178.7万枚
全イベントのファン参加総数	11,897,796人 選抜総選挙(7回開催), ジャんけん大会(6回開催), ドラフト会議(2回開催)他
劇場収容人数	250人(いす席145席, 立見105席)
劇場の入場料金	3,000円(税込み), オープン当初は1,000円

【出典】各種情報を基にして筆者が作成

表3 主要女性アイドルグループの2015年活動状況  
(CD売上とライブ会場規模)

	5万~10万枚	10万~50万枚	50万~100万枚	100万枚以上
ドーム スタジアム (3万~6万人)	ももクロ μ's		SKE48 乃木坂46	
アリーナ (1万~3万人)	E-girls ℃-ute 私立恵比寿中学 でんぱ組.inc	HKT48 NMB48 仮面女子		AKB48
大規模ホール (5,000~1万人)	Perfume	モーニング娘。		

【出典】「日経エンタテインメント(2016年2月号)」55p.

ジウムで単独公演を行うなどライブ面でアイドルグループ盛況を継続した。また, 表4の通り, ジャニーズ事務所アイドルは, 嵐を除けばCD売り上げでは女性アイドルグループ(表3)に比べると見劣りするが, 嵐が5大ドームツアーで80万人を動員したのを初め, どのグループもドーム規模, アリーナ規模の動員力を有し, その潜在性は

表4 ジャニーズグループの2015年活動状況  
(CD売上とライブ会場規模)

	10万枚以下	10万~25万枚	25万~50万枚	50万枚以上
ドーム スタジアム (3万~6万人)		KAT-TUN Kinki Kids SMAP NEWS	関ジャニ∞ Kis-My-Ft2	嵐
アリーナ (1万~3万人)	V6 A.B.C-Z タッキー&翼	ジャニーズWEST HeySay! JUMP	Sexy Zone	
大規模ホール (5,000~1万人)				

【出典】「日経エンタテインメント(2015年9月号)」28p.より抜粋

表5 女性アイドルグループのライブ動員力

ライブ会場	アイドルグループ名
メガスタジアム【6万人以上】	ももいろクローバーZ
ドーム・スタジアム【3~6万人】	AKB48, 乃木坂46, SKE48, μ's
アリーナ【1~3万人】	AKB48, NMB48, E-girls, Perfume, モーニング娘., BABYMETAL
大規模ホール【5,000~1万人】 (日本武道館など)	でんぱ組.inc, 仮面女子, 私立恵比寿中学, チームしゃちほこ, アイドリング!!!, Silent Siren
中規模ホール【2,000~5,000人】 (中野サンプラザ, パシフィコ横浜, TDCホール, 豊洲PITなど)	さくら学院, SUPER☆GIRLS, Juice=Juice, PASPPPO☆, 嵐男塾, Negicco, i☆Ris
大規模ライブハウス【1,000~2,000人】 (各地Zepp, 赤坂BLITZ, TSUTAYA O-EAST, 渋谷公会堂など)	フェアリーズ, Rev.from DVL, バンドじゃないもん!, 妄想キャリブレーション, 放課後プリンセス, 東京女子流, ベイビーレイズ JAPAN
小規模ライブハウス・ワンマン未開催	Ange☆Reve, バクステ外神田一丁目, Dream, ふわふわ, ロックジャポニカ, わーすた, つばきファクトリー

【出典】各種情報を基にして筆者が作成

女性アイドルを上回っている。アイドルはかつて, オリコン・ランキングやCD売上枚数(表10)や売上規模(表14)を参考に活動して来たが, 現在は活動ベンチマークがライブ会場規模に移っている。「ライブ・エンタテインメント」の時代になったことを受けて, アイドルのポジショニングを見る指標は, コンサートの動員力(表5)に代わった。

表5のように, メガスタジアム(6万人以上), ドームクラス(3~6万人)は, AKB48グループ, ももいろクローバーZなどが挙げられ, 大規模

ホールクラス(5,000～1万人)は、でんぱ組.inc、仮面女子、私立恵比寿中学と言うように、会場規模によって、アイドルは現在のポジションを測ることが多くなって来た。最近では、会場キャパシティに見合った観客動員を見込めないものの、「その会場でライブを行った」という実績を得るためにライブを行うアイドルも出現しており、能力以上の大きな会場で、アイドルがいか「ライブ」と「会場規模」を重視しているか、が窺える。

アイドルは、単独公演をライブハウス「リキッドルーム」から始め、次が「赤坂BLITZ」、その次は「Zepp Divercity」というように、ライブ会場規模ベースで「成長ドキュメンタリー」をファンに対して見せる。特に「日本武道館」は、数多くのアイドルが目標とする会場であり、「武道館公演」を行うことがアイドルにとって1つのステータス・シンボルになっている。ファンは、会場規模が大きくなっていくことに、「インディーズアイドル」が「メジャーアイドル」へと成長する「過程を流すドキュメンタリー」を見ており、応援するアイドルがどのように成長するかを楽しむ。ファンは現在進行形でメンバーと共に前進している感覚を味わえる。インディーズアイドルから6か国を巡るワールドツアーを実施(2015年)する奇跡を起こした「でんぱ組.inc」が代表事例であるが、その他にも成長過程ドキュメンタリーを見せるアイドルが出現している。

たとえば、顔を仮面で隠してライブを行うアイドルグループ「仮面女子」は、「最強の地下アイドル」と呼ばれる。「地下アイドル」とは、何年も陽が当たらないグループや、何十回とオーディションに落ち続けたメンバー達で構成される「アイドル」などを指し、マスメディアに出ないからこそ出来る過激な演出、奇々怪々なパフォーマンスが小規模ライブハウスで行われるため、会場との一体感、ファンとの近接性はメジャーなアイドルグループをはるかに上回る。ジェイソンマスクの「アリス十番」、ガスマスクの「スチームガールズ」、鉄仮面の「アーマーガールズ」の3つの仮面ユニットから成る「仮面女子」は、候補生を

含めると30名以上のメンバーで構成され、毎日、秋葉原にあるアリスプロジェクト常設劇場「P.A.R.M.S」で公演する典型的な「地下アイドル」であったが、人気の高まりにつれ、2014年10月23日のZepp Tokyo(2,500人観客)を経て、2015年11月23日のさいたまスーパーアリーナで単独公演「地球のおへそ」を開催、観客15,000人を動員するまでに成長した。大規模会場での開催は「無謀」と言われ続けたが、アリーナを埋め尽くすファンを集め、夢を叶えた「地下アイドルの伝説」を証明することになった。

「さくら学院」は、「成長期限定ユニット」を謳い「メンバーは義務教育終了の中学3年生の3月でグループから卒業しなければならない」というように在籍期間を限定することで、世代交代しながら「若さ」「フレッシュさ」を維持してグループの成長を図っている。結果として、「さくら学院」は、1期の三吉彩花や3期の松井愛莉、2期中元すず香と4期の水野由結・菊地最愛の3人から成る「BABYMETAL」(第12項で詳説)のように、卒業後に他ジャンルで更なる活躍を遂げるOGを輩出することにより、一時的に有力メンバーを失い大幅な戦力ダウンを余儀なくされるが、グループとしてのブランド力を高め、少しずつ大きな規模でライブが出来るようになっていく。

また、「モーニング娘。」のプロデューサーであった「つんく♂」が喉頭ガンで声帯を失い、ハロー・プロジェクトの総合プロデューサーの座を退いたが、ハロー・プロジェクト所属で2013年にデビューした「Juice = Juice」は、直木賞作家・朝井リョウのアイドル小説「武道館」原作のテレビドラマ(2016年2月6日スタート、フジテレビ)の主役に抜擢されることになった。テレビドラマ「武道館」は、2013年のNHKの朝の連続ドラマ「あまちゃん」以来のアイドルドラマとなる。かつて、歌とドラマ、アイドル歌手と女優は分離されていたが、融合される新しい試みであり、注目される。架空のアイドルユニット「NEXT YOU」が日本武道館公演を目指すというストーリーであるが、Juice=Juiceは、2015年秋から2016年秋にかけて220公演に及ぶ単独ライブのロングツアーを取

行中であり、220公演を終えた暁に悲願の日本武道館公演となると、ドラマとリアルがリンクすることになる。表5は、女性アイドルグループのライブ動員力をまとめたものであるが、「Juice=Juice」は、現在、中野サンプラザ、パシフィコ横浜、TDCホールなど2,000～5,000人を収容する中規模ホールへの動員力は有しているが、日本武道館公演が実現すれば、ワンランク上のアイドルへステップアップすることになる。

AKB48グループでは、国内4番目の姉妹グループである「NGT48」専用劇場「NGT48劇場」が2016年1月10日、新潟・万代地区（商業施設「ラブラ2」）にオープンする他、乃木坂46姉妹グループ「櫻坂46」、解散した「Berryz工房」の流れを汲むハロプロ「こぶしファクトリー」（2015年日本レコード大賞最優秀新人賞受賞）と「つばきファクトリー」、スターダストプロモーション「3Bjunior」、アクターズスクール広島出身「SPL∞ASH」、エイベックス「わーすた」などの新グループが誕生する一方、2015年末「NHK紅白歌合戦」では、ジャニーズ系7組や声優アイドル「μ's」が出演する中、「ももいろクローバーZ」、「SKE48」、「HKT48」、「水樹奈々」が落選するなど、アイドルグループは「世代交代」「新陳代謝」を求められる大きな「転換点」を迎えている。

一方で、2015年3月3日に日本武道館でラストライブを開催したBerryz工房<sup>(100)</sup>のように、同じメンバーで続けるグループが継続することは難しくなっている。2004年にメジャーデビューを果たした時は平均年齢10.7歳であったが、全員小学生であった7人のメンバーも11年間の活動を経て23歳になって、アイドルとしての活動を終えるしかなかった。7人は公表前にハロプロ同期生である℃-ute<sup>(101)</sup>メンバーに活動休止を伝えたが、置かれた状況は℃-uteも同様である<sup>(102)</sup>。それが男性アイドルグループとの大きな違いである。メンバーが変わっても存続するAKB48グループやモーニング娘。<sup>(103)</sup>を除くと、Berryz工房同様に活動休止となる女性アイドルグループは続出すると推察される。

かつて、紅白歌合戦出場（2011年）、東京ドーム公演（2013年）など、少女時代と共に「K-POP」ブームの先駆けとなったKARAは、主要メンバーのパク・ギョリとハン・スンヨンが25歳を超えると人気は急降下、2016年1月に解散を発表するに至った。未熟な「アイドル」が「夢」（たとえば武道館公演など）に向かって頑張るから、ファンも一緒にその「夢」に乗ることができるが、「高み」を見たKARAが解散を発表した時には、パク・ギョリとハン・スンヨンは27歳、ク・ハラは25歳になっていた。

更に、国立競技場や横浜アリーナなど首都圏のライブ会場が相次いで閉鎖、改修などを行い会場が不足する「2016年問題」がアイドルにも影響する。表6の通り、決定しているだけでも、さいたまスーパーアリーナ（東京五輪「バスケットボール」会場）、横浜アリーナ、渋谷公会堂、日本青年館などが挙げられ、代々木第一体育館（東京五輪「ハンドボール」会場）、日本武道館（東京五輪「柔道」会場）、中野サンプラザなども改修工事や建て替えの予定がある。一時的に6万席余

表6 改修・閉鎖が予定されている主なコンサート会場

会場	キャパシティ	内容
さいたまスーパーアリーナ	37,000人	2015年12月～16年8月、改修工事のため閉鎖
大阪城ホール	16,000人	2016年1月7日～3月6日
横浜アリーナ	17,000人	改修予定 (2016年1月12日～6月30日)
渋谷公会堂	2,084人	2015年10月以降閉鎖、2018年度に再開予定
日本青年館	1,360人	2015年3月末閉鎖、2017年4月に再開予定
東京国際フォーラムホールA	5,012人	短期改修（2016年1月）
東京国際フォーラムホールC	1,502人	短期改修（2016、2017年）
日比谷公会堂	2,074人	建て替え（2016～2020年）
サントリーホール	2,006人	改修（2017年、半年間）
神奈川県民ホール	2,493人	改修（2017年、11か月間）
国立代々木競技場 体育館	第一体育館 13,243人 第二体育館 4,195人	改修工事が必要（2018年）
日本武道館	14,471人	改修未定
中野サンプラザ	2,222人	2021年以降に一時閉鎖、再開予定
青山劇場	1,200人	2015年3月末閉鎖

【出典】「週刊東洋経済」2015.12.26-12016.1.2,192p.を基にして筆者が作成



りが使用できなくなる期間が出て来る。また、旧国立競技場は騒音問題から単独公演が出来たのは、SMAPや嵐、AKB48、ももいろクローバーZ、ドリームズ・カム・トゥルーなど僅か6組に限られるが、新国立競技場（東京五輪「陸上競技」「サッカー」会場）も当初の「様々なイベントに対応できる開閉式の屋根」ではなく、「原則として競技機能に限定」「屋根は観客席の上部のみ」となったため、音楽ライブ会場に用いることは難しい。2016年10月に味の素スタジアム横に完成する1万人クラスの体育館、2020年に完成する五輪用の「有明アリーナ」（15,000人）（東京五輪「バレーボール」会場）など新会場が使えるまで「会場不足問題」は継続される見込みである。

「会場不足問題」の影響を受け、ドームレベルの単独公演を開催してきた嵐は、2016年には表7のように2007年以來、9年ぶりに規模を抑えたアリーナ公演（17公演、17万1,000人動員予定）を実施、1日2回公演に挑戦する。乃木坂46は、2013年から毎年、デビュー記念日の2月22日にライブを行うことが恒例であったが、大規模会場が抑えることができなかったため、開催時期を延期することを発表した。

表7 嵐の2016年アリーナ公演日程表

月日	会場	開演時間
4月23日	サンドーム福井	13時, 18時
4月24日	サンドーム福井	15時
5月7日	広島グリーンアリーナ	13時, 18時
5月8日	広島グリーンアリーナ	15時
7月23日	静岡エコパアリーナ	18時
7月24日	静岡エコパアリーナ	12時, 17時
7月30日	鹿児島アリーナ	13時, 18時
7月31日	鹿児島アリーナ	15時
8月6日	長野 M-WAVE	18時
8月7日	長野 M-WAVE	12時
8月9日	横浜アリーナ	18時
8月10日	横浜アリーナ	12時, 17時

【出典】各種情報を基にして筆者が作成

嵐や乃木坂46の他にも、メガスタジアム（6万人以上）、アリーナクラス（1～3万人）や大規模ホール（5,000～1万人）の会場が首都圏で減ってしまい、安定して同クラスを埋められるアイドルグループや、中規模ホール（2,000～5,000

人）から次のステップへ進もうとしているグループのための会場が一時的に減り、ライブ会場を取り合いになってしまう事態が懸念されている。同時に、ライブハウスから中規模ホール（2,000～5,000人）へと上り詰めようとしている発展途上グループも同様の状況に直面する。音楽産業全体がライブビジネスに主軸を置くようになった「ライブ・エンタテインメント」全盛の現在、単純にライブが出来なくなってしまうことは、アイドルグループにとって非常に大きな痛手となる。数万人規模の会場を使っていたメジャーアイドルが国立競技場やアリーナの改修により、数千人規模の会場を使うようになれば、「玉突き現象」によって数千人規模を使っていたアイドルが数百人規模の小さな会場を使うことになる。メジャーアイドルが規模を縮小した会場に移ることは、メジャーとインディーズというように完全に二極化していたアイドルグループの現状を融解する。集客力が劣る下位グループは交通の便の悪い会場（北関東の会場で2日間開催）に押しやられ、採算圧迫により体力の消耗を強いられた結果、「淘汰」が進むことも考えられる。「アイドル・ブーム」でたくさんアイドルグループが活動しているが、実態は、ビジネスとして成立しているグループは少なく、どのグループも知名度が低く集客できないと苦しんでいる。

全国に1,000グループ存在するとも呼ばれるアイドルグループの運営者が考えるのは、ジャニーズやAKB48グループの成功ノウハウを学ぶという方法である。たとえば、AKB48の成功理由として、(1) 劇場公演、(2) 握手会、(3) センター制度、(4) 選抜制度、(5) 姉妹グループの存在、(6) 選抜総選挙、(7) ドキュメンタリー映画、(8) 大人数でのパフォーマンス、などの運営手法が挙げられる。しかし、同様に成功するアイドルグループはなかなか生まれて来ない。理由として経済学的に考えれば、次の3点が挙げられる。

第1に「先行者利得」である。成功したアイドルグループは、そのジャンルで確固とした地盤を築いており、後発のグループにとっては、参入障壁が高過ぎる。アイドル・ビジネスは誰でも出来

そうに見えるが、既にシステム化され、かなりのマーケットシェアを確立しているため、表面的な行動は真似できて、グループが自律的に成長することは真似できない。たとえば、「アイドル活動に興味を持っていない、隠れたアイドル向きの逸材をいかに発掘するか」という人材発掘システムや未経験に近いメンバーを直ぐにステージに登場させる育成システムなどは、その一つであろう。

第2は「比較優位」である。成功したグループは、自らの資源を最大限に活かしている。メジャーアイドルが成功したのは、他のアイドルグループより比較優位があったためである。経営資源は、メンバーやスタッフ（楽曲、ダンス、衣装）など人材、公演劇場、過去のメンバーが生んだブランド力など、資源の賦存状況はグループによって異なる。後発のアイドルグループが、メジャーアイドルと比較優位構造を備えていることは、ほとんどあり得ない。そのため、後発グループが成功したグループを真似してもなかなか上手くいかない。逆に、他のグループがやっていないことを考え、「差別化戦略」を採るべきである。

第3に、本当の成功理由は、表面を見ただけでは分からない「見えざる資産」（伊丹 [2012]）にある。ジャニー喜多川や秋元康のような卓越したリーダーだからこそ思い切ったリーダーシップを発揮でき、持続的なアイドルグループが誕生する。飛び抜けたリーダーは高リスクを覚悟の上で、資源を活かしたグループ誕生の方向に資源を集中させることが可能である。他のグループでは、体力的にそのようなリスクを負うことが出来ない。

以上見たように、インディーズアイドルがメジャーアイドルへと上がる登坂路は、極めて細い道である。

## 5. 「現実空間」と「仮想空間」

1970年代にアイドルとして人気を博したピンク・レディーとキャンディーズは、そのモデルをまったく異にした。ピンク・レディーがそれ以前のアイドルと同様に「仮想空間」における「偶像」を演じ続けるのに対して、キャンディーズは「現

実空間」における「キャラクター」になろうとした。ピンク・レディーは、最初から、作詞・阿久悠、作曲・都倉俊一、振り付け・土居甫、歌・ピンク・レディーというチームで、仮想空間における「偶像」を企画されたものであった。「偶像」として完成されたピンク・レディーには、子供のファンが多かった。阿久悠は、まるで映画の舞台を変えるように未確認物体からシンドバッド、ピンクのサウスポーからモンスター、透明人間まで様々なモチーフを取り出した。阿久悠はピンク・レディーの方向性を「絵空事路線」と呼び、ピンク・レディー自身も生身の人間ではなく、「偶像」として消費された。後に未唯mieと改名したミーは「自分たちは操り人形だった」と当時のことを振り返っている<sup>(104)</sup>。

一方、キャンディーズは生身の女の子として自己主張したことにより、大学生から熱狂的な支持を得た。キャンディーズには、日本初の全国組織型ファンクラブ「全国キャンディーズ」（略称「全キャン連」）が生まれ、このファンクラブが解散コンサートへと進んで行くキャンディーズを様々な形でサポートした。ピンク・レディーが「偶像」消費型のアイドルの原型だとすれば、キャンディーズはファンを巻き込む形のアイドルの原型であった<sup>(105)</sup>。

一般的に、「仮想空間」のファンは、「偶像」が劣化しないこと、変わらないことに魅力を感じるが、「現実空間」のファンは、うつろいゆくもの、儂い存在を愛するという違いがある。「現実空間」における「キャラクター」になろうとしたキャンディーズは、解散することにより、自らがうつろいゆくもの、儂い存在であることをファンに向けて体現したが、キティちゃんやミッキーマウス、サザエさんなどのキャラクターと異なり生身のピンク・レディーが劣化しないこと、変わらないことを続けることは不可能<sup>(106)</sup>であり、大人気を博した後に「仮想空間」のファンが離れるのはあっという間であった。濱野 [2012] は、「アイドルとは人間とキャラの中間体」とであると定義<sup>(107)</sup>し、斎藤 [2011] は「人間は成長するがキャラは成長しない」と指摘する。

境 [2014] は、「アイドル」の定義として、① 18歳までにデビューし、②歌手であり、③歌唱以外の様々な領域でメディアを跨いで活躍すると定義したが、北川 [2013] は「カラーテレビの普及と高度経済成長による若年層の経済力の上昇によって成立した、メディア上で活躍する魅力的な人たち」と定義して、「テレビを中心としたマスメディアを通しての、一方通行の関係で疑似恋愛関係」を前提とした。更に北川 [2013] は「AKB48を中心とした多くのグループアイドルは、『会いに行ける』を標榜し、公演、アイドル、イベント、握手会<sup>(108)</sup>などを積極的に行き、直接コミュニケーションを可能にしている」点で「アイドルとは異質の存在」と捉えた<sup>(109)</sup>。AKB48が特別な存在になることができたのは、常設劇場を持つように音楽のライブを中心としたことに加えて、握手会、総選挙という音楽ではない「現実空間」における価値を提供したためである。たとえば、ファンは握手会でアイドルと直接話す機会があり言葉を交わすこともできるようになった。足繁く通っているファン<sup>(110)</sup>、印象の強いファンはアイドルからも個人として認識される。ライブアイドルの現場においては、ファンとアイドルの間に一対一の関係性が成立し、2人だけのストーリーがファンの数だけ生まれる<sup>(111)</sup>。

「AKB48 ブーム」は、テレビから押し付けられるのではなく、劇場に見に行くという行為を通じて、現実感のある自分の楽しめる「現実空間」を自分で作って行く感覚が現代的であることが関係している。現在ファンが大切なものと認識されるものは、「現実空間」に生きる重みを感じながら、自分の手で楽しみを作って行くことにある。このアイドルの常設劇場は、秋葉原「AKB48 劇場」が最初であったが、その後、名古屋・栄 (2008年8月)、大阪・難波 (2010年10月)、福岡・博多 (2011年11月)、新潟・万代 (2016年1月)の姉妹グループが使う劇場、でんぱ組 inc. が所属する「秋葉原ディアステージ」(2007年12月)、「原宿駅前ステージ」などが開設された。

特に、2015年8月24日にオープンした「原宿駅前ステージ」は、従来の「ステージと客席」で

はなく「ランウェイと客席」により構成され、客席から至近距離でアイドルを観ることができると、ライブが非常に盛り上がり、ファンはより一層「現実空間」を楽しむことが可能である。正統派アイドルグループ「ふわふわ」他、モデル風、ダンス系、アクロバティックなど、個性の異なる4組のグループ、12歳から19歳の総勢39名がパフォーマンスを披露し、連日盛況となっている。荻野目洋子、観月ありさ、西内まりや、フェアリーズらが所属する大手芸能事務所「ライジングプロダクション」が手掛けるプロジェクトであり、主に竹下通りでスカウトされた美少女たちにより、正統派アイドル「ふわふわ」、ダンスが得意な「原宿ステージA」、美脚が持ち味の「原宿乙女」、アクロバットが得意な「ピンクダイヤモンド」の4ユニットから成る「原宿駅前パーティーズ」として構成されている。「ふわふわ」は、パステルカラーのドレスで登場し、ちょっとした動きにもファンは萌える。ダンスパフォーマンスチーム「原宿ステージA」の衣装はチャリーディングをモチーフにしており、ファンは勝手に応援してもらっている気分になる。ジャケットにパンツルックの「ピンクダイヤモンド」がバク転、バク宙などアクロバティックなパフォーマンスで魅了すると、学校のチャイムが鳴り響く。平均身長167cmで長い脚が特徴的なモデルユニット「原宿乙女」は曲中でマジックを披露したり、撮影大会があったり、客席ファンにチェキをプレゼントする。これら「原宿駅前パーティーズ」は週末を中心に活動を続け、100席ほどしかない客席は1,500円のチケットにプレミアムが付くほどの人気(約40倍)となっており、2015年12月24日限定のクリスマス公演は、LINE 動画配信 (LINE ライブ) が128万8,000視聴という驚異的な数字を記録した。

LINE 動画配信は、2015年12月10日に始まったばかりのサービスであるが、視聴者は対話アプリ (日本国内は5,800万ユーザー) と別の専用アプリをダウンロードすることにより、公演中のコンサートをスマートフォンでどこでも見ることが可能である。ダウンゴが手掛ける「ニコニコ生

放送」サービスに続く生中継サービスが登場することにより、テレビに代替するサービスになると注目されていたが、それを「原宿駅前パーティーズ」が実証する形になった。LINE 動画配信は、テレビ番組では視聴者が少なくて放送できないようなリアルタイムの映像を届けることができるため、テレビ番組に飽き足らずテレビ離れを進めた若者世代が視聴するメディアとしてテレビを代替することを示す証左となった。

## 6. アイドルを応援するファン心理

現在、「アイドル戦国時代」と呼ばれながらも、多くのアイドルグループが存在することができるのは、かつてのアイドルのようにテレビに頼らず、1,000人規模のワンマンライブを行うライブ活動重視に構造変化したことに理由がある<sup>(112)</sup>。現在のアイドルは、イベント出演やグッズ販売などで、手堅く収入を得られるビジネスモデルが確立されているため、小規模なビジネス単位でも参加が比較的容易となっている。また、地方では、自治体や地元企業のイベントなど、活躍の場が意外と多く存在する。活動費用は掛るものの、節約のため、東京まで何時間もかけて車で集団移動し、ライブに出演したというエピソードは美談としてファンに受け止められ、ファンに「応援したい」と思わせるアイドル性につながる。アイドル成功の鍵は、本人たちのビジュアルや才能ポテンシャルはもちろんであるが、アイドルにストーリーや個性を持たせる「プロデュース力」が大きく関わる。たとえば、デビュー前は路上ライブをしていた「ももいろクローバーZ」は、ステージにプロレス要素を取り入れたり<sup>(113)</sup>、7日間連続のトークライブを企画したり、「大人の悪ふざけ」的試練を彼女たちに与え続け、動員を伸ばすことに成功した<sup>(114)</sup>。

ライブパフォーマンスのレベルを高めて、無理のない適正規模の会場で定期的にライブを行うことができればファンが定着する、宝塚歌劇団のようなビジネスモデルになっている。宝塚のように拠点を持っている訳ではないが、ライブを行えば、応援してくれるファンが一定数集まるため活動継

続が可能になる。汗を流している女の子に共感して、一緒になって喜びを分かち合うというストーリーを作ることが重要である。フジテレビ「笑っていいとも」でAKB48の指原莉乃は「アイドルはダンスも歌もちょっと出来ない子の方が、人気がある」と指摘したが、アイドルのファンは「アイドルは出来ないからこそいいんだよ」と応援するため、アイドルは拙いところがそのまま魅力になる。アイドルには必ずプロデューサーがおり、少なからず「やらされてる」感があり、それも別の意味でアイドルの魅力となる。アイドルからもたらされるものが成熟した表現になれば、別ジャンルの完成度を要求されるようになるが、それはアイドルではなくミュージカルスターや演歌歌手になってしまう。アイドルファンは「アイドル」に対して「ディーヴァ」(女神)を求めている。境[2014]は、「アイドル」の定義として、①18歳までにデビューし、②歌手であり、③歌唱以外の様々な領域でメディアを跨いで活躍すると定義したが、4番目の定義として、④総じて目の覚めるような美貌や素晴らしい声と歌唱力、見るものを唸らせる演技力といった実力に恵まれていない、を挙げている<sup>(115)</sup>。

境[2014]は、アイドルとしての「偶像」は「実力派」の対立概念として意識されたものであると捉え、四方田[2006]は「かわいい」の定義として「近寄りやすい」「胸がキュンとして守ってあげたくなる」「緊張を解き、心を和ませる」「子供っぽい」「行動的でおっちょこちょいで庶民的」「無邪気で丸っこくて暖かい」「不完全なところがある」「小さくて華がある<sup>(116)</sup>」「自分が愛することがまだ可能だと思える」などを示す。アイドルとして「不完全さ」を売りにした元祖は1976年に資生堂バスボンのCMでブレイクした松本ちえこであり、バスボンのCMソングやシングル「恋人試験」の歌詞の中には自らのことを「まんまる顔」「太い足」「まあるいお鼻」と表現した箇所がある。また、おニャン子クラブが1986年に秋元康の作詞で発表した「会員番号の唄」では、メンバー各自が自己紹介するコンセプトで「細い目」「背がちっちゃいの」「でっかい口」などと歌う箇

所があった。近年、モデル出身の増加に伴い、杏、松下奈緒（174cm）、松嶋奈々子（172cm）など高身長的女優が増えている<sup>(117)</sup>のと反対側の位置にある。

たとえば、「乃木坂46」<sup>(118)</sup>では「女性アイドルの王道」と呼ばれるのが西野七瀬<sup>(119)</sup>であり、正統派美人の白石麻衣<sup>(120)</sup>と対称的に捉えられる。結成当初から注目されたメンバーは生駒里奈<sup>(121)</sup>、白石麻衣、生田絵梨花<sup>(122)</sup>の3人であり、結成当初、西野七瀬はまったく注目されなかった。愛らしい顔ではあるが、その他大勢の容姿が優れたメンバーの一人として埋もれる水準であり、印象に残らず期待されていなかった。そのため、繰り上げの選抜メンバーであり、福神メンバー（更に乃木坂46で推されたメンバー）<sup>(123)</sup>から漏れる位置にいた<sup>(124)</sup>。西野七瀬が初めて福神メンバーに選抜されたのは3rdシングル「走れ！Bicycle」である。さびしがり屋で甘えん坊、ネガティブ思考で番組企画でもちょっとしたことで泣くことが多い<sup>(125)</sup>。人見知り、泣き虫、絵が上手い<sup>(126)</sup>というキャラクターが注目され、スラリとした容姿、人を惹きつける透明な雰囲気、ファンへの人当りの良さが次第にファンの間に浸透するようになると、人気上昇していく。西野七瀬が圧倒的な1番人気を得た理由として、どんなファンに対しても毛嫌いせず優しく話し掛けてくれそうな雰囲気を醸し出している所があるためと指摘されるが、そのような人柄が「守ってあげたい女性アイドル」の王道タイプにたとえられる。美貌や知名度では西野七瀬を上回る白石麻衣や橋本奈々未に対しては、ファンはその辺りを想像できないため、ファン人気で西野七瀬に勝つことができなくなっている<sup>(127)</sup>。現在、西野七瀬は握手会人気では圧倒的な第1位<sup>(128)</sup>であり、コンサートの声援も一人だけ桁違いである<sup>(129)</sup>。結果、プロデューサーである秋元康<sup>(130)</sup>は、世間の知名度は低いがファンには絶大な人気を誇るようになった西野七瀬を8thシングル「気づいたら片想い」で初めてセンターに抜擢した。10thシングル「何度目の青空か？」で学業から復帰したばかりの生田絵梨花に1回譲ることはあったが、西野七瀬は、9thシングル「夏

のFree&Easy」、11thシングル「命は美しい」でもセンターを続け、「女性アイドルの王道」として不動の地位に就いている<sup>(131)</sup>。「無口で泣き虫のシンデレラストーリー」<sup>(132)</sup>が乃木坂46を人気グループに押し上げることに成功している<sup>(133)</sup>。

総じてアイドルファンは「今はダメだけど頑張っている」タイプを応援するため、指原莉乃が指摘するように「アイドルはダンスも歌もちょっと出来ない子の方が、人気が出る」傾向がある。その中で、AKB48メンバーの大島優子と山本彩は身長が高くないという点ではアイドル的ではあるが、「何でも出来るにも関わらず、ファンが応援したくなる」と言う点でアイドルとしてはかなり異質な存在である。たとえば、山本彩は、バンド経験、ダンススキル、歌唱力、性格（不器用でまっすぐ、泣かない）、「さや姉」と呼ばれる存在感、生き様（誰よりも強がる）、熱狂的タイガースファン（2016年2月沖縄キャンプも訪問）など、アイドルには必要としない部分をかなり多く備えており、元来、アイドルとしては人気が出にくいタイプであるにもかかわらず、年々その人気を高めている。2015年下半期、視聴率が27%を超えるなど人気であったNHK朝の連続ドラマ「あさが来た」の主題歌「365日の紙飛行機」でセンターを務め、年末の紅白歌合戦でも、ドラマに出演した波瑠や玉木宏がステージに上がる中、ギター演奏しながらメンバー56人の中に入っても消えない声を披露した。また、2015年2月に発売した写真集「SY」が10万部を突破して年間3位になるなど、人気グラドルとしての側面も持つ。かつて安室奈美恵やSPEEDなどがアーティスト志向を強め、脱アイドルを目指したのに対して、山本彩は「アイドルではないアイドル」として新時代のアイドルモデルを提示し続けている。

## 7. テレビアイドルからの離脱

AKB48は、スタート時から、テレビと組まない戦略を採り、アイドル的ではあるが、既に仮想空間的アイドルという存在ではないところからス

スタートしている。彼女たちの活動は、携帯やインターネットなどのメディア力が徐々に強くなったことによって起こったテレビメディアの弱体化と、複製技術の進歩とCDの売り上げ減少の中で、ライブ中心の活動に集約された。1980年代にアイドルを作り出すメカニズムの中心にあったテレビの力は効果を持たなくなっていることをプロデューサーの秋元康は察知していた。現に、おニャン子クラブの解散以後、1989年の「乙女塾」、1991年の「桜っ子クラブさくら組」、1998年の「チェキッ娘」など女性アイドルグループがテレビ番組の中で結成され、局のバックアップ体制の中でデビューしたが、いずれも、おニャン子クラブほどの成功を収めるには至らなかった。2006年10月に「おニャン子クラブ」を目指して9人で結成された「アイドルリング!!!」は同月放送開始したフジテレビの冠番組を基盤にライブ活動を行っていたが、多くのアイドルグループの中から抜け出せず、2015年10月31日に解散することに至った<sup>(134)</sup>。伴って冠番組も9月に終了した<sup>(135)</sup>。解散した「アイドルリング!!!」メンバーは、ソロ活動をする横山ルリカ、新グループを作る佐藤麗奈ら、新天地へ移ることを余儀なくされている。

「アイドルリング!!!」が目標として目指した「おニャン子クラブ」は、活動期間わずか2年半の短期間で1980年代に一世を風靡したのに対し、「アイドルリング!!!」は活動した9年の長期間に亘ってフジテレビが冠番組を与え営業努力し続けたにも関わらず、ブレイクするアイドルを輩出したりヒット曲を生み出したりすることが出来なかった。アイドルリング!!!の菊地亜美が2012年1月25日にフジテレビ「笑っていいとも!」に出演した際、AKB48指原莉乃に対して「私はAKBをライバルと思っているんですけど、相手にされていないんです」「私達はこんなに頑張っているのに人気が出ないんです!」と本音をぶつけた。

2009年、アイドルリング!!!はAKB48とコラボレーション(ユニット「AKBアイドルリング!!!」)結成、1stシングル「チューしようぜ!」リリースしているが、ほぼ同じ活動期間を経た両者を「成功」と「失敗」へと分けたものは、「テレビの時

代が既に終わった」という時代変化を見通せていたかどうか、端的に言えば採用したメディア戦略の違いにある。AKB48が採用した、アイドルが専用劇場を持ち毎日公演するという試みは、テレビメディアに依存していた音楽産業に転換を迫り、現在では音楽産業全体がライブビジネスに主軸を置くようになった「ライブ・エンタテインメント」の橋頭保になった。

たとえば、テレビメディアが強力であれば、地方にSKE48(現在70名在籍)、NMB48(現在60名在籍)、HKT48(現在47名在籍)、NGT48(現在26名在籍)<sup>(136)</sup>などの姉妹グループを作るといふ発想にはならなかったはずである。地方でオーディションを行い、AKB48に所属させれば良いはずであった<sup>(137)</sup>。姉妹グループは人材発掘という点でも大きな役割を果たした。かつて、地方出身のアイドルは、覚悟を持って上京してくることを求められたが、親元から通える地域密着型グループであれば、オーディションを受け易くなる。SKE48・松井珠理奈、HKT48・宮脇咲良らが「姉妹グループができなかったら、オーディションを受けなかったと思う」と話すように、地元で活動できることがアイドルになることのハードルを大きく下げた。地方に受け皿が出来、優秀な原石が参加し易くなったことにより、人気グループが地方に生まれるという流れを生んだ。AKB48姉妹グループの成功により、同様に地方を拠点とするアイドルグループが急増することになる。

AKB48グループ以外でも、「ももいろクローバーZ」を生んだ「スターダストプロモーション」は、名古屋「チームしゃちほこ」、大阪「たこやきレインボー」、福岡「ばってん少女隊」を誕生させている。現在では、地方に数百組のアイドルグループが存在すると言われる。これら「地方アイドルグループ」の活動を支えているのが、「CD(販売価格1,000円、原価200円)」や「DVD(販売価格3,500円、原価300円)」の他、「タオル(販売価格1,000円、原価100円)」、「Tシャツ(販売価格2,500円、原価500円)」、「クリアファイル(販売価格500円、原価30円)」など低原価率のグッズを販売する「物販」ビジネスである。

「新規グループの立ち上げは100万円あれば十分」「コアファンが30人集まればビジネスは成立する」「月6回公演で物販の利益は30～35万円」とも言われるが、グループ間競争は激しい。

全国放送のテレビで一気に全国区アイドルになるという構造は完全に崩壊してしまっている。かつてのようなテレビメディアを介して一気に全国区としてブレイクするモデルはなくなり、各地域の「現実空間」で地道なライブ活動を続けて地盤を固めると共に「ヴァーチャル空間」で自ら情報発信することによりブレイクを目指すモデルへと移行してしまった。地方ファンにとって地元の「現実空間」にいるアイドルの方が応援しやすく、アイドルにとっても「ヴァーチャル空間」で情報を上手く発信して売れば、全国あるいは全世界から注目される可能性がある。

2013年、福岡を拠点に活動するローカルアイドルグループ「Rev.from DVL」のメンバーである橋本環奈<sup>(138)</sup>が「ヴァーチャル空間」であるインスタグラムに投稿された「奇跡の一枚」と言われる写真をきっかけに「天使すぎるアイドル」「千年に一人の逸材」と言われ、一気に全国区へととなった。きっかけとなった写真は、福岡在住のファンが2013年5月に撮影し、自らのブログに撮影してから半年後にSNSや「2ちゃんねる」掲示板およびそのまとめサイトを通じて急速に広まった。全国的にはほぼ無名という状況が一変し、短期間のうちに全国区的な人気を獲得、以後、「Rev.from DVL」に所属しながら、ソロ活動という形で多数のテレビCMやバラエティテレビ番組に出演するなど幅広い活動を展開している。2016年春には角川映画「セーラー服と機関銃」で映画初主演を果たす。グループアイドル全盛の中でソロアイドルとして活躍できるのは、圧倒的な存在感を持つ高いポテンシャルを感じさせる稀有な存在であるが、「ヴァーチャル空間」にいる一人ひとりが情報発信と拡散の担い手となるSNS時代が生んだ人気アイドルと捉えることができる。

福岡では、松田聖子、酒井法子、元AKB48の篠田麻里子など数多くのアイドルを輩出してきたが、短期大学にアイドル養成学科<sup>(139)</sup>を作るとこ

ろも出てきた。また、全国的にも「ユニドル」(「ユニバーシティー・アイドル」)と呼ばれる大学生生まれのアイドルも誕生している。アイドル好きの女子が、芸能事務所には所属せず、学内イベントで歌やダンスを披露するアイドル活動を行っている。一般人とアイドルの距離が近くなり、「会いに行けるアイドル」から「隣にいるアイドル」のような親近感を与える存在となっている<sup>(140)</sup>。

表8の通り、ソロアイドルはパフォーマンスに関しては、誤魔化しがきかないため、高いレベルでないと成立しない。地方の小規模アイドルグループの方がアイドルとの距離感や支持している実感が得られやすいため、地方ごとにアイドルグループが定着し何かの形で全国区になり得る<sup>(141)</sup>。2001年に広島で結成されたPerfumeが全国区となるまで6年を要し、2005年に秋葉原に専用の劇場をオープンさせたAKB48も全国区までには4年掛っている<sup>(142)</sup>。AKB48グループによる大人数でのパフォーマンスは、テレビの音楽番組における歌唱場面において、グループメンバーが次々と順番に歌い見る者を飽きさせない、大会場

表8 「ソロアイドル」と「グループアイドル」の比較

	ソロアイドル	グループアイドル
楽曲 世界観	最初から最後まで本人の声でイメージを伝える。歌詞の世界観も本人から着想されたものが多い。高い歌唱力が求められる。	フレーズごとの歌割りで色々な声で歌詞を紡ぐ。イメージも全体、もしくはある程度汎用的で幅広い解釈できるものが多い。
ライブ 演出	一般アーティストと同様に会場の全視線が1点に集中するため、効果的演出が可能。オーディエンスとの信頼関係も必須である。	ステージ上でフォーメーションを作ることで派手な演出ができる。また、ダンス、歌、MCなどの役割分担することが可能である。
ファンの 見方	見るべきポイント、聴くべき歌声を集中できるため、ライブやトークイベントなどでの充足感は圧倒的に高い。	歌やダンスの技術力で楽曲に対する貢献度が大きく変わるが、端で一生懸命頑張る姿に価値を見出して応援もできる。
メディア 出演	イメージに沿った起用で、グラビアなど作り込みたい作品で好まれる。逆にそれだけの価値、カリスマ性などが必要条件になる。	分かりやすく賑やかなイメージを提供できるが、個人に主張がないと、大勢に埋もれてしまいがち。チームの連携が問われる。

【出典】「月刊ENTAME (2014年10月)」105p.

でのコンサートでは、何か所ものステージが効果的に組み合わせられ、次はどこでパフォーマンスが繰り広げられるか目が離せないという「緊張感」を生むが、地方の小規模アイドルグループは大人数に個性を埋もれさせることなくファンに「近距離感」を与える効果を持つ。大人数アイドルグループでは、メンバーは人数の多いグループの中で自分の個性をどう見せたいのかという主張を明確に持っている。たとえば、大島優子は決められた振り付けよりも大きく踊り、柏木由紀は可愛く踊る。アイドルファンの中にはこのような自己主張を「うざい」「目障りだ」と言う人も少なくない。このような中で目立ちにくいメンバーも出現しており、次世代の中心として期待が掛かる加藤玲奈がテレビに出演して画面に映ると、「れなっち、見つかった」とネットに書き込むことが、ファンの慣例になっている。

## 8. ヴァーチャル空間への展開

劇場でのライブ活動に加えて、AKB48はスマートフォンやソーシャルネットワークが主要メディアとして機能する「ヴァーチャル空間」への展開を行うことも特徴的である。「ヴァーチャル空間」は今やアイドルにとって切り離せない生息空間となっている。アイドルのファンとなる若者が新しい音楽に出会う機会はインターネットが主であり、テレビやラジオなどのマスメディアはほとんどない。ファンはヴァーチャル空間で知った楽曲をYouTubeでチェックし、音楽配信でダウンロードしたりアクセスしたりして楽しむ。AKB48「ヘビーローテーション」のミュージックビデオは下着姿というアイドルとしては画期的なものであったが、YouTubeを通じて広く人気を得た<sup>(143)</sup>。テレビの歌番組を中心に音楽に接していた時代<sup>(144)</sup>には、曲もなるべく多くの不特定多数（マス）の人たちが楽しむことが出来るように、アイドルも早い段階で中年でも楽しめる大人向けの歌を歌うようになっていた。たとえば、中森明菜は19歳で「ミ・アモーレ」、20歳で「DESIRE」、22歳で「難破船」、松田聖子も21

歳で「ガラスの林檎」など大人の歌を歌った<sup>(145)</sup>ことが挙げられる。しかし、音楽配信でダウンロードするメディア環境下においては、ニッチなファンに向けて作られるため、現在のアイドルは20歳過ぎても可愛い曲を歌う傾向がある。

また、SNSを通じてメンバーが日常生活について情報発信することは、彼女たちのことをファンに深く知っていることにもなり、ファンが親近感を抱くことに貢献する。時には、メンバーに投げ掛けられた質問に対して回答が寄せられることもあり、「ヴァーチャル空間」において彼女たちと直接コミュニケーションすることもでき、テレビで観ているのとは異なる双方向性が生まれる。このように、握手会を介した「現実空間」だけではなく、「ヴァーチャル空間」でも「会いに行けるアイドル」の魅力となっている。ブログに加え、Twitter、Google +、LINEにより、アイドル本人に気軽に話し掛けることが可能となり、最新情報を入手でき、ファン同士で情報共有できる簡単なサービスは、アイドル文化と親和性が非常に高い。

2014年2月にサイバーエージェントの子会社である「7gogo」がサービスをスタートさせたトークアプリ「755」<sup>(146)</sup>は、ツイッターとLINEの間の中間的な機能<sup>(147)</sup>を持ち、アイドルとメッセージを使って話ができる可能性があることを売りにしている。2014年末から月間8億円の広告費を投入しAKB48<sup>(148)</sup>や乃木坂46<sup>(149)</sup>と話せることを打ち出したテレビCMを集中展開し、「アイドルと話したい」というファンの想いを果たすメディアであることのアピールが功を奏し、ダウンロード数を一気に60万から500万へと伸ばした。握手会ではそっけない対応で「塩対応」と呼ばれるAKB48メンバーの島崎遙香<sup>(150)</sup>が丁寧な返信をしてくれるなどの話題も人気が出た背景となった<sup>(151)</sup>。島崎遙香は、デビュー当時から「島崎はやる気がない」と映り「塩対応」や「ぼんこつ」と言われていたが、「755」における対応により、「自信を持つのに時間がかかる」「人間関係を作ったり、どんな性格なのかを知ってもらったりするのに時間がかかる」キャラクターであること



を印象づけることに成功した。アイドルは努力する姿が見ているファンの心を打つことが「王道」と言われてきたが、努力が似合わないアイドルの出現でもあった。

かつてロックバンドやダンスボーカルグループなどアーティスト志向が強いグループは握手会などアイドル的な活動とは一線を画すことが多かったが、SNSなど「ヴァーチャル空間」の拡大によりファンとの距離が近くなっている現在においては、アーティスト然と振る舞うことは逆にカッコ悪くなり、身近に感じさせられるアイドル的な活動が効果的となっている。ファンになってもらうためには、人となりを伝えることが必要であり、Twitterの活用に加えて、握手会や写真撮影など、アイドル的なファンとの触れ合いを販売促進に取り入れている。ダンスボーカルグループのE-girlsやフェアリーズ<sup>(152)</sup>も、ショッピングセンターのイベントなどで握手会を併催して盛況となっている。

小規模イベントを基に、メジャーデビューしていなくても、オリコンシングルチャートの上位に登場する「インディーズアイドル」も台頭している。たとえば、立花あんな、天木じゅん(2015年3月卒業)、神谷えりな、川村虹花、森カノンらが所属する「仮面女子」はその典型例である。

表9 「メジャーアイドル」と「インディーズアイドル」の比較

メジャーアイドル	インディーズアイドル
全国CD店で展開	CD1枚あたりの利幅が大きい
ライブ動員力が5,000人規模を超える	ライブ動員力が2,000人規模以下
メジャーレーベルが持っている大規模なメディア戦略が可能	意思決定が早く小回りが利く
信用力が高い	ファンとの距離が近いイメージ
スタッフ力が強い	様々な面でコストを抑えやすい
アイドル本人のモチベーションが高い	インディーズチャートで腕試しができる
メジャーデビューによってファンも達成感を共有できる	アイドルとファンが直接的に結びつくことができる

【出典】「日経エンタテインメント(2014年12月)」88p.を筆者が修正

かつては音楽メーカーの独占状態だった音楽製作やCD流通において、アイドルが活動する上で必要となる要素がオープンになりメジャー企業の独占ではなくなったことが背景にある。ライブやイベントを中心に活動するアイドルを「ライブアイドル」と呼ぶが、現在のアイドル・ブームの主流はこのスタイルになっている。動画をリアルタイムでストリーミング配信するUSTREAMも今やライブアイドルにとっては不可欠のサービスである。ライブ動員が2,000人規模の「インディーズアイドル」は、握手会やSNSを通じてアイドルとファンが直接コミュニケーションできるだけではなく、ファン同士がつながりを持つことが重要となる。アイドルのライブや握手会の会場が、アイドルを応援するだけでなく、趣味が同じ仲間に見える場になっている。それが、「インディーズアイドル」では人気獲得につながる。

これらアイドルグループでは、あえてセンターを決めないグループも多い。センターアイドル<sup>(153)</sup>は、グループの顔であり人気を左右する存在である<sup>(154)</sup>が、どのメンバーも平等に活躍させることにより、各メンバーのファンに安心して応援してもらうことが狙いとなっている。

「現実空間」におけるキャラクターと「仮想空間」における偶像に加え、「ヴァーチャル空間」でのファン参加型の双方向関係、共感性を得たAKB48は、アイドルジャンルに留まらず、表10の通り、現在、CDでミリオンセラーを達成できる唯一の存在となっている。偶像としてのアイドルに接する仮想空間における行為(CDで音楽を聴く)と現実空間で直接アイドルに会う行為(劇

表10 年間シングル売り上げ枚数(2015年)

順位	作品名	アーティスト名	売上枚数
1位	僕たちは戦わない	AKB48	178.3万枚
2位	ハロウィン・ナイト	AKB48	132.8万枚
3位	Green Flash	AKB48	104.5万枚
4位	唇に Be My Baby	AKB48	90.5万枚
5位	コケティッシュ渋滞中	SKE48	70.2万枚
6位	今、話したい誰かがいる	乃木坂 46	68.7万枚
7位	太陽ノック	乃木坂 46	67.8万枚
8位	命は美しい	乃木坂 46	62.1万枚
9位	青空の下、キミのとなり	嵐	57.2万枚
10位	Don't look back!	NMB48	53.1万枚

【出典】オリコン

場公演や握手会やサイン会などリアルイベントに参加する)が連動する関係は、音楽産業のビジネスモデルを大きく変えた。幅広いファンを掴むだけではなく、アイドルとファンの「距離感」を縮め、アイドルが今そこにいるという「実在感」は「仮想空間」における「偶像性」に留まらず、「臨場感」をファンに与え、更なる熱心なファンを生むことになった。

結果として、CDを複数枚購入するファンが増え、売り上げ枚数と楽曲の一般層への広がりが直結しないという現象が強まることになったが、CDが売れない時代に中国を凌ぐ世界第2位の音楽市場を形成する主因として貢献していることは見過ごせない事実である。シングル売り上げの第1位は、表11の通り2010年から6年連続であり、音楽の聴き方が配信などにシフトする中で、他のアーティストの追従をまったく許さない。2011年以來5年連続で年度内発売シングル全作が1位から上位を独占している他、アルバム2作(「ここがロドスだ、ここで跳べ!」「0と1の間」)が年間4.5位を記録して、女性グループでは初の2作同時ランクインという快挙を達成している。

現在も、CM美少女、映画女優、グラドルのように、ソロで活動するアイドルも存在するが、このようなソロアイドルの課題は、ファンが好きなアイドルを直接選べないことにある。CMに起用されたり、映画に出演したり、雑誌グラビアに掲載されたりするアイドルを選ぶのは、クライアント、監督、広告代理店や出版社の人間である<sup>(155)</sup>。アイドルの選定にファンの声が届くことはない<sup>(156)</sup>。選ばれたアイドルは知名度があり、クライアントや業界人に人気があることは間違いないが、どれだけファンに支持されているかが数字で明確に表現される機会が乏しく、「ヴァーチャル

空間」や「現実空間」を通じてファン参加型モデルを採るアイドルグループと比較すると、ファンには不満と不信が残る。

「ヴァーチャル空間」が拡大しているとは言え、「ヴァーチャル空間」だけではアイドル・ビジネスは成立しない。「ヴァーチャル空間」におけるサービスを用いながらPRをして、その先に「現実空間」へ誘導し対価を得るモデルが必要となる。また、「現実空間」や「ヴァーチャル空間」におけるアイドルとファンの距離が近くなることで懸念されることは、不幸な事件や事故、およびネット炎上が起きることであるが、2014年5月、心配が現実となる事件が起きた<sup>(157)</sup>。

## 9. 空間横断するアイドル

実は、アイドルグループが歌う楽曲は多様化しており、日本のアイドルソングは世界で最も音楽的に豊かなジャンルであると評価される。AKB48「ヘビーローテーション」以降、定番となった「イントロに印象的なギター+8ビートのロック風のドラム+ハッピーなメロディ」以外にも、でんぱ組.incのように和風メロディを使ったり、BABYMETALの成功でヘビーマタルを取り入れたりすると、アイドルソングはコアなファンに支持されるべく多様性に富んでいる。本来、アイドルソングは、アイドルが前面に出て注目されるため、楽曲は後ろに位置して日常生活の中で普通に聴くことは難しい。しかし、NHK朝の連続ドラマ「あさが来た」の主題歌「365日の紙飛行機」がアイドルファン以外にも好評な楽曲になるなど、幅広い層に受け入れられる「ポピュラーソング」も生まれている。

田畑・植田「2015」で見た通り、近年、アニメソングやボーカロイドなど、「仮想空間」や「ヴァーチャル空間」で生まれた楽曲が人気を博すようになってきている。図4に示す通り、「Perfume<sup>(158)</sup>」や「でんぱ組.inc<sup>(159)</sup>」のような「仮想空間」と「ヴァーチャル空間」の中間領域、「SEKAI NO OWARI」やカラフルで奇抜なファッションをした「きりりーぱみゅぱみゅ」やアニメソングを3

表11 年間シングル売上1位作品(2010年以降)

年	アーティスト名	アーティスト名
2010年	Beginner	AKB48
2011年	フライングゲット	AKB48
2012年	真夏の Sounds good!	AKB48
2013年	さよならクロール	AKB48
2014年	ラブラドル・レトリバー	AKB48
2015年	僕たちは戦わない	AKB48

【出典】オリコン

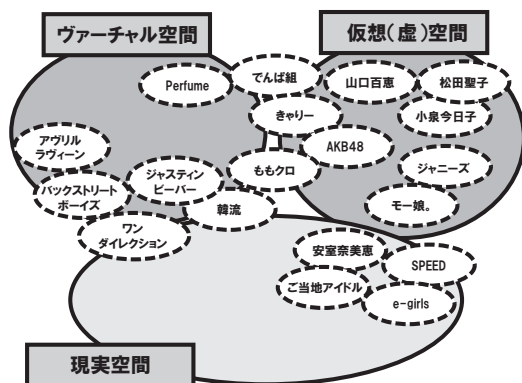
人の抜群な歌唱力で歌いあげる「Kalafina<sup>(160)</sup>」のような「仮想空間」の世界観を創り出すアーティストが登場し人気を得、「初音ミク」のような「ヴァーチャル空間」発のアイドルが生まれた。

アニソン（「仮想空間」）やボカロ曲（「ヴァーチャル空間」）に影響を受けた声質や歌唱法が、現在のアイドルグループの標準になりつつある。たとえば、「でんぱ組.inc」はゲームやアニメ、コスプレなどメンバーがそれぞれオタク趣味を持つ6人組であり、アニメの声優のような声、萌え声やキンキン声で超高速なメロディを歌う。メンバー着用のセーラー服風衣装のコスプレや、主要メンバーの最上もが風の金髪をする女性ファンも多い。「でんぱ組.inc」は、大手芸能事務所の所属ではなく、秋葉原の小さなカフェ「秋葉原ディアステージ<sup>(161)</sup>」からスタートして日本武道館公演を実現させた。「秋葉原ディアステージ」は、アイドルやアニソンシンガーを目指す女子を始め、男装やコスプレを愛する女子など、個性豊かな女子たちがステージで歌って踊って給仕もする場であるが、今やアキバカルチャーの発信基地になっている。「ももいろクローバーZ」の百田夏菜子は、喉に負担が掛る声を振り絞った歌い方をして、一生懸命な姿でファンの心を掴むことに成功している。「でんぱ組.inc」や「ももいろクローバーZ」はライブ主体であるため、息も付かせない感じで譜面に音符が並ぶが、AKB48は譜割を詰め込まずメロディアスな歌謡曲寄りでリズム

よりも歌詞を聞かせるようにしている<sup>(162)</sup>のと対照的である。

日本のアイドルグループはアマチュアっぽい歌声の後ろに、優れたプロデューサー、ミュージシャン、エンジニアが集まる特徴を持っている。サウンドがプロフェッショナルでありながら歌声はアマチュアっぽいというスタイルで、「可愛い」「頑張っている」「応援したい」と思わせることに成功している。欧米の観客はシンガーに歌のテクニックを求めるため、歌が素人的なことは存在しない。マライア・キャリーやセリーヌ・ディオンの歌声を聴いても応援したいという気にはならず、今の欧米人には考えられない独特のスタイルになっている。

Perfumeは幅広い世代に支持されるが、人気の理由はそのテクノサウンドにある。Perfumeのヴォーカルには電氣的な加工が施され、肉声をベースにしながらもそこに無機的な要素が加えられ近未来感を醸し出している点において「ヴァーチャル空間」的要素を供し「初音ミク」と共通している。一方で、Perfumeは生身の人間であり、中田ヤスタカという著名なプロデューサーにやられているような、かつてのアイドル歌手のような、操り人形的な「仮想空間」に生息する印象も与える。Perfumeは、テクノサウンドにアイドルの可愛さを入れたことに加え、ダンスの上手さの魅力と「フレッシュさ」を併せ持っている。これに「仮想空間」を好むサブカル系ファンが反応したことが人気につながった。2006年からはサブカル雑誌で記事が掲載されるようになり、ファンにより「ヴァーチャル空間」であるYouTubeにライブ映像が大量にアップロードされたことが、更なるファンを獲得するきっかけになった。また、2007年9月に発売された「ポリリズム」はニコニコ動画でマッシュアップ動画が話題となり、オリコン・チャートで7位となり初のベスト10入りを果たした。サブカルやアートなどの多様性を担保してくれるフォーマットがアイドル人気の基盤になっていると言える。



【出典】筆者が独自に作成

図4 アイドルのポジショニング

SNSは身近な感覚でアイドルの生の声を届けることができるため、テレビやラジオ、雑誌等の

マスメディアに情報発信の主軸を置かないアイドル、特にモデルや声優系アイドルが、多くのフォロワーを得て人気を得る時代になっている。「仮面女子」<sup>(163)</sup>は2015年1月1日発売「元気種☆」がオリコン1位を獲得し、「最強の地下アイドル」と呼ばれるが、海外向けのFacebookで160万人のフォロワー数を誇り、「ヴァーチャル空間(SNS)」ではメジャーなアイドルである。2015年8月から活動を開始して、ファンの中でチケットの奪い合いが起きている「原宿駅前パーティーズ」(第5項で詳説)も、2015年末からTwitterやInstagramの公式アカウントを開設して、チケットが取り難くなり、触れ合う機会が減少したファンに対してメンバーの生の声を届けるようにしている。

現在の「アイドル」を応援する手法について、「同期型応援」と「非同期型応援」が存在する。「同期型応援」とは、実際に劇場公演や握手会に参加してファンが応援する手法である。これに対し、「非同期型応援」は、アイドルの映像をYouTube, Twitter, Instagramなどを見て楽しんだり、同じ「推しメン」(特に気に入っているメンバー、応援しているメンバー)を応援する他のファンとコミュニティサイトで情報交換したりといったものである。この「ソーシャルな応援」は、「ファンとファンとの向き合い方」を楽しくする応援でもある。人気アイドルには、思わず誰かに話さずにはいられない「感動」や「驚き」や「発見」が含まれている。この「誰かに話さずにはいられない感動(誰かと共有・共感することの感動)」を「非同期型応援」として作り出すためには、「時間」がヒントになることが多い。

たとえば、同じ「推しメン」を応援するファンは、必ずしも「現実空間」で同じリアルタイムの時間を過ごさなくて良い。「ヴァーチャル空間」でフォロワーとして登録し、新しい情報があれば、相手に伝えることにより、ファン同士に繋がりが発生し、「非同期型応援」が生まれる。現代において、ファンはいつでも劇場公演や握手会に参加できるほど時間的余裕を持ち合わせていない。また人気アイドルになれば、参加するためのチケッ

トを取得することが困難となる。そのため、「非同期型応援」は非常に重要なアイドルデザインとなっている。このように、「現実空間」においてどうしても発生してしまう「時間によるずれ違い」を「ヴァーチャル空間」でいかに解消するかが、近年のアイドルの特徴である。「アクション(行動)」と「リアクション(またはフィードバック、及び結果)の時間を延ばす(時間差を作る)ことにより、「アイドル」に「深み」を増すことが出来る。

また、インターネットを用いて「セルフプロデュース」してファンを獲得する「アイドル」も出現して来た。「izu(出岡美咲)」<sup>(164)</sup>は、モデルとして活動する他、NIKEのオフィシャルサポーターランナーとしてマラソンにも挑戦するが、LINEやファッションに特化した写真共有サイト「WEAR(ウェア)」でファッション関係のネタを情報発信している。SNSのトータルフォロワー数は200万人以上(LINE55万人、WEAR65万人等)を誇っている。「西川瑞希」<sup>(165)</sup>は、雑誌「Popteen」のNo.1モデルでありながら、LINEの総フォロワー数が250万人を突破して、10代のカリスマ的存在になっている。「木花清佳」<sup>(166)</sup>は、大学入学とともにストリートライブを始めたものの、路上の規制が厳しく動画生配信サービス「ツイキャス」に移るようになって人気が出始めた。月曜日から土曜日までの週6日間、1回の配信で15,000人が来場する。「滝口ひかり」<sup>(167)</sup>は、アイドルユニット「drop」のメンバーとして活動しているが、300人以上のアイドルが参加する写真投稿サービス「CHEERZ(チアーズ)」において人気トップである。「木下ゆうか」<sup>(168)</sup>は、華奢な外見からは想像もつかない大食い注目されるフードファイターであり、大食い動画を投稿しているYouTubeチャンネルは登録者数22万人、総再生回数3,500万回と圧倒的な人気を誇っている。「まなこ」<sup>(169)</sup>は、人気踊り子によるロックパフォーマンスユニット「Q'uille(キュール)」で活動しているが、「ニコニコ動画」に「妖怪ウォッチ」のエンディングテーマを踊る動画を投稿したことにより人気が出た。セーラー

服で踊る姿に対してファンから次々とコメントが寄せられている。「田中セシル」<sup>(170)</sup>は、ダンスパフォーマンスチーム「SpininGReen（スピニンググリーン）」のリーダーであるが、6秒動画投稿サービス「Vine」で、ダイナミックかつ美しい側転を披露し、注目されるようになった。Twitterで「りーめろ先輩」として9万人以上のフォロワーを抱えた「莉音」は、2015年夏にエイベックスが主催した「サンシャイン・グラビア・オーディション」のグランプリに選ばれ、グランプリ特典の「ヤングガンガン」巻末グラビアでグラドルとしてデビューすると、「現代の可愛さを凝縮した」と評判になり人気が高まった。

「ヴァーチャル空間」の拡大は、メディア企業にも影響を与え始めている。たとえば、講談社主催のアイドルオーディション「ミスiD」（第10項で詳説）は、審査にあたり、YouTuberの自己PR動画の再生回数や、Twitterの投稿内容を審査ポイントにしている。運営側は理由について、「ヴァーチャル空間」では、「従来の枠組みに収まらない女の子の多様な魅力が支持される」ことを挙げている。2014年の「ミスiD」の金子理江と黒宮れいと他1人（レディビアド）による「LADYBABY」のデビュー曲「ニッポン饅頭」をYouTubeにアップすると、経済誌「Forbes」や「ハフィントン・ポスト」など世界中のメディアに取り上げられ、再生回数が1,100万回を突破している。たとえば、黒宮れいは、選考時には、スクール水着でギターを持った自己アピール動画で反響を呼び、中間順位11位に対して「黒宮れい、なめんなよ」とTweetして、更なる反響を呼んだ。

## 10. 異領域のアイドル

### 10.1 「ヴァーチャル空間」のアイドル

「ヴァーチャル空間」が拡大し、ボカロ曲がオリコン・チャートに名を連ね、ヴァーチャルアイドル「初音ミク」が海外公演でも成功を収める時代になっている<sup>(171)</sup>。「初音ミク」の場合、そのキャラクターデザインと音声はあらかじめ設定されているが、ソフトを購入したユーザーは、自作

曲も含めて好みの楽曲を歌わせることができるようになっている。「ヴァーチャル空間」に生息する生身のアイドルに対しては、プロデュースする側に立ちたいといくら願っても批評する形で満足するしかなかったが、「ヴァーチャル空間」に生息する「初音ミク」は、誰もが作り手側に立つことが可能になった<sup>(172)</sup>。初音ミクが歌う楽曲はアマチュアからプロまで数多くのアーティストによって提供されている。通常なら埋もれてしまう多様な楽曲が、「初音ミク」というキャラクターによって創造され発信されることにより注目された。また、ライブイベントでは、初音ミクの姿をスクリーンに投影し、歌声はソフトを使用しバックの音を生バンドが演奏するという形式を用い、「ヴァーチャル空間」と「現実空間」を融合させることに成功した<sup>(173)</sup>。「現実空間」のアイドルには賞味期限があり、この壁を超えられるアイドルがごく少数に限られるのに対して、「ヴァーチャル空間」のアイドルは優位に立つ。

日本のアイドルは、時代を映しながら、様々に性格を変えて来た。1980年代を代表とする「おニャン子クラブ」は、歌や踊りの上手さよりも親しみの持てるキャラクターが愛された。1990年代になると、モーニング娘。のような本格的なダンスや歌を披露する実力派が人気を得た。2000年代後半にはAKB48やももいろクローバーZのようなアマチュア的要素を前面に出した「すぐ会いに行けるアイドル」が出現し、生存競争はますます激しさを増している。もはや「かわいい」だけでは見向きもされない。ブレイクするためには、アイドル、バラエティ番組出演、女優、水着グラビア、ファッションモデル<sup>(174)</sup>という5ジャンルのうち、3つ以上をこなせることが最低条件であり、マルチな活躍が求められる<sup>(175)</sup>。マスメディアの地盤沈下に伴い、存在を認知されるためには一つのことをやっているだけでは難しい時代になっている。「アイドル戦国時代」と呼ばれる現在、アイドルとして成功するためには他のグループと明確な差を付けるポジショニングが必要であり、どの空間に位置するかを戦略として持ち合わせていなければならない。時として、自然発生

的に差別化したポジショニングを採るアイドルが生まれることがある。

その意味で差別化したポジショニングとなっているのが、「ヴァーチャル空間」において、「美しすぎるプリンセス」「カワイすぎる皇族」という愛称で人気を博しアイドル扱いされる秋篠宮夫妻の次女・佳子内親王である<sup>(176)</sup>。黒目を大きく見せるためのカラーコンタクト、カラーリングされたヘアスタイル、シャネル風スーツなど彼女に関する細かな情報がネット上に連日流れ、その動向が取り上げられる。記事を転送してアフィリエイト広告費を稼ぐ者も多い。そこにあるのは、「皇室」と「サブカルチャー（アイドル）」の融合である。「かこ様かわいいすぎじゃない？皇女だよ？お勉強できて教養があつてかわいいんだよ？プリンセスでしょ？最強」などの書き込みがネット上に書きこまれ、「佳子萌え」という言葉が「ヴァーチャル空間」において一般化している<sup>(177)</sup>。ICUの合格が発表されると、大学受験関連のネット掲示板では「同級生になりたい」との書き込みが相次いだ。国民の象徴たる天皇陛下、皇后陛下を始め熱心な皇族ファンは従前より存在したが、佳子内親王ファンが従来のファンと異なるのは、「ヴァーチャル空間」において特殊な世界観を形成している点である。

「ヴァーチャル空間」における人気は、日本を超え海外、特にアジアにおいても大人気となっている<sup>(178)</sup>。中国版 Twitter「微博（weibo）」では、佳子内親王の姿を捉えた写真が数多く投稿され、10 万以上の「いいね！」が寄せられる。「正真正銘のプリンセス」「佳子さまは皇室一の美女」「国際的に比較しても世界一美しい王女だ」「なんで日本の女性はこんなに美しいのか」「中国にいる成金の娘とは風格が違うぜ」「一番好きな日本人の女は昨日まで佐々木希だったが今日からは彼女だ」「ファンクラブに入りたい」「安倍は中国に来てなくていいから、代わりに佳子公主に中国に来てほしい」などのコメントが「ヴァーチャル空間」には溢れる。醸し出す優しそうなオーラや麗しい容姿は十分に「アイドル的」と言えるが、AKB48「会いに行けるアイドル」とは異なる「会

いに行けないアイドル」である。

アイドルがブログや Twitter に自撮りした写真、友人との触れ合いや家族との関係や日々の出来事など「オフ」を公開して読者に近い存在として表現されるのに対し、佳子内親王から「オフ」に関して発信されることはない。アイドルが現実空間の「キャラクター」を意識的に見せることにより身近な存在に変化しつつあるのに対して、佳子内親王は憧れの存在として「偶像」のままである<sup>(179)</sup>。佳子内親王人気の影響は、「おバカ系」などバラエティが人気だった女性アイドルに「清楚なお嬢様系」ブームを巻き起こし、2015 年の「乃木坂 46」人気急上昇へと繋がっている。

## 10.2 女子アナ

もう一つ差別化したポジショニングを取っているのが、テレビ局の「女子アナ」である<sup>(180)</sup>。男性アナウンサーが下僕感と畜畜感を満載に醸出する<sup>(181)</sup>のに対して、女性アナウンサーは「アイドル」と同様、儂い存在である。取材して真実を伝える専門職としての「ジャーナリスト」というよりも、「かわいい女子であること」が求められる「アイドル」としての位置づけにある<sup>(182)</sup>。「女性アナ」ではなく「女子アナ」と呼ばれる<sup>(183)</sup>ことに、そのポジショニングと期待される役割が見て取れる<sup>(184)</sup>。多くのテレビ番組において、年下の女性アナウンサーが年上の男性キャスターやお笑い芸人の補助・隷属的な役割<sup>(185)</sup>で起用されている<sup>(186)</sup>。欧米のようにジャーナリズム・スクール（大学院）で専門的な倫理や技能を身に付けて採用される訳ではなく<sup>(187)</sup>、大学新卒一括採用の下、能力よりも、端正なルックス、お嬢様キャラクター<sup>(188)</sup>、モデル並みのスタイル、「ミス〇〇大学」<sup>(189)</sup>や「読者モデル」などの肩書、有名な親の子弟<sup>(190)</sup>、という話題性などが重視され採用される<sup>(191)</sup>。入社後も、ニュース読みの途中で言葉に詰まったり、とちったり、豪快に咬んでしまったりすることが「初々しさ」「可愛さ」として人気を得る<sup>(192)</sup>特徴はアイドルに近く、テレビ局も意識的にその役割を演じさせている<sup>(193)</sup>。女優になるほど美人ではないけど目を引く容姿を備え、人当たりが良くて

慎ましくしてお上品であることが「女子アナ」になること条件となっている事実は「アイドル」としての役割を期待されていることの証左である<sup>(194)</sup>。

約1,000倍の競争率を勝ち抜いて内定を勝ち取った事実は高倍率のオーディションから選ばれたアイドルと同様に「選ばれた者」であることのアピールに成功する<sup>(195)</sup>が、ハーフであること<sup>(196)</sup>、学生時代にタレントやモデルをしていた経験<sup>(197)</sup>、ミスコン女王の経歴などが「女子アナ」への近道となっている事実<sup>(198)</sup>は、このような過去を嫌い「素人性」を求める秋元康によるオーディションと比較した場合、むしろアイドルグループよりもプロとしての「タレント」に近いとさえ言える<sup>(199)</sup>。名門大学出身ではあるが、大学院出身<sup>(200)</sup>が大半を占める海外のアナウンサーのように知性に恵まれている訳ではなく、番組で共演者に頭をはたかれ失笑を買い調子に乗る姿<sup>(201)</sup>は、視聴者に対しての知らずで無防備であることを容易に露呈する<sup>(202)</sup>。膳場貴子アナウンサーが番組でメイド姿のコスプレを披露する<sup>(203)</sup>など、NHKも例外ではない<sup>(204)</sup>。しばしば「女子アナは30歳まで」「女子アナ限界年齢は30歳」と言われ<sup>(205)</sup>、30歳を超えると若手に番組を奪われ、次第にナレーションなど露出の少ない仕事へと移り世代交代が進められる<sup>(206)</sup>事実も、「アイドル」としての役割や位置づけを期待されていることを示す。

一方、女性アナウンサーの一部からはそのような扱いに対して反発を示す動きも見られる<sup>(207)</sup>が、反発するアナウンサーも総じて美人であるためジェンダーアピールをする存在であることに変わりがなく、「プロの読み手」であることを必死にアピールしようとする姿が、ファンには「ギャップ萌え」となり、結果として媚びるタイプとは異なるポジションに位置する「アイドル」としての魅力を増すことに成功している<sup>(208)</sup>。

### 10.3 グラビア・アイドル

「グラビア・アイドル」が人気を得て注目を集めている。1990年代半ばから始まった、雛形あきこ、広末涼子、上戸彩、深田恭子などの「グラ

ドル（グラビア・アイドル）」ブーム（第2項で詳説）の影響もあり、2000年代初頭、出版社はグラドルの写真集出版に依然として積極的であった。しかし、2000年代後半になると、出版不況が急速に進んだため、グラビア誌の休刊が相次ぎ、生き残った雑誌でも撮り下ろしが急激に減少した。AKB48のメディア露出が急激に増加した2010年代になると、他のアイドルグループもソロでのグラドルを目指したり、ファッションモデルや女優がグラビアも兼務したりするなど、長く低迷していた「グラドル（グラビア・アイドル）」に新しい風が吹き始めた。

紙幅の関係で雑誌には掲載されない未公開カットで構成される電子写真集や画像配信がアイドルファンの中で定着した背景も見逃せない。ダウンロードする画像写真集を販売したり、月額定額料金で毎週異なる撮り下ろし写真を配信したりする、インターネット・サービスが雑誌に代わるビジネスモデルとして成立するようになった。グラドル側でも、雑誌グラビアが下火になった時代背景を受けて人気完全に定着したお馴染みの顔触れだけが誌面を飾るようになり、新陳代謝が止まったため、新人グラドルが日の目を見ることはなくなった。そのため、新人グラドルたちは、まずはどんなグラドルがいるのかを世間に知らうために、自撮りしてInstagramにアップしたり、Twitterで共通ハッシュタグを付けたりするなど、積極的に情報発信するよう努めた。「Rev. from DVL」の橋本環奈（第7項で詳説）がInstagramに投稿された一枚の写真でブレイクしたように、写真1枚1枚の良さで勝負するグラドルにとっては、Instagramは非常に大きな武器になっている（Instagramによるセルフプロデュースについては植田[2016]が詳しい）。プライベート写真は自分の部屋が背景に写り込み、「プライベート感」や「身近さ（近接性）」をアピールできるため、ファンにとっては非常に魅力的に映る。それに気が付いたのがグラドル自身だったことは、「セルフプロデュース」の重要性を示している。

山本彩（NMB48）、向井地美音（AKB48）、木

崎ゆりあ (SKE48), 宮脇咲良 (HKT48) など AKB48 グループのメンバーがグラドルとしての活動を継続する中で、女優の柳ゆり菜, 山地まり, 現役「CanCam」モデル久松郁実, 「Ray」モデルで「奇跡の9頭身」と呼ばれる朝比奈彩, 竹下通りでスカウトされ中学3年生でモデルデビューした星名美津紀, エキゾチックな容貌のアイドルグループ「FYT (ファイト)」都丸紗也華, 若干16歳で童顔のアイドルグループ「SUPER ☆ GIRLS」浅川梨奈, の7人が、「次世代グラドル」として登場した。女優, モデル, アイドルなど, それぞれ異なる顔を持ちながら, デビュー時期が異なる7人がその被写体としての魅力により足並みを揃えるかのように相次いで人気を得て, グラビア界は一気に活気づいた。

彼女たちはグラビア (異性間消費) に留まらず, 人気ファッション雑誌の表紙を飾ること (同性間消費) も珍しいことではなくなっている。特に, 柳ゆり菜は2015年雑誌グラビア表紙回数1位になるだけでなく, 2014年10月24日, NHK朝の連続ドラマ「マッサン」(第23話)に, 赤玉ポートワインポスター内の半裸モデルとして出演すると, 反響が物凄く, アイドルへの興味がさほど多くない中高年層に対しても一気に知名度を上げた。「癒やし系クイーン」として有名になったことにより, 2015年6月20日公開の映画「呪怨」に出演, 2016年1月23日から舞台「ぼくんち」で主演を務めるなど, 多方面で活躍するようになっている。

AKB48グループ以外にも, 矢島舞美・鈴木愛理 (℃-ute), 神谷えりな・天木じゅん (仮面女子), 最上もが (でんぱ組.inc), 荻野可鈴・志田友美 (夢見るアドレセンス), 滝口ひかり (drop), 仙石みなみ (アップアップガールズ (仮)), 松永有紗 (リンク STAR's), 伊藤萌々香 (フェアリーズ), 植村あかり (Juice = Juice) などがグループアイドルからソロでグラドルになった。彼女たちの所属するグループ名をたとえ知らなくても, グラドルの一人として認知している「逆転現象」が起きている。また, 柳ゆり菜や山地まりの他にも, 石川恋, 武田玲奈, 片山萌美, 馬場ふみか, 吉岡

里穂, 白石あさえ, 河村美咲などデビューしたばかりの女優が, 知名度が高くない段階でフォトジェニックな素材を提供しグラドルとして活躍している。彼女たちは本格的に女優をやりながらグラビアもやる「兼業グラドル」であるが, 深田恭子や綾瀬はるかなど先輩人気女優が水着の写真集を発売したこともこれら若手女優がグラビアを出すことに影響した。

また, かつては「グラドル=男性人気」(異性間消費) というイメージがあったが, 女性層への支持の広がり (同性間消費) を背景に, CM出身やテレビ番組出演も増えている。アイドルグループが歌やダンスのレッスンでステージに立つまでに約3か月間を要し, 途中で脱落するメンバーが出現するのに対して, グラドルは全くの新人が有力誌の表紙に登場したり, 巻頭カラーで4ページも掲載したりできるなどハードルが低く, アイドルとして飛躍のチャンスは高い。

#### 10.4 アイドル女優

10代の若い女優の活躍が目立ち, その若さから熱狂的なファンを獲得する「アイドル女優」としての位置を占めるようになっていく。綾瀬はるか, 新垣結衣, 石原さとみ, 北川景子, 堀北真希ら「1985～1990年生まれ世代」があまりにも層が厚く, 10代の頃から主役・ヒロインの座を占めていたために, 後続の「1991～1995年生まれ世代」はなかなか主演することができなかったが, 「1985～1990年生まれ世代」が25歳を超えてアイドル女優から本格的な女優への転換を求められる年齢に差し掛かると共に, 堀北真希が2015年に電撃結婚するなどプライベートでも曲がり角の年齢になり, 次世代の若い女優の台頭が急速に求められるようになった。アイドル女優も25歳を超えると, 学生役を演じる機会が減り, 役柄の変化に合わせてイメージも変化するはずであるが, 27歳の新垣結衣が「ヴァーチャル空間」では「新垣結衣の身長また伸びている」と話題になるなど, 「1985～1990年生まれ世代」に対していつまでも「子供のなかわいさ」を求めるファン心理は根強く, なかなか「世代交代」は進まなかった。



しかし、堀北真希の電撃結婚は、長い間、「昭和顔」として中高年層にアイドル的人気を誇って来た流れを、次世代の「ポスト堀北」を求める向きに一気に変える、「アイドル女優」の転換期となった。たとえば、「昭和顔」的ルックスを持つ山本舞香や芳根京子などが「ポスト堀北」として期待されている。NHKの朝の連続ドラマのヒロインは、年齢と経験のある程度経ていた女優が抜擢されることが多かったが、2013年に放送された「あまちゃん」に能年玲奈、橋本愛、有村架純、松岡茉優らが出演して、ヒロインだけでなく複数の文字通りフレッシュなアイドル女優が脚光を浴びて、顔触れが完全に変わるような時代になった。特に有村架純が朝ドラ終了後も多くの企業のCMに起用されてブレイクしたことにより、「世代交代」が一気に進んだ。

「アオハライド」「ストロボ・エッジ」など学園を舞台にしたコミック原作映画、「ピリギヤル」のようなベストセラー原作の映画のヒットが続き、従来以上に制服の学生役を演じるフレッシュな「アイドル女優」が求められるようになって来ていることも影響した。

このようなタイミングにあって、ファンの好みは多様化し、一人の個性だけで多くのファンを獲得することが困難となった時代背景を基に、アイドルグループの大人数化と同様、アイドル女優もまた、多様性に富んだタイプが登場している。川口春奈、武井咲、西内まりや、本田翼、飯豊まりえ、大友花恋、清原果那、小芝風花、平佑奈、福原遥、芳根京子など「明るく元気な注目の女優」がいる一方、新川優愛、門脇麦、二階堂ふみ、蒼波純、松井愛莉、小松菜奈、杉咲花、武田玲奈、永野芽郁、橋本愛、浜辺美波など「落ち着いた雰囲気女優」も生まれている。「明るく元気な注目の女優」は、同世代ファンの人気が高いため、恋愛を描いたドラマや映画のヒロインに起用されることが多い一方、「落ち着いた雰囲気女優」は、その静かな存在感が買われて、ドラマだけでなく映画でも活躍する「演技派」が多い。似たような「持ち味」の女優を配役すると、お互いの特徴を潰し合うことになりかねないため、多様性に富ん

だ「拡がり」では、新世代は「1985～1990年生まれ世代」を上回る。

このような時代変化を受け、2015年は、主演した2本の映画「ストロボ・エッジ」「ピリギヤル」が共に興行収入20億円を超すヒットをした有村架純、2014年のNHK朝の連続テレビ小説「花子とアン」に出演し、2015年の「まれ」でヒロイン・希役に抜擢され人気ドラマ「下町ロケット」にも出演した土屋大鳳、映画「海街diary」に出演し、声優初挑戦したアニメ「バケモノの子」で細田守監督が「天才」と絶賛した広瀬すず、の3人の活躍が目立つことになる。特に、有村架純と広瀬すずは、CM起用が増えファンに注目されアイドル人気を得るようになって以来、映画やドラマで出演して活躍するというプロセスを歩んだ。尺が短いCMに多数出演した場合、テレビ離れが進む若者にもYouTubeで視聴される機会が多く、ファンになってもらい易い。テレビ番組からアイドルが輩出されるのではなく、動画視聴からアイドル女優へと進む「境界を超える」足跡を歩む時代になっている。ファンに夢を売ることが「アイドル」の役割であるとすれば、それは女優も同じことが言える。

昭和の時代であれば、「アイドルはトイレに行かない」という「仮想空間」における「偶像性」のみをアピールできたが、現代のネット社会ではプライベートもすべてがさらけ出されてしまう。そして、アイドル自らが「ヴァーチャル空間」で意識的にプライベートを晒す。広瀬すずが2015年11月29日、姉の広瀬アリスと姉妹喧嘩したことをTwitterで実況して大きなニュースになった。「姉妹喧嘩 もう！おかあさんーん！」という妹が身内にだけ見せるわがままな言葉を晒すことにより、ファンは人気女優が見せた「子供の弱さ」を受け取りながら「かわいい」と感じ、彼女が持つアイドル性にやられてしまう。お笑い芸人の有吉博行も思わず、自身のラジオ番組で「ファンタジーすぎて（笑）」と反応している。

彼女たちと同じく連続ドラマ初出演を果たした芳根京子（TBS「表参道高校合唱部！」）、清原果耶（NHK「あさが来た」で「ふく」役を好演）、

平祐奈 (TBS「JKは雪女」), 大友花恋 (フジテレビ「恋仲」), 浜辺美波 (フジテレビ「あの日見た花の名前を僕達はまだ知らない」, フジテレビ「無痛」), 山口まゆ (テレビ朝日「アイホーム」, TBS「コウノドリ」), 山本舞香 (フジテレビ「南くんの恋人～my Little Lover」), 小松菜奈 (WOWOW「夢を与える」), 映画出演した森川葵 (「チョコリエッタ」), 永野芽郁 (映画「俺物語!!」), 水谷果穂 (映画「先輩と彼女」), 駒井蓮 (「セーラー服と機関銃～卒業～」) など, 次世代のアイドル女優はかつてないほど層が厚くなっている。かつては「バラエティでは使い難い」と言う印象があった女優であるが, 演技 (連続ドラマ「she」初主演) だけでなくバラエティ番組 (フジテレビ「ENGEI グランドスラム」) のMCで活躍した松岡茉優, 言動が天然である平愛梨, オープンな言動が人気を得ている清水富美加のように, ドラマや映画が制作される本数が限定され熾烈な「椅子取りゲーム」になる中で, 演技力や声

の魅力を活かして幅広い分野で活躍するアイドル女優も増えている。

### 10.5 アイドル・オーディション

アイドル女優を発掘する手段として従来用いられている手法が, 有力事務所主催のタレント発掘オーディションである。40回を数える「ホリプロタレントスカウトキャラバン」は, 1976年の第1回で榊原郁恵をグランプリに選んで以降, 井森美幸 (1984年第9回), 山瀬まみ (1985年第10回), 深田恭子 (1996年第21回), 綾瀬はるか (2000年第25回), 石原さとみ (2002年第27回) らを輩出してきたが, 近年では, 石原杏奈 (2006年第31回), 足立梨花 (2007年第32回), 小島瑠璃子 (2009年第34回) らが活躍している。特に近年, 活躍が目覚ましいのが, 2009年第34回でグランプリを獲得してグラドルからタレントとして成長, 2015年「年間タレント番組出演本数」で女性タレント1位になりテレビで見ない日はないと言われる小島瑠璃子である。また, 2012年の第37回でグランプリになった優希美青は, 2015年, 「でーれーガールズ」「暗殺教室」「極道大戦争」など3本の作品に出演した。2015年9月23日に決選大会が開催された第40回では, 初めてSNSからのみの応募とし, 応募総数39,702人の中から15歳の木下彩音がグランプリに選ばれ, 今後の活躍が注目されている。

これに対抗するのが, オスカープロモーションによる「全国美少女コンテスト」である。1987年の第1回に始まり, 2～4年に1回の不定期開催ながら, 藤谷美紀, 佐藤藍子, 石川亜沙美, 米倉涼子, 上戸彩, 武井咲ら多くのアイドル女優, モデルを輩出している。2次選考に残った者から剛力彩芽のように見出されるケースもあった。2012年の第13回でグランプリになった吉本美憂は, 2015年, 「罪の告白」で悪魔のような役柄を体当たりで演じた好演が評価された。約8万人の応募があった2014年の最新14回グランプリは高橋ひかる (2016年1月9日公開映画「人生の約束」デビュー) であった。

また, 「アミューズ」が全国規模で開催する「ア

表12 所属事務所別「アイドル女優」

	16歳以下	17～18歳	19～20歳	21～23歳	24～25歳
アミューズ	清原果那	松井愛莉	三吉彩花 清水くるみ		仲里依紗
オスカー	高橋ひかる 本田望結	小芝風花 吉本実憂		剛力彩芽 忽那汐里 武井咲	
研音	大友花恋 桜田ひより	杉咲花 水谷果穂	川口春奈	志田未来 鳴海璃子	
スウィート パワー	宮武祭 松風理咲	高月彩良	竹富聖花 宮武美桜	桜庭ななみ 知英	桐谷美玲 南沢奈央
スターダスト	柴田杏花 田辺桃子	葵わかな 中村ゆりか	小松菜奈 早見あかり 森川葵	瀧本美織 本田翼	大政絢 夏帆
ソニー ミュージック	久保田紗友	黒島結菜 萩原みのり	二階堂ふみ 土屋大鳳 橋本愛		武田梨奈 蓮佛美沙子
テンカラット	志田彩良 田爪愛里	中条あゆみ 森高愛		三根梓	
ヒラタオフィス	上原実矩		松岡茉優		小林涼子
フォスター	南乃彩希	古泉葵 広瀬すず	荒井萌 広瀬アリス		北乃きい
フラーム	山口まゆ 花坂椎南	松本穂香	福田麻由子	有村架純	
ホリプロ	優希美青	唯月ふうか	大野いと 佐野ひなこ	石橋杏奈 高畑充希	
ライジング レプロ	中野あいみ 三上朱里	藤森理亜 古畑星夏	清水富美加	西内まりや 川島海荷 能年玲奈	

※年齢は2015年7月4日時点

【出典】「日経エンタテインメント (2015年8月)」pp.30-31を筆者が修正

ミュージックオーディション」では、2014年に5年ぶりに開催された「オーディションフェス2014」において32,214人の応募者の中から清原果那がグランプリに選ばれた。同じように、新垣結衣、川島海荷、能年玲奈などが所属する「レプロエンタテインメント」も「レプロ次世代スターオーディション」という新人発掘オーディションを開催している。「レプロガールズオーディション2008」にてグッドキャラクター賞を受賞して芸能界デビューした清水富美加は、「仮面ライダーフォーゼ」ヒロイン役を経て、NHK連続テレビ小説「まれ」へ出演した。同コンテスト出身のハーフモデルのマギーも、近年テレビやファッションショーで活躍の場を広げている。天海祐季、榮倉奈々、菅野美穂、志田未来らが所属する「研音」が開催した2011年「研音ガールズオーディション」で選ばれた杉咲花は、子役の頃からCMに出演してきたが、2016年4月スタートのNHK朝の連続ドラマ「とと姉ちゃん」で、ヒロイン高畑充希の妹役を演じる。

その他、映画界が行ったオーディションでは、1950年代の東宝「シンデレラ娘」の流れを汲む「東宝『シンデレラ』オーディション」は1984年の第1回に沢口靖子、2000年の第5回に長澤まさみがグランプリに選ばれた。最近では、その美貌から「15年に1人のシンデレラ、逸材」「ポスト長澤まさみ」ともとも称される浜辺美波、NHK連続テレビ小説「まれ」に出演した飯豊まりえを輩出している。2011年に行われた第7回は上白石萌歌がグランプリになった。同賞では実姉の上白石萌音も特別賞を受賞し、姉妹によるダブル受賞が話題となった。

また、松竹による前後編2部作として製作された成島出監督の映画「ソロモンの偽証」(宮部みゆきのミステリー大作を原作)にて、メインキャストとなる中学生役に応募し、「日本映画最大規模」とされた半年間のオーディションに参加した約1万人の中から主人公の藤野涼子役に抜擢された藤野涼子が注目される。2015年10月30日、本学マス・コミュニケーション学科の「エンタテインメント」コースの演習実習に参加してもらっ

た植田ゼミOBで現在、芸能事務所「テアトルアカデミー」でマネージャーをする母袋直哉氏に抱かれ、彼女は小学5年生の頃、「テレビに出たかった」という理由で芸能事務所「テアトルアカデミー」に入り、公立中学校在学中で14歳であった2014年に応募したと言う。作中の役名をそのまま芸名に使ったことでも話題を集めた。同作では、報知映画賞やヨコハマ映画祭・最優秀新人賞を獲得し、その演技力の高さから、今後の成長が期待されるが、当面は学業に専念するとのことである。

出版社の主催では、女子中学生向け雑誌である新潮社「ニコラ」モデルを選ぶ「ニコラオーディション」が有名であり、グランプリには毎回5～6人が選ばれ、過去、新垣結衣、能年玲奈らを輩出してきた。2009年グランプリの古畑星夏はフジテレビ「めざましテレビ」に出演している。2014年の第18回は中野あいみなど6人がグランプリになった。中野あゆみはテレビ東京「おはスタ」にレギュラー出演している。集英社が開催した次世代アイドル発掘オーディション「グラビアJAPAN」で2009年、準グランプリに選ばれた清野菜名はドラマ「コウノトリ」で次世代演技派として好演した。講談社の漫画雑誌「週刊ヤングマガジン」が主催していたグラビミス・オーディション「ミスマガジン」は過去に北乃きい(2005年グランプリ)、倉科カナ(2006年グランプリ)、新川優愛(2010年グランプリ)、乃木坂46・衛藤美彩(2011年グランプリ)などを輩出した人気オーディションであったが、現在は「ミスiD」と名前を変えたアイドルオーディションとなっている。事務所に所属しているプロでも応募できる本オーディションは様々な賞が設置され、幅広いジャンルで活躍できるアイドルを発掘するオーディションとなっている。江戸川大学・西条ゼミに所属した前述の丸山果鈴は、2013年のセミファイナリストであった。その時のグランプリ受賞者は玉城ティナである。その他、「ミスiD2014」の稲村亜美、「ミスiD2015」の都丸紗也華(FYT)などがグラドルとして活躍している。中学生にも見える童顔で話題騒然になった「ミス

iD2016」長澤茉莉奈は「ツインテールが似合うグラドル」として人気急上昇している。

その他、女性ティーン雑誌モデルを選ぶ「ミスセブンティーン」、男性モデルや俳優を選ぶ「ジュノン・スーパーボーイ・コンテスト」などがある。2010年の「ミスセブンティーン」に選ばれた森川葵は、演技派女優として活躍が目立っている。2011年の新川優愛と中条あゆみも映画やドラマに出演している。2013年の大友花恋は、2015年4月公開「案山子とラケット」で平佑奈とW主演した。2015年のマーシュ彩は、アメリカ人の父と母を持つハーフで、フィギアのような美少女ぶりから「第二の1000年に一度の美少女」と話題になった。主婦と生活社が発行する月刊雑誌「JUNON」が1988年から毎年開催している美男子コンテスト「ジュノン・スーパーボーイ・コンテスト」でファイナリスト以上の俳優は「ジュノンボーイ」と呼ばれ、受賞者は芸能プロダクションと契約し俳優デビューすることが多い。第19回グランプリの溝端淳平には40社からのオファーがあった。その他、第2回グランプリの武田真治、第14回グランプリの小池徹平、第15回グランプリの平岡祐太などがある。川鍋朱里は「JUNON ガールズコンテスト」グランプリに選ばれ、テレビ、CMで活躍中である。

出版社主催オーディションは、女性誌問わず随時行なわれており、選抜方法の一つにファンが参加できる「読者投稿形式」が選択されていることも特徴である。しかし、「ラブベリー」(徳間書店)、「ハナチュー」(主婦の友社)など休刊するファッション雑誌も増えており、構造的な「出版不況」の中、採算圧迫で体力消耗が激しい出版社がオーディションを継続的に開催できるかは微妙である。

このように数多くのオーディションが開催される背景には、消費サイクルの早いアイドル市場において、活況を呈するアイドルグループとの対抗上、「フレッシュさ」「若さ」は、アイドル女優やモデルに対してもファンが求める重要な要素となっていることが挙げられる。「ヴァーチャル空間」の拡大により具体的な素の存在に基づく「現実空間」における「キャラクター」性が容易に晒され

る現在、子供から大人へと至る途上における「儂さ」だけが独自の輝きを放つこと許されるため、運営側は絶えず、そのような「若さ」のかけがえない魅力が凝縮された存在を追い求めることになる。また、第9項で見たように、オリジナル動画で数千人のフォロワーを持つ人気のYouTuberやニコ生主、自身のファッションをInstagramで紹介する読者モデルなど、「ヴァーチャル空間」の人気者が増えている。このようにインターネットを使って「セルフプロデュース」するアイドルの増加は、芸能事務所や、出版社・映画会社などのメディア企業にとって、その存在意義を問われる面もあり、オーディションによる選抜、育成、活動場所の確保などで、これら「セルフプロデュース」アイドルに対して優位に立てるかが、重要になっている。

## 10.6 素人系アイドル

一方で、このようなオーディションを経ずに、アイドルが持つ重要な要素「素性」を備えているのが、「美少女図鑑」出身である。全国各地の女の子らを地元で扱ってグラビア化するフリーペーパー「美少女図鑑」はかつて話題を呼んだが、「沖縄美少女図鑑」出身の二階堂ふみ、黒島結菜、「新潟美少女図鑑」出身の馬場ふみか、山田愛奈、「岡山美少女図鑑」出身の桜井日奈子のように、「美少女図鑑」がきっかけで芸能界入りしたアイドル女優が増えている。黒島結菜は、2015年、「あしたになれば。」や「ストレボ・エッジ」など年間6本もの映画に出演した。桜井日奈子は、2014年、「美人果つる土地」とされる岡山の美少女・美人コンテストでグランプリを獲得し、「岡山の奇跡」とも呼ばれた。2015年はコプロラや大東建託のCMに出演して、一気に顔と名前が知られるようになった。

「美少女図鑑」は、元々「街に美少女を増やそう」というテーマに芸能プロダクション・モデル事務所に所属していない地元の美少女をモデルに起用したフリーペーパーであり、地元のヘアサロンが協賛して発行される。最近は、「鳥取美少女図鑑」から「ニコラ」モデルを経て女優になるという二

階堂ふみと同じ足跡を歩んでいる山本舞香が注目されている。山本舞香は、14代目「リハウスガール」や「JR skiski」など登竜門的CMに抜擢され、フジテレビ「南くんの恋人～my Little Lover」でドラマ出演を果たした。

「美少女図鑑」モデルがアイドル女優に抜擢される理由として、芸能界には無縁で、まっさらな素人の美少女であることが、在京の芸能プロダクションには価値が高いことが挙げられる。芸能活動経験がある過去を嫌い「素人性」を求める秋元康によるオーディションと通じるが、これは、女優であっても、アイドルグループと同様、もはや「仮想空間」にいて遠くから仰ぎ見る「偶像」存在でなくなっており、具体的な素の存在に基づく「現実空間」における「キャラクター」性が求められることを意味する。もちろん、これには既に芸能事務所に所属した状態で、在京の芸能プロダクションがスカウトすることは、移籍トラブルの原因になるという業界側の事情もある。

また、オーディションの数が増え、なかなか逸材を見つけにくくなっているため、「原宿駅前パーティーズ」（第5項で詳説）のように、全国から集まる竹下通りでスカウトして、アイドルの原石をいち早く見つける方法に変えた「ライジングプロダクション」の例もある。ライジングプロダクションは従来、他の事務所と同様、オーディションで新人を採用してきたが、2015年3月、本社も原宿に移して、スカウト体制を整備した。実際に、「原宿駅前パーティーズ」メンバーの中にはスカウトから数週間でステージに立ったメンバーも存在する。今後、構成する4グループ以外にグループ数を増やす計画もあり、将来性があれば、ステージに積極的に起用する計画である。その他、ドラマ「恋仲」「表参道高校合唱部！」に出演した唐田えりかのようにマザー牧場でアルバイト中にスカウトされたことで話題になった例がある。

あるいは、全国多数の大学で行われる「ミス・コンテスト」が、従来からの「女子アナ」への登竜門である以外に、芸能事務所が「ミス・キャンパス」たちを集め、モデルや女優などの分野で活

動していくプロジェクトも開始されている。ミスに選ばれなくても、ファイナリストや準ミスでもスカウトされることも多く、ミスコンはエントリー時期から既にインターネットで話題を集めている。「アイドル・ブーム」が長期化する中、目の肥えたコアなアイドルファンが増えており、情報発信力の高い彼らを魅了することが、口コミでの人気の拡がりにもつながる。たとえば、「CQC's」は、福岡県下の大学に通う「ミス・キャンパス」たちにより構成され、地元福岡を中心に活動するアイドルグループである。芸能事務所に所属せず学内イベントで歌やダンスを披露する「ユニドル」（第7項で詳説）とは異なる存在である。その他、撮影会などに参加して「人気投票企画」でアイドルになるチャンスを待つ大学生も少なくない。

## 10.7 アスリート・アイドル

スポーツ分野では、フィギュアスケートの羽生結弦や浅田真央、バレーボールの木村沙織や石川祐希、テニスの錦織圭、卓球の福原愛や石原佳純、ゴルフの伊・ボミなど、既にアイドルの人気を博している「スター選手」が存在するが、本項では、スポーツ戦績では未だ注目される水準には達していないが、ファンの間ではアイドル人気を獲得している「アスリート・アイドル」を挙げる。女子ビーチバレーの坂口佳穂は、高校時代、新垣結衣、能年玲奈らが所属する芸能事務所「レプロエンタテインメント」でタレント活動をしていたこともあり、2014年春にダンスからビーチバレーに転向すると、天真爛漫な笑顔と抜群のスタイル、小麦色の肌により、「浅尾美和以来のアイドル」として注目を集めた。更に2015年8月30日からグラビアのネット配信を始め、日本テレビ「メレンゲの気持ち」に出演すると、人気上昇した。デビューイヤーである2015年の戦績は6大会15試合に出場しわずか2試合の勝利に留まるなど、現段階では注目度に結果が伴っていないが、東京五輪出場（会場は「潮風公園」）を目指しており、今後、スポーツ戦績が向上することが期待される。

新体操の畠山愛理は2014年1月に「ミス日本」特別賞を受賞して注目されているが、体操の笹田

夏実は「ポスト田中理恵」と呼ばれる「新アイドル」である。サーフィンの水野亜彩子と田岡なつみは、サーフィンが2020年の東京五輪において、野球、ソフトボール、空手、ローラースポーツ、スポーツクライミングと共に追加種目候補とされると、急に注目され始めた。水野亜彩子は15歳でプロサーファーになり、2015年日本国内ランキング（ショートボード）第9位であるが、フジテレビの「ジャンクスports（世界を相手に頑張る女子アスリートSP）」に出演したところ、視聴者から「かわいい」「応援したい」とファンが増えた。田岡なつみは、16歳でプロサーファーになり、2015年日本国内ランキング（ロングボード）第3位であるが、雑誌で「サーファーアイドル」と紹介され有名になった。五輪追加種目の正式決定は2016年8月に行われる予定であり、結果次第で彼女たちのアイドル人気も変わって来るはずである。

中学3年生で100mバタフライ日本新記録を樹立した水泳の池江璃花子は、2015年10月29日のテレビ朝日「報道ステーション」で紹介されると、デビュー時「広末涼子」似のキュートな顔立ちにより、ネットでは「可愛い!」「香椎由宇にも持田香織にも見える」と騒然となった。プロゴルファーの江澤亜弥は2013年にプロテストに合格、小動物のような癒し系笑顔で「ゴルフ界一チャーム」と呼ばれる。女子テニスの澤柳璃子は「週刊現代」表紙に掲載されるなど、注目度が高い。その他、団体競技では、サッカー「なでしこ」の仲田歩夢や猶本光が「アイドル」になっている。

「アスリート・アイドル」は、スポーツの試合における活躍により大衆が憧れる「我々のスター選手」ではなく、個々のファンが独自にマイナー・スポーツにおける無名選手を発見、「僕たち・私たちのアスリート」、そして「僕だけ・私だけのアスリート」として応援する存在である。まず、認知度が全くない状態でインターネットのクチコミにより存在を認知し、人気と知名度が上昇するに伴いスポーツ戦績も向上するように応援する、ファンが育てていく「対象」でもある。ファンは

「アスリート・アイドル」が「スター選手」へと成長する「過程を流すドキュメンタリー」を見ており、どのように成長するかを楽しむ。ファンは現在進行形で「アスリート・アイドル」と共に前進している感覚を味わえる。

スポーツ運営側にとっても、このような「アスリート・アイドル」の出現は悪いことではない。マイナーなスポーツ競技にとっては、「アスリート・アイドル」が誕生することで一気に注目度を高めることが出来るからである。「カー娘」と呼ばれたトリノ五輪（2006年）のカーリング日本女子代表チームで人気を集めた「マリリン」こと本橋麻里、北京五輪（2008年）で5位に終わった「オグシオ」の愛称でブレイクした小椋久美子・潮田玲子の女子バドミントンペア、かつて「ビーチの妖精」と呼ばれグラドルとしても活躍した浅尾美和などの先行事例がある。それは、2015年秋に英国で開催されたラグビー・ワールドカップの活躍で一躍、人気者になった「五郎丸歩」や「クラセブンズ」に通じるものでもある。

また、シンクロナイズドスイミング選手で北京五輪（2008年）5位に終わった青木愛や、フィギュアスケート選手で浅田真央の実姉として有名な浅田舞のように、引退後にグラビアで活躍して、アスリート時代の知名度や人気をはるかに上回る成功を収めた者もいる。Jリーグ発足・日韓W杯から続く「サッカー人気」も、W杯アジア予選で敗退すれば、一気に冷え込み急降下する懸念がある。現在の日本代表は2000年前後にドイツ代表が直面した「世代交代の遅れ」を連想させ予選敗退する可能性は高い。サッカーが人気凋落すれば、ラグビーなどマイナー・スポーツが、「アスリート・アイドル」をレバレッジとして、サッカーの代替として隆盛を極める期待も高い。

「アスリート・アイドル」が「健康美」溢れるのに対して、「儂さ」を感じさせるのが文化人アイドルである。代表事例が、「美少女棋士」と呼ばれる将棋の竹俣紅である。12歳のアマチュア時代に女流王将戦の本戦に出場し話題になり、14歳でプロ入り、現在17歳でタレントとしても活躍中である。

「アイドルグループ」と異なり、「アスリート・アイドル」や「文化人アイドル」に対してファンが覚える魅力として、「ギャップ萌え」が挙げられる。「ギャップ萌え」とは、競技中の厳しい眼差しからは想像できなかった「かわいい」面を見せることにより、ファンに与える好印象のことである。ポイントは「意外性」であり、ファンにとっては「まさか」を発見できた「喜び」と「驚き」があり、アイドルに対する「好印象」が跳ね上がる。そして、この「発見」を誰かに話さずにはいられなくなり（誰かと共有・共感せずにはいられなくなり）、「ファンコミュニティ」（第11項で詳説）が形成される。

### 10.8 「異領域のアイドル」まとめ

本項で述べた「異領域のアイドル」は、アイドルグループと明確に区別すべきであるとの意見もある。アイドルグループは平均年齢が低く、メンバーも「グループみんなで頑張っていきたい」という部活動的な感覚で活動していることが多く、「儲からなくても親元で暮らしていける」という考えも強い。最近では、小学生で活動を始める者も多く、アイドルは年々、低年齢化している。たとえば、アイドルファンの間で話題が沸騰している人気著しい「原宿駅前パーティーズ（ふわふわ）」（第5項で詳説）のエース岩崎春果は小学6年生である。「アイドル・ブーム」でたくさんアイドルグループが活動しているが、実態は、ビジネスとして成立しているグループは少なく、どのグループも知名度が低く集客できないと苦しんでいる。インディーズアイドルの中には月収わずか1～2万円で活動しているメンバーもいるため、人気に恵まれないとアイドル活動に見切りを付けて、学業専念（大学進学や海外留学など）したり、転身（女優、グラビア、タレント、音楽、声優、モデルなど芸能関係の他、ヘアメイクなど芸能以外の職業）したりするケースが多々ある。最も多いケースが全体の4分の1を占める「学業専念」であり、多くのアイドルが「普通の女の子」に戻っていく。

グループ卒業時の年齢を見ると、中学と高校を

卒業する「15歳」と「18歳」にピークが来ている。2015年12月31日、まだ17歳の鞘師里保（「モーニング娘。」エース、後述）が卒業して、一般的には「若過ぎる」印象を持たれるが、「アクターズスクール広島」でダンスのレッスンを始めたのが6歳、「モーニング娘。」オーディションが12歳であり、既に12年間の活動を体験している「ベテラン」である。江戸川大学マス・コミュニケーション学科にも、「元アイドル」が少なからず入学して来る。「アイドルは25歳まで」としばしば言われるが、この年齢までアイドルを務められるのは、ごく一部の実力派に限られる。アイドルグループの多くは次のステップを考えなければならない立場にあり、常に「いつ辞めるか」を考えているとも言われる。

一方で、アイドルグループでの活動を体験することにより、若いメンバーはその先に色々な拡がりが見えるようになるという効用もあり、アイドルを卒業することは必ずしもマイナス要素ばかりではない。秋元康が「AKB48をステップにして欲しい」と発言している通り、アイドルとしての活動期間は、様々な選択肢の中から、自らの適正に合った活動路線を見つけるための「準備期間」という側面もある。

2015年も、「モーニング娘。」のエース鞘師里保が本場で英語とダンスを勉強するため海外留学すること、「PASSPO ☆」奥仲麻琴が女優活動すること、アンジュルム「福田花音」が作詞家に転向することを理由として、アイドルを卒業している。ハロプロプロジェクトを経て「スマイレージ」、そして「アンジュルム」として活動してきた福田花音が作詞家に転身したり、「地下アイドル」だった姫乃たまがライターに転身したり、などの事例も生まれた。鞘師里保に代わる新メンバーを応募する「モーニング娘。」オーディションの応募条件は「10～17歳の女性」となっており、アイドルグループに所属するメンバーの大半は10代前半で加入して10代のうちに卒業していく。

第4項で詳説した通り、ファンは常にアイドルに「若さ」「フレッシュさ」を求めるため、アイドルグループは「うつろいゆくもの、儂い存在」

である。表13は「ハロー！プロジェクト」のアイドルグループを示すが、「アンジュルム」がオーディション（応募者1,800人）から選ばれた上國料萌衣（高校1年生）を新メンバーとして加え、「カントリー・ガールズ」に研修生の船木結・梁川奈々美（中学1年生）を昇格させるなど、メンバー間「世代交代」を図る一方、2013年以降に結成された新グループが多い（11年間の活動を終止したBerryz工房に代わる）ことでも分かる通り、グループ間「世代交代」は激しくなっている。

表13 「ハロー！プロジェクト」グループ一覧

結成年月	グループ名	人数	リーダー
1997年9月	モーニング娘。	12人	譜久村 聖
2005年6月	℃-ute	5人	矢島 舞美
2009年4月	アンジュルム	9人	和田 彩花
2013年2月	Juice = Juice	5人	宮崎 由加
2014年11月	カントリー・ガールズ	7人	嗣永 桃子
2015年1月	こぶしファクトリー	8人	広瀬 彩海
2015年4月	つばきファクトリー	6人	山岸 理子

【出典】各種情報を基にして筆者が独自に作成

一方、「異領域のアイドル」の多くは既に成長した大人であることが多く、「セルフプロデュース」できる部分もある。一人暮らし率も高く、自らが選んだ専門分野で「ソロで活躍したい、上がっていききたい」という野心が強いため、人気が出なくてもアイドルグループのように見切りを付けることはせず、目標達成のために留まって活動を継続する者が多い。「かわいさ」を売りにする必要がないため、「25歳が一区切り」と引退を迫られることもなく、総じて活動期間が長くなる。彼らの多くが望むのは「息の長い活動」である。たとえば、「30歳まで」としばしば言われる「女子アナ」も、この年齢までアイドルの人気を誇るのはごく恵まれた僅かな者に限られ、男性アナと同様、多くがそれ以前に特に「見切り」を付ける必要もなく、定年まで局に留まることを願う「従順な社畜」になってしまう。雛形あきこや優香のような先駆者の成功事例があるため、グラドルには「タレントを目指すアイドルが名前を売るための期間」と位置付けて、グラドルをステップにテレビ番組中心の活動へシフトする者も少なくない。特に大手女優系事務所は、アイドルとしてのポジ

ショニングを次の道への準備と明確に位置付けている。もともと将来は女優中心に活動しようとしている若手に経験を積ませる意味もあり、アイドルになるケースも多い。

本項で述べた「異領域のアイドル」もまた「ファンが日々努力するひたむきな姿に心を打たれ、支えようと非合理にお金と時間を過剰投入する」対象である点で極めて「アイドル」的であり、対象に対する「想い」が強ければ強いほど投入量が増大するため、応援スタンスは「スター」に対するそれとはまったく異なる。

## 11. アニメアイドルの出現

ファン自らが「アイドル」に少しでも近付きたいという欲求の高まりは、「アイドルアニメ」というジャンルが近年確立されたことにも見て取れる。スポットライトを浴びるアイドルの華やかさへの憧れは、魅力的なアイドルに投影される。アニメは視聴者の憧れを反映するが、「アニメアイドル」が次々と製作された根底には、現在、視聴者がアイドルに抱く素朴な憧れが身近になっていることが潜んでいる。「アイドルアニメ」の例としては、プロデューサーとなってアイドルをプロデュースするゲームのテレビアニメ化「アイドルマスター<sup>(209)</sup>」、小学生女兒を中心に老若男女を問わず幅広い層からの支持を集める「アイカツ!<sup>(210)</sup>」、学校の部活動としてアイドル活動をするスクールアイドルのストーリー「ラブライブ!<sup>(211)</sup>」、AKB48をモデルにした「AKB0048<sup>(212)</sup>」などがある。それ以外にも、「うたの☆プリンスさまっ♪<sup>(213)</sup>」、「少年ハリウッド<sup>(214)</sup>」、「幕末ロケット<sup>(215)</sup>」、「魔法の天使クリィミーマミ<sup>(216)</sup>」、「Wake Up, Girls!<sup>(217)</sup>」、「WHITE ALBUM<sup>(218)</sup>」、「プリティーリズム・レインボーライブ<sup>(219)</sup>」などの「アイドルアニメ」がある。

特に、2015年は、「アイドルアニメ」にとって画期的な年であった。ジャニーズやAKB48を中心としたアイドル・ブームはまだまだ堅調であったが、これが「仮想空間」にも拡大、一般化して「アイドルアニメ」がエンタテインメント市場を



席捲した。現実のアイドルは近年、ちょっとでも容姿や体型が落ちるとインターネット上で「劣化」と騒がれてしまうが、アニメのアイドルは「劣化」せず、純粋にグループのために頑張る理想の集団であるとファンに映った。「ラブライブ！」は、劇場版「ラブライブ！ The School Idol Movie」(2015年6月公開)が公開150日目の2015年11月14日に観客動員数200万人を突破、興行収入は深夜アニメ初の劇場版では「魔法少女まどか☆マギカ [新編] 叛逆の物語」を抜いて過去最高となる28億円を記録した。2015年流行語大賞の候補に熱狂的ファンを表す「ラブライバー」が選ばれるなど社会現象化した。

「ラブライバー」が成立した背景には、インターネットやスマートフォンの普及による「ファン母数の拡大」と「ファンコミュニティ内のつながりの親密化」の2つが挙げられる。いつでもどこでもYouTubeなど動画で視聴し、音楽をダウンロードし、SNSを利用してアイドルと直接会話することが可能である。少ない労力、費用、時間を投入することでもファン活動が可能になったことにより、アイドルファンの母数は飛躍的に増加した。また、これまでイベントやコンサートなどの現場でしか交流することがなかったファン同士が、TwitterやFacebookなどのSNSで日常的につながりを持ち、アイドルに対するファン心理や日常生活までも共有するようになった。応援するアイドルが同じであるという共通点を契機として、年齢や生い立ちがまったく異なる見ず知らずの人に仲間意識を持って話しかけて良いという権利を得て、国や地域を超越した強い「つながり」が生まれた。

天笠・井上・小川 [2015] は、「ラブライバー」のようなアイドルのファンコミュニティにおける「つながり」を分析する概念として、「社会関係資本」(ソーシャルキャピタル)を用いた。天笠・井上・小川 [2015] によれば、「社会関係資本」は「人々の中の協調的な行動を促す『信頼』『互酬性の規範』『ネットワーク(絆)』」のことを指し、人、モノ、金など従来の資本とは異なり可視化できないが、人が社会生活を営む上で大切な役割を

果たす新たな資本として注目される。昨今のアイドル・ブームは、アイドルグループ自体の活動は重要であるが、ファンコミュニティ内での仲間との存在こそが、アイドルファンを継続する価値となっていることが背景にあり、「社会関係資本」化しているという分析である。

加えて、水樹奈々<sup>(220)</sup>、竹達彩奈<sup>(221)</sup>、花澤香菜<sup>(222)</sup>、堀江由衣<sup>(223)</sup>、悠木碧<sup>(224)</sup>、小倉唯<sup>(225)</sup>など声優がアイドルとして捉えられることも一般的になっている。画の吹き替えやアニメのアフレコで裏方として活躍していた声優が、オタクと呼ばれるコアなアニメファンに支えられ、注目を集めるようになった。そして、声優が出演した作品の役名で楽曲を歌う「キャラソン」ブームが生まれた。作品人気との相乗効果により、オリコン・チャートでトップ10入りすることも多くなっている。その流れにおいてイベントやコンサート数も増加している。既にライブによるパフォーマンスにより「キャラソン」と一線を画す存在も数多く出現している。CD発売に留まらず、キャラクターを演じる声優によるライブを積極的に行うグループの数も増えている。

ミスコン受賞者やアイドル出身の声優も増え、イベントではコスプレを披露するなど、アイドルとしての活動内容が増えている。水樹奈々のように、日笠陽子<sup>(226)</sup>、喜多村英梨<sup>(227)</sup>などは、個人名義でのアーティスト活動が人気を呼んでいる。かつては顔を出してのテレビ出演に抵抗を示す声優も少なくなかったが、新しいアニメ作品がスタートするにはイベントが開催されることが一般的になった近年、ファンの前に出ることが前提になってきたこと、ネット動画にも活躍の場が広がったこと、ホリプロやアミューズなど大手芸能事務所が声優のマネジメントに力を入れ始めたことなどから、声優がアイドル的活動をする「場」が増加している。本業の声優業だけでなく、CD発売やライブなどの音楽活動、声優専門誌へのグラビア出演、写真集やイメージビデオの発売、アニラジなど幅広く活躍するようになった。新規事務所や芸能プロの声優部門開設により打ち出されたのが、アイドル声優で結成されたユニットである。

高垣彩陽<sup>(228)</sup>、豊崎愛生<sup>(229)</sup>、戸松遥<sup>(230)</sup>、寿美菜子<sup>(231)</sup>の4人からなるユニット「スフィア」、小倉唯、石原夏織、能登有沙、松永真穂からなるユニット「StyLipS」、声優とアイドル活動の両立を目指す「i☆Ris<sup>(232)</sup>」などを事務所がプロデュースした。「ラブライブ！」から生まれた「μ's」と「プリパラ<sup>(233)</sup>」から生まれた「i☆Ris」は、アニメ映像とシンクロしたステージを展開して、歌うだけではなく踊れるグループである。

更に、専門学校を卒業した後、長い下積みを経て当たり役を手にしてアニメファンに認知されてアイドル化する流れが、事務所のオーディション後直ぐアニメの主役を手にするパターンが増加したことに伴い、現役女子高生アイドル声優も増えた。卓越した演技力よりも、若さ溢れる「フレッシュさ」や「ルックス」が求められるようになっていく。「アイドルマスター」や「ラブライブ！」のような人気アニメ作品にこれら若手声優が出演して人気を得ている。また、洲上舞<sup>(234)</sup>のようにアイドル並みのルックスやスタイルを持つ声優が写真集を出すことや、「アイドルマスター」声優の青木瑠璃子<sup>(235)</sup>、藤井ゆきよ<sup>(236)</sup>、平山笑美、山本希望<sup>(237)</sup>、「ラブライブ！」声優の飯田里穂<sup>(238)</sup>、楠田亜衣奈<sup>(239)</sup>、新田恵海、「アブソリュート・デュオ」の今村彩夏<sup>(240)</sup>、「極黒のブリュンヒルデ」の田所あずさ<sup>(241)</sup>、「精霊使いの剣舞」の優木かな<sup>(242)</sup>、などのようにTwitterやブログを通じてファンとコミュニケーションを取ること、声優イベント（ライブ）が開催されることも一般的である。人気声優によるユニットが収容人員3万人の会場で2日間のライブが行われるようになった。日本武道館、さいたまスーパーアリーナに留まらず、「アイドルマスター」シリーズは2015年夏、西武ドーム2daysの10周年記念ライブに7万6,000人を動員させ成功させている。「ラブライブ！」から派生した声優9人組（新田恵海、内田彩、久保ユリカ、南条愛乃、Pile、徳井青空、三森すずこ、飯田里穂、楠田亜衣奈）によるユニット「μ's（ミューズ）」は、2015年末の「第66回NHK紅白歌合戦」にも出場した。2015年のアーティスト別音楽ソフト（シングル、アルバム、

DVD、ブルーレイディスク）総売上金額は31.5億円であり、表14の通り、全体で第8位に入るほどの人気であった。

表14 年間アーティスト別総売上金額（2015年）

順位	アーティスト名	売上金額
1位	嵐	143.3億円
2位	AKB48	112.9億円
3位	三代目J Soul Brothers	68.6億円
4位	Kis-My-Ft2	57.8億円
5位	関ジャニ2	54.7億円
6位	乃木坂46	44.9億円
7位	DREAMS COME TRUE	33.1億円
8位	μ's	31.5億円
9位	Mr.Children	30.5億円
10位	東方神起	28.9億円

【出典】オリコン

一方、アイドル声優は、一時的に大きな人気を得るものの、僅かな活躍期間で次世代の声優にポジションを取って代わられ、仕事も露出も激減するケースも多い。その点において、一般アイドルと同様、アイドル声優も消耗品と言うことができる。他方、経験に裏打ちされた演技と長年に亘るファンとの交流により、6年連続で「NHK紅白歌合戦」出場を果たしている水樹奈々を筆頭に、田村ゆかり<sup>(243)</sup>、堀江由衣らは声優としての活躍を長期に亘り継続しているが、このようなケースはごく稀である。「μ's（ミューズ）」は、2015年12月5日、2016年3月31日、4月1日の東京ドーム公演を「ファイナル公演」にすることを発表した。「劇中に登場するグループがそのまま現実世界に飛び出してきたユニットであることから、アニメのストーリーが一区切ついたため、ユニットの役割を果たした」ことを理由として、2016年3月2日に最後のシングルを発売して、劇場版アニメの通り解散する内容であった。人気のピーク期だけに、「ラブライバー」には衝撃的なニュースとなり、ファンからは大きな悲鳴が上がったが、現実のアイドルと同様に活躍期間が短いことが見通しされたものであった。

また、アイドル声優ファンは一般アイドルと区別して応援する傾向が強く、2015年の声優アワード（主演女優賞）を「アナと雪の女王」でアナ役の主演を務めた神田沙也加が受賞した際には、彼女は本職が声優ではないと受賞を疑問視する意

見もあった。2015年春からアイドルグループSKE48の松井玲奈<sup>(244)</sup>や元KARAの知英(ジョン)<sup>(245)</sup>、元AKB48の大島優子<sup>(246)</sup>が声優を始めたことについても、アイドル声優ファンとアイドルファンでは受け止め方が大きく異なることも特徴的である。

今後は、女性声優によるアイドルグループに留まらず、「うたの☆プリンスさまっ♪」発の「ST☆RISH」が好調なCD売り上げを記録しているように、「ST☆RISH」に続く男性声優アイドルグループの活躍が期待される。また、女性向け2.5次元アイドルとして多数のプロジェクトが始動する中、2016年春にスマホゲームからスタートする「ドリフェス!」は、カードと連動して、芸能事務所「アミューズ」所属の新人俳優5人、石原壮馬(天宮奏役)、溝口琢矢(及川慎役)、富田健太郎(佐々木純哉役)、太田将熙(片桐いつき役)、正木郁(沢村千弦役)がキャストを担当するが、注目される。

## 12. アイドルのグローバル化

「ヴァーチャル空間」の特徴として挙げられるのが、国や人種、宗教という境界を越えボーダレスに情報が流通することであり、特にエンタテインメント分野は「ヴァーチャル空間」を通じてグローバル化を加速化させる。「アイドル」も本傾向の例外ではない。柗木りおは、ニコニコ生放送、ツイキャスなど4つの動画サイトで、2013年1月25日から1,071日連続(2015年12月31日現在)で、深夜2時ごろまで2～5時間ネット生放送番組を配信して、毎日会える「ネット放送アイドル」と呼ばれている。「ヴァーチャル空間」における活動を重視し、アジアや欧州など海外ファンが多いため、日本語の他にフランス語、英語、中国語、韓国語の歌詞テロップを入れて、ミュージックビデオをネット配信している。番組では歌やダンス、フリートークなどを披露している。本人の「毎日のネット放送のようにセルフプロデュース作品を作りたい」という希望から、ミュージックビデオをセルカ棒<sup>(247)</sup>で撮影している。

内田[2011]は、「日本のように国内に同国語の十分なリテラシーを持つ読者が1億以上というような市場を持つ国は世界にはほとんど存在しない」と指摘したが、日本のマス・コミュニケーション産業、エンタテインメント産業が、言語のみが構成要素ではないとは言え、一定の市場規模を維持できているのは、文化的な均質性が大きく影響している。多く経済活動において国外マーケットを視野に入れることは当たり前であるが、日本のマス・コミュニケーション産業、エンタテインメント産業は目の前に広がる「日本語マーケット」を対象にした活動をするだけで、一定の規模を保てる「内向き」の市場である。ビジネス面を考慮すれば、リスクが高い海外進出を目指す必要に特に迫られていない。たとえば、日本の音楽産業が不況下においても世界第2位の市場規模を維持できているのは、文化的な均質性が大きく影響している<sup>(248)</sup>。しかし、YouTubeの活用により、「BABYMETAL<sup>(249)</sup>」や「きゅりーぱみゅぱみゅ」のように、海外で人気を得る日本人アーティストも生まれている。クオリティがしっかり確保されていれば、「ヴァーチャル空間」において、全世界から注目される時代になった。

10代を中心とした若い音楽ファンはインターネットが中心であり、YouTubeを通じて海外の音楽や情報に触れられる機会が増えた。良い音楽ならジャンルを問わず聴く傾向があり、洋楽のシングルヒットも増加している。表15の通り、2014年のiTunesの年間シングルチャートの上位15曲中洋楽が5曲を占めた(3位、4位、5位、12位、15位)<sup>(250)</sup>。

図5の通り、ここ数年は1～3曲だったのに比べ、洋楽人気伸びている。欧米の市場の変化も一因である。CD売り上げ枚数の減少傾向が続いている一方、急速にストリーミングへシフトしている。ストリーミングでは、シングルのプレイリストを組んで楽しむことが一般的であり、そのためシングルヒットが重要視されるようになっていく。キャッチーなメロディやインパクトの強いフレーズのある曲が増え、ポップ色が強くなっており、日本のファンにも受け入れられやすくなって

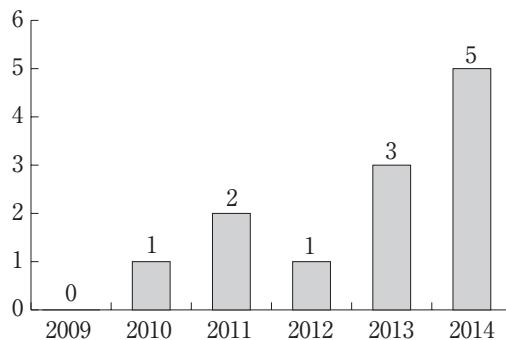
表 15 iTunes 年間トップ 15 (2014 年)

順位	曲名	アーティスト
1位	レット・イット・ゴー ～ありのままで～	松たか子
2位	ひまわりの約束	秦基博
3位	ストーリー・オブ・マイ・ ライフ	ワン・ダイレクション
4位	レット・イット・ゴー	イディナ・メンゼル
5位	ハッピー	ファレル・ウィリアムス
6位	Darling	西野カナ
7位	ずっと feat.AN-KUN & TREE	SPICY CHOCOLATE
8位	春風	Rihwa
9位	RPG	SEKAI NO OWARI
10位	生まれてはじめて	神田沙也加, 松たか子
11位	にじいろ	絢香
12位	We Are Never Ever Getting Back Together	テイラー・スウィフト
13位	Mighty Long Fall	ONE OK ROCK
14位	Happiness	シェネル
15位	プロブレム	アリアナ・グランデ

【出典】「日経エンタテインメント 2015 年 3 月号」84p.

いる。音楽シーンが活性化したのは、ワン・ダイレクション<sup>(251)</sup>とアリアナ・グランデの2大アイドルがソーシャルメディアを用いて若年層にアピールしたことが大きく、ブレイクした<sup>(252)</sup>。NTTドコモがCMに起用したワン・ダイレクションは、日本企業が開発したスマートフォンアプリ「ツイートキャスト」を用いて、スマホのカメラで撮影した動画を生中継して、ファンとの交流に愛用している。東方神起は、スマートフォン向け定額配信サービス「dビデオ」でライブステージを生配信している。

これは、一つの大きな転換である。日本の音楽マーケットは世界的に見れば、「ヴァーチャル空間」(音楽配信)よりも「現実空間」(CD)がまだ優勢である稀有な市場である。音楽配信への移行が進んでいる欧米や韓国では、配信とパッケージの売上金額が既に逆転している。そのような中で、日本はまだCDが売れる余地が残されている貴重なガラバゴスのマーケットであり、パッケージの売り上げに限定すれば、アメリカを超えて世界第1位になる。欧米の大物アーティストが、近年は日本の音楽番組への出演、朝のワイドショーへの生出演などを積極的にこなしているが、KPOPアーティストは特に積極的である<sup>(253)</sup>。イ



【出典】「日経エンタテインメント 2015 年 3 月号」84p.

図 5 iTunes 年間トップ 15 に入った洋楽曲数

ンターネット上の「ヴァーチャル空間」では多くの国でグローバル環境が実現しているが、CDという「現物」が流通し、海外からアーティスト「本人」がやって来るというリアルなグローバル環境は、独特な音楽マーケットを有する日本だからこそ成立している<sup>(254)</sup>と言える。

2010年以降のKPOPブームは去ったが、2014年のコンサート動員上位10位のうち、2位と7位は韓国勢であり、東方神起<sup>(255)</sup>は2013年にライブで90万人を動員、CDの総売上枚数も海外アーティストの記録を塗り替えるなど人気を継続している<sup>(256)</sup>。全国各地のドームクラスの会場を見ると、東方神起、BIGBANG、少女時代などが数万人規模のファンを集めている。これら過去に実績を持つ人気グループが今でも日本で集客できることは、KARA<sup>(257)</sup>、少女時代<sup>(258)</sup>、2PMなどがデビューした「KPOPブーム」の余熱の影響として理解できるが、マス・コミュニケーションがまったく報じない「KPOP第2世代」と言える無名の新人たちがファンを集めていることは「ヴァーチャル空間」の影響の大きさを示す証左である。EXO, B.A.P<sup>(259)</sup>、BTOB<sup>(260)</sup>、GOT7、防弾少年団、WINNER、CRAYON POP<sup>(261)</sup>、A Pink<sup>(262)</sup>、Girl's Day<sup>(263)</sup>、AOA<sup>(264)</sup>などが、「KPOP第2世代」である。「KPOPは終わった」とマス・コミュニケーションが報じる通り、テレビなどマス・コミュニケーションから韓国アーティストの姿は消えたが、ドームクラスの施設を初め、全国のコンサート会場にはまだ多くのファンが詰めか

けている。これら「KPOP 第2世代」は、マス・コミュニケーションがまったく取り上げないにも関わらず、毎日のように全国でイベントを行っており集客をしている。理由は「ヴァーチャル空間」を利用した2つの方策にある。

第1の方策は、新人を含め、アーティスト側が日韓の距離を埋めるため、ネットサービスを上手く使っていることにある。彼らは、離日中でも、公式サイトやFacebook、Twitterなどでグループや自らの現況を積極的に発信する。結果として、実際に彼らに会う「現実空間」とネットを通じた「ヴァーチャル空間」の両空間で楽しみを提供し続けている。

第2の方策は、新曲が発売されると、所属事務所がPVなどの動画をネット配信するため、音楽を無料で聴けることにある。代替として、ファンはリアルなイベントの入場料に費用をつぎ込む。韓国ではCD市場が大幅に縮小し、KPOPはCDビジネスに重きを置いていない<sup>(265)</sup>が、日本市場でも、音楽はプロモーションと割り切ってPVをネット配信し、コンサート収入で稼ぐ戦略である<sup>(266)</sup>。

このような「ヴァーチャル空間」を用いたプロモーションの成功は、事務所が小さくても健闘する若手グループの出現を促している。清純派で成功したApink、セクシー系で台頭したGirl's Day、独自路線を貫くCRAYON POPなど、個性を売りに頭角を現すグループが目立つようになっている。韓国には写真週刊誌や青年誌がない影響もあり、アイドルが水着姿になることも少ないため、ガールズアイドルたちが動画やテレビを使ってセクシーさをアピールする。キム・ヒョナ<sup>(267)</sup>、S-STAR、T-ARAなどのアイドルが、肌の露出が激しい衣装と性的描写を思わせる挑発的なダンスを披露し、その傾向がますます強まっている。エスカレートする事態を危惧した韓国放送通信審査委員会がテレビ局各社を召集し、煽情的な露出やパフォーマンスを控えるように勧告する事態も起こった。韓国にはグラビア・アイドルが存在せず、レーシングモデルや、セクシーダンスで盛り上げるプロ野球のチアリーダーがアイドル的な

なっていることも特徴的である。

また、アイドル文化のなかった中国においては、AKB48の姉妹グループとして2012年10月に誕生して、上海を拠点に活動するSNH48が、音楽イベントでの新人賞受賞など注目されるようになり、5期生オーディションの応募者は10万人を超えた<sup>(268)</sup>。SNH48以外にも、2011年からインドネシア・ジャカルタで活動しているJKT48、台湾・台北での活動が計画されているTPE48などAKB48の海外姉妹グループの活動により、アジア各国で日本型のアイドル文化が形成されつつある。

### 13. まとめ

「アイドル」は、うつろいゆくもの、儂い存在である。キティちゃんやミッキーマウス、サザエさんなどのキャラクターと異なり、生身のアイドルが劣化しないこと、変わらないことを続けることは不可能であり、近年ではちょっとでも容姿や体型が落ちると、インターネット上で「劣化」と騒がれてしまう<sup>(269)</sup>。2015年、それを解消すべく、アイドルアニメがエンタテインメント市場を席捲、社会現象化した。アニメのアイドルは「劣化」せず、純粋にグループのために頑張る理想の集団であるとファンに映った。「アイドル自体」は、生きるためにどうしても必要なものでもなく、どちらかと言うと何か余計な存在である。しかし、そこがポイントであり、人間は余計な存在があるからこそ、心が豊かになりうる。アイドルが歌や踊りに必死に頑張るから、自分も一緒に頑張ろうと、ファンはアイドルを応援する。最低限の衣食住さえ揃えば、人は生きていくことができるが、たまには食べ過ぎる、飲み過ぎるということがないと、豊かさを感じるができない。余計な二割増し分が生活にあって、初めて満足が存在する。余計なものが人生に幸せをもたらすが、「アイドル」とはまさにそういう存在である。それ自体に集中して楽しむ訳ではないものが、人を豊かにしてくれる。「アイドル」を「金儲け(ビジネス)」の対象として見るのではなく、「人生に幸せをも

たらずもの」「人を豊かにするもの」と捉える感覚が重要である。たとえば、アイドルが表現する「おんがく」が「音学」ではなく「音楽」であることに、「エンタテインメント」の本質が表れている。そういう感覚を持つことにより、アイドルを、もっと、好きになることができる。

#### 参考文献

- [1] Bourdieu, P. [1984] "Distinction : A social Critique of the Judgement of Taste, Routledge & Kegan Paul.
- [2] Burt, R.S. [2001] "Structural Holes versus Network Closure as Social Capital", by N.Lin, K. Cook and R.Burt eds., Social Capital: Theory and Research, 31-56, Aldine de Gruyter
- [3] Coleman, J. S. [1988] "Social Capital in the Creation of Human Capital", American Journal of Sociology, Vol.94, pp.95-120
- [4] Granovetter, M. S. [1973] "The Strenght of Week Ties, American Journal of Sociology, Vol.78, pp.1360-1380
- [5] Lin, N. [2001] "Social Capital: A Theory of Social Structure and Action, Cambridge University Press
- [6] Nagaike, Kazumi. [2012] "Johnny's Idols as Icons: Female Desires to Fantasize and Consume Male Idol Images, in Galbraith, Patrick W. and Karlin, Jason G., Idols and Celebrity in Japanese Media Culture", Palgrave Macmillan, pp.97-112.
- [7] Putnam, Robert D. [2000] "Bowling Alone: The Collapse and Revival American Community, Simon & Schuster.
- [8] 天笠邦一・井上絢華・小川勝彦 [2015] 「アイドルファンコミュニティの分析～コミュニケーションモデルと社会関係資本」, 第32 回情報通信学会
- [9] 伊丹敬之 [2012] 「経営戦略の論理～ダイナミック適合と不均衡ダイナミズム」, 日本経済新聞社
- [10] 伊丹敬之・軽部大 [2004] 「見えざる資産の戦略と論理」, 日本経済新聞社
- [11] 稲葉陽二 [2011] 「ソーシャルキャピタル入門～孤立から絆へ」, 中公新書
- [12] 植田康孝 [2013] 「AKB48 選抜総選挙におけるロングテール構造とメディア選択」, 『江戸川大学紀要』 No.23, pp.91-114
- [13] 植田康孝 [2015] 『『ライブビューイング』に見る『インフォテインメント』の視座～エンタテインメントのスマート化』, 『江戸川大学紀要』 No.25, pp.185-193
- [14] 植田康孝 [2016] 「ファッション・コーディネートのメディア進化～若者の Instagram 利用急拡大～」, 『江戸川大学紀要』 No.26
- [15] 植田康孝・廣田有里 [2014] 「音楽市場における WTA を実現した AKB48 のエコシステム」, 『江戸川大学紀要』 No.24, pp.195-214
- [16] 植田康孝・木内英太・西条昇・田畑恒平 [2015] 「インフォメーション(情報)とエンタテインメント(娯楽)の融合, インフォテインメント (Infotainment) とは」, 『江戸川大学紀要』 No.25, pp.171-184
- [17] 内田樹 [2011] 「増補版 街場の中国論」, ミシマ社
- [18] 太田省一 [2011] 「アイドル進化論～南沙織から初音ミク, AKB48 まで」筑摩書房
- [19] 大野功二 [2015] 「モバイルゲームのゲームデザインと技術」(徳岡正肇 [2015] 「ゲームの今 ゲーム業界を見通し 18 のキーワード」, ソフトバンククリエイティブ) pp.307-326
- [20] 岡島紳士+岡田康宏 [2011] 「グループアイドル進化論 アイドル戦国時代がやってきた!」, 毎日コミュニケーションズ
- [21] 尾原和啓 [2015] 「ザ・プラットフォーム」, NHK 出版, pp.210-211
- [22] 川上量生 [2015] 「ニコニコ哲学 川上量生の胸のうち」, 日経 BP 社
- [23] 北川昌弘 [2013] 「山口百恵→AKB48 ア・イ・ド・ル論」, 宝島社
- [24] 君塚太 [2012] 「日韓音楽ビジネス比較論」, アスペクト
- [25] 斎藤環 [2011] 「キャラクター精神分析 マンガ・文学・日本人」, 筑摩書房
- [26] 斎藤環 [2015] 「猫はなぜ二次元に対抗できる唯一の三次元なのか」青土社
- [27] 境真良 [2014] 「アイドル国富論」, 東洋経済新報社
- [28] 柴那典 [2015] 「初音ミクはなぜ世界を変えたのか?」, 太田出版
- [29] 陳怡禎 [2014] 「台湾ジャニーズファン研究」青弓社.
- [30] 田島悠来 [2013] 「雑誌『Myojo』における「ジャニーズ」イメージの受容」『Gender and sexuality : journal of Center for Gender Studies』(8), 国際基督教大学ジェンダー研究センター, pp.53-81.
- [31] 田畑恒平・植田康孝 [2015] 「インフォテインメント教育の実践事例 1 (プロジェクト・マッピング)」, 『Informatio』 Vol.12, pp.3-11
- [32] 田畑恒平・植田康孝 [2015] 「インフォテインメント教育の実践事例 2 (3D プリンタ)」, 『Informatio』 Vol.12, pp.13-21
- [33] 辻泉 [2007] 「関係性の楽園/地獄, ジャニーズ系アイドルをめぐるファンたちのコミュニケーション」, 東園子, 岡井崇之, 小林義寛, 玉川博章, 辻泉, 名藤多香子共著『それぞれのファン研究 I am a fan』, 風塵社, pp.243-289
- [34] 西原 麻里 [2014] 「現代の男性アイドル像と〈恋愛〉/〈絆〉の様相—雑誌分析を通じて」, 日本マス・コミュニケーション学会・2014 年度春季研究発表会 (2014 年 5 月 31 日/会場: 専修大学)
- [35] 濱野智史 [2012] 「前田敦子はキリストを超えた<宗教>としての AKB48」, 筑摩書房
- [36] 前川直哉 [2012] 「見られる男性, 見る女性の系譜～絡み合う二次元と三次元」『ユリイカ』44[15], 青土社, pp.138-144
- [37] 三浦文夫 [2012] 「少女時代と日本の音楽生態系」, 日本経済新聞出版社
- [38] 村山涼一 [2011] 「AKB48 がヒットした 5 つの秘密」, 角川書店
- [39] 吉澤夏子 [2012] 『『個人的なもの』と想像力』, 勁草書房.
- [40] 吉光正絵 [2012] 「K-POP にはまる女子たち～ファン集団が見えるアジア」, 馬場伸彦・池田太臣編著『女子の時代!』青弓社, pp.199-227

- [41] 四方田犬彦 [2006] 『「かわいい」論』, 筑摩書房  
 [42] 「BUBUKA」2014年11月号  
 [43] 「月刊ENTAME」2016年2月号, 2015年10月号,  
 2014年10月号, 徳間書店  
 [44] 「週刊東洋経済」2015.12.26-2016.1.2  
 [45] 「日経エンタテインメント」2016年2月号, 2016年  
 1月号, 2015年12月号, 2015年11月号, 2015年9  
 月号, 2015年8月号, 2015年5月号, 2015年4月号,  
 2015年3月号, 2015年2月号, 2014年12月号.  
 [46] 「日経ビジネス」2014.12.01  
 [47] 「日本経済新聞」2015.7.29

## 《注》

- (1) 「アイドル」という言葉は、東京五輪があった1964年に公開されたフランス映画「アイドルを探せ」で日本に紹介されたと言われる。シルヴィ・バルタンが映画の主題歌を歌った。  
 (2) 太田 [2011] 32p.  
 (3) 境 [2014] 18p.  
 (4) 北川 [2013] 16p.  
 (5) TBSで放送された「柔道一直線」のヒロインを演じた吉沢京子は、アイドル的な人気を博した。初期のアイドルは歌謡曲アイドルという見方がされたため、除外されがちであるが、テレビを中心に活躍した魅力的なタレントという意味で、吉沢京子も十分にアイドルであった。  
 (6) 岡崎友紀は1970年にTBS系で放送された「おくさまは18歳」で高木飛鳥役を演じ、キュートな魅力で身慮した。ドラマは最高視聴率33.1%を記録するなど大ヒットした。プロマイドの売り上げは約4年に亘って1位を記録した。  
 (7) 小柳ルミ子は、宝塚音楽学校を首席で卒業後、1970年に渡辺プロダクションからNHK連続テレビ小説「虹」で女優デビューした。歌手デビュー曲「わたしの城下町」(1971年)が130万枚超の売り上げに。「瀬戸の花嫁」(1972年)もヒットした。  
 (8) 南沙織は、沖縄の地元放送局のアシスタントとして働いていたところ、CBSソニーの目に留まり1971年6月にレコードデビューした。デビュー曲「17才」が50万枚を超える大ヒットになった。小柳ルミ子と違い、ドラマなど女優としてはほとんど活動せず、1978年に引退した。翌1979年に写真家の篠山紀信と結婚する。  
 (9) 天地真理は、1971年10月に「水色の恋」で歌手デビュー後、ヒットを連発。5曲がオリコン1位を獲得した記録は松田聖子の登場まで破られなかった。  
 (10) 麻丘めぐみは、1972年のデビュー曲「芽ばえ」と1973年「わたしの彼は左きき」が立て続けに大ヒットした。彼女の髪型は「姫カット」として流行した。  
 (11) 山口百恵は、1972年「スター誕生！」準優勝する。1973年に映画「としごろ」でデビューする。1974年の「ひと夏の経験」が75万超のヒットを記録し人気が発散する。同年の映画「伊豆の踊子」で女優になった。  
 (12) キャンディーズは、スクールメイツを経て1972年デビュー。ヒット曲に恵まれずバラエティ路線を進むが、1975年「年下の男の子」が初めてのヒットとなる。1977年の日比谷野音コンサートで突然の解散宣言する。1978年の後楽園球場コンサートで引退した。  
 (13) ピンク・レディーは、1976年に「ペッパー警部」でデビュー。刺激的な振り付けが子供たちの人気を博す。次のシングル「S・O・S」で初のオリコン1位。「カメリン'77」「渚のシンドバッド」「ウォンテッド」「UFO」など次々とヒットした。1981年解散した。  
 (14) 山口百恵が芸能界を引退できたのは、ホリプロ所属であったことが関係している。大きなプロデューサーであるホリプロのスタッフは、山口百恵が引退しても、路頭に迷うことはなかった。一方、後年の宮沢りえの貴乃花との婚約破棄は、ほぼ個人事務所(エムツー企画)であったスタッフは、宮沢が結婚後に芸能界を引退すると路頭に迷う恐れがあったことが大きく影響している。  
 (15) 太田 [2011] 108p.  
 (16) 岡島・岡田 [2011] pp.66-67  
 (17) 村山 [2011] 121p.  
 (18) 斎藤環 [2015] 104p.  
 (19) 北川 [2013] 35p.  
 (20) 北川 [2013] 35p.  
 (21) 松田聖子は、1980年「裸足の季節」で歌手デビュー。サードシングル「風は秋色」から1988年「旅立ちはフリージア」まで24作でオリコン1位を獲得した。「聖子ちゃんカット」や「ぶりっこ」など多くの流行を生んだ。  
 (22) 松田聖子には、一貫した松本隆の世界を詩の世界が作り上げられた。そこに大滝詠一、松任谷由実らが曲を付けた。  
 (23) 松本伊代は、1981年「たのきん全力投球」で田原俊彦の妹役オーディションで合格。デビュー曲「センチメンタル・ジャーニー」がベストテン入りした。セーラー服姿での歌が話題となった。  
 (24) 小泉今日子は、1981年「スター誕生！」で合格。1982年「私の16歳」で歌手デビューした。キャッチフレーズは「微笑少女」。1985年の「なんてたってアイドル」で自らアイドルと称して大ヒットした。自身を「コイズミ」「厚木のヤンキー」と呼ぶサバけた性格や女性誌の表紙を飾るオシャレさ、読書家という知的な一面もあり、ファンが広がった。  
 (25) 早見優は、1982年「急いで！初恋」で歌手デビュー。代表曲は「夏色のナンシー」。元祖バイリンガルアイドルとして活躍した。  
 (26) 石川秀美は、1981年、芸能事務所主催のオーディションで合格し、1982年「妖精時代」で歌手デビューした。  
 (27) 中森明菜は、1981年「スター誕生！」で合格し、1982年「スローモーション」でデビューした。2枚目の「少女A」以降、ヒット曲を連発。1985年「ミ・アモーレ」、1986年「DESIRE～情熱～」でレコード大賞を2年連続受賞した。  
 (28) 1985年7月に発売されたおニャン子クラブの「セーラー服を脱がさないで」はタイトル、歌詞ともに衝撃的であり、以降2年間、チャートのトップを独占し続ける「おニャン子旋風」となった。対抗上、おニャン子を仕掛けた秋元康に作詞を依頼、「私はアイドル」「アイドルはやめられない」と宣言する、アイドルがアイドルを強烈に戯画化した歌詞の内容は従来のアイドルの常識では有り得ないものであった。

- (29) 1985年頃から、レベッカやBOOWYが登場、バンドブームが到来した。1989年に発売されたバンド調の「学園天国」は大ヒットした。
- (30) 小泉今日子は、1984年に事務所の方針に腹を立て、無断で髪を刈り上げにした。しかし、そのスタイルがオシャレであると評判になり、自立した女性として受け入れられ、男性だけでなく、女性ファンも広げた。
- (31) アイドルに歌謡曲を売る以外にグラビアという役割が加えられたのは、1975年に初代クラリオン・ガールに選ばれたアグネス・ラムの登場によってである。ハワイ出身の小柄な中国系アメリカ人であったアグネスを東洋系の日本人と勘違いした人も多かったと言われるが、後年の日本人アイドルのグラビアの可能性を示した。
- (32) 薬師丸ひろ子は、1978年角川映画「野生の証明」の長井頼子オーディションでヒロインに選ばれデビューした。第2作目「翔んだカップル」(1980年)の後、1981年の映画「セーラー服と機関銃」に主演した。興行収入24億円のヒットとなり同年の邦画で最大のヒットになった。同名主題歌もオリコンで5週連続の1位を獲得、86.5万枚を記録した。当時高校2年生の薬師丸ひろ子は、3本目の主演作となった本映画で人気女優となった。
- (33) 原田知世は、1982年に「セーラー服と機関銃」のドラマ版に主演しデビューした。1983年の映画「時をかける少女」で映画初主演し、同名主題歌も60万枚を超える大ヒットとなった。
- (34) KADOKAWA会長の角川歴彦は「薬師丸ひろ子は国民的アイドルではありませんでした。特定のファンが熱狂するマイクロスター。だからこそ芸能史に名を刻みました」と言及する(「日経ビジネス2014.12.01」69p.)
- (35) 中山美穂は、原宿でスカウトされ、1985年のドラマ「毎度おさわがせします」で女優デビュー。1985年「C」で歌手デビューも果たした。1987年の主演ドラマ「ママはアイドル」での愛称「ミボリン」が定着した。
- (36) 斉藤由貴は、1984年「ミスマガジン」グランプリで芸能界入り。1985年「卒業」で歌手デビューし、30万枚のヒット。1985年放送の「スケバン刑事」で麻宮サキ役を好演。1986年、NHK麻ドラ「はね駒」でヒロインを演じた。歌手としても「卒業」「悲しみよこんにちは」などヒット曲を出した。
- (37) 南野陽子は、1984年女優デビューし、1985年、ドラマ「スケバン刑事II」に主演した。1985年「はずかしすぎて」で歌手デビューし、「はいからさんが通る」「吐息でネット」などヒット曲が多数ある。1992年に「寒椿」で日本アカデミー賞主演女優賞。
- (38) 浅香唯は、1984年、少女コミック誌主催のオーディションで優勝。1985年のドラマ「夏少女」で歌手デビューした。1986年「スケバン刑事III」3代目麻宮サキ役で主役。1988年の映画「スケバン刑事」にも出演した。
- (39) おニャン子クラブは、1985年4月スタートのフジテレビ「夕やけにゃんにゃん」の番組内アシスタントとしてデビューし、1985年7月の「セーラー服を脱がさないで」で大ブレイクした。「友達より早くエッチしたい」なんて青い性を歌う、そのインパクトは強烈だった。結成時は11人、解散時は19人が在籍した。
- 1987年8月の番組終了と共に解散した。特に活躍したのは1986年にオリコン・チャートを独占した時である。1986年は、シングルで1位を獲得した曲が年間を通して46曲あったが、そのうちの30曲を同グループの本体や派生ユニット、ソロが占めた。
- (40) メンバーは会員番号で呼ばれ、番組内のオーディションでメンバーが増える。その最中、写真週刊誌に喫煙現場がスクープされ、初期メンバー5人がクビになった。しかし、スキヤンダルをものともせず、人気は沸騰した。その後、メンバーからは工藤静香や渡辺満里奈、国生さゆりらが巣立っていく。
- (41) 後藤久美子はオスカープロモーションからデビューした。11歳であった後藤は、1985年、「キットカット」(不二家)、「元気であいさつ」(ポッカ)、「スコッチEG」(住友スリーエム)の3本に出演した。
- (42) 宮沢りえが有名になったのは、1987年の「三井のリハウス」のCMでの白鳥麗子役である。都会の謎めいた女の子が転校してきたというCMは、非常に印象的であった。その後、「ボカリスエット」(大塚製薬)のCMや映画「はぐらの七日間戦争」では、元気で活発な女の子を演じた。後藤久美子が静かな大人っぽさを売りにしたのとは対照的であった。宮沢は1989年に歌手デビュー、カレンダーでふんどしルックを披露し話題となった。1992年には「Santa Fe」でヘアヌードを披露した。人気絶頂期に裸になったが、イメージチェンジはマイナスとはならなかった。
- (43) 1980年代終盤から1990年初頭には、ドラマやCM、バラエティで活躍する美少女系女優がアイドルを凌駕。牧瀬里穂、観月ありさ、宮沢りえの3人は、アルファベットの頭文字を取って「3M」と呼ばれた。
- (44) 岡田有希子は、1983年「スター誕生！」でグランプリ。1984年「ファースト・デイト」で歌手デビューした。1985年「禁じられたマリコ」で連ドラ初主演した。「ポスト松田聖子」と期待されたが、1986年に投身自殺した(享年18)。
- (45) Winkは、1988年に結成され、「Sugar Baby Love」でデビュー。1989年の「愛が止まらない」「淋しい熱帯魚」がヒットし、レコード大賞受賞と紅白歌合戦出場を果たした。アイドルらしくらぬ無表情のパフォーマンスが話題になった。アイドルの代名詞と言える「笑顔」を浮かべない戦略は、アイドルとしては邪道であったが、結果的にアイドルらしくないことで受け入れられた。当時、渡辺美里やプリンセス・プリンセスが活躍したが、彼女たちはアイドルではなかった。
- (46) この時代、アイドルは歌手から分離し、様々な要素と組み合わせ可能な一つの属性に転化した。「パドル(バラエティ+アイドル)」、「グラドル(グラビア+アイドル)」などである。かつての「アイドル」=「アイドル歌手」という意味づけは希薄になっていた。
- (47) 1994年にフジテレビ「ビジュアルクイーン」に選ばれた16歳の雛形あきこは、少年マンガやヤングマンガ誌のグラビアを飾った。中高生が雛形の水着に振り向いた理由は同年代であることが大きかった。1987年から始まった「アイドル冬の時代」は、「グラドル」の登場と共に、1994年に春を迎えた。なお、韓国では、グラビア・アイドルというあり方は、インターネット上でしか成立しない。
- (48) 広末涼子は、1994年に「クレアラシル」のオーディ



- ションでグランプリに輝き、1996年のNTTドコモのポケベルCMでブレイクした。
- (49) 上戸彩は1997年、12歳の時に「全日本国民的美少女コンテスト」審査員特別賞を受賞した。2000年連続ドラマ「涙をふいて」で女優デビューした。2000年に出演した「3年B組金八先生」の性同一性障害役を演じて、同年代のアイドル女優から抜け出した。2003年の「ひと夏のパパへ」で初主演、2004年に「エースをねらえ！」、2005年「アタックNo.1」で主演するなど、女優としてブレイクした。2002年まではアイドルグループ「Z-1」というアイドルグループで活動していた。
- (50) 1982年生まれ、深田恭子は、1996年に行われた第21回「ホリプロタレントスカウトキャラバン」でグランプリに輝いた。1998年のドラマ「神様、もう少しだけ」でブレイクした。
- (51) 篠原涼子は、アイドルグループ「東京パフォーマンスドール」に所属していた1994年に小室哲哉プロデュースでアーティスト色を前面に出し、「恋しさとせつなさと心強さと」で200万枚以上を売り上げる大ヒットとなった。
- (52) エイベックス+小室哲哉によるダンス・ミュージックのプロデューサー・ワークは、1993年デビューのTRFからスタートしている。小室哲哉の功績は、ダンス・ミュージックにアジア的な季節感を持ち込んだことにある。彼により、日本のダンス・ミュージックは、クラブ=夜のイメージから離れることができ、一般層にも身近になった。
- (53) 1983年に開校した沖縄アクターズスクールは、日本のダンス・ミュージックにおいて大きな役割を果たした。安室奈美恵（スーパーモンキーズの一員として1992年デビュー、1995年ソロ転向）、SPEED（1996年デビュー）などを輩出した。
- (54) 安室奈美恵は、事務所がアーティストであることを強調するために、あえて「アイドル」と呼ばせないように配慮していたが、茶髪にロングヘアー、細眉、ミニスカートに厚底ブーツという「アムラー」ファッションを真似するファンにより支持されたことは、明らかに時代の「アイドル」であった。同様に、ネイルアートや大きなサングラス、豹柄ファッションを真似された浜崎あゆみも「アイドル」であった。
- (55) モーニング娘。は、1995年から放送されたテレビ朝日のオーディション番組「ASAYAN」から生まれた。1997年に行われた「シャ乱Qロックボーカリストオーディション」（グランプリは平家みちよ）の最終選考に残りながら落選した中澤裕子、石黒彩、飯田圭織、安倍なつみ、福田明日香の5人によって結成されたのが、モーニング娘。だった。オーディションに落ちた人間を集めて新たな物語を構築していく方法が、非常にテレビ的であった。
- (56) 大人数のアイドルグループが隆盛を極める中、ソロで活躍するアイドルは2000年代に活躍した松浦亜弥、藤本美貴以降、下火になった。ファンの好みが多様化する中、一人の個性だけで多くのファンを獲得するのは困難である。
- (57) AKB48グループやももいろクローバーZを初めアイドルグループがひしめく「戦国時代」と呼ばれる。今ではグループの数が1,000（東京に500組、地方に500組）を超えと言われる。しかし、2015年3月には2004年にデビューしたBerryz工房が無期限活動休止、2015年10月にはアイドルリング!!!が解散した。CD売り上げが落ちた訳でも、観客動員数が下がった訳でもない。やる事がなくなって、活動が行き詰った訳でもない。
- (58) 2005年12月8日から2006年3月31日まで「チームA」による「PARTYが始まるよ」公演が行われた。
- (59) 最初のオーディションに合格したのは24人であったが、公演までに4人が脱落し20人のメンバーでスタートした（2006年1月に篠田麻里子に加わり21名になる）。当初は、48人のメンバーが24人ずつ1軍、2軍になり、ファンの人気投票で入れ替え制になるというイメージであった。1軍24人、2軍24人の構成は、劇場の広さが影響した。AKB48劇場は最初から満員だった訳ではない。初めて劇場が満員になったのは、2006年2月4日であり、オープンから2ヶ月後のことであった。
- (60) 2006年2月1日、AKB48はインディーズ1stシングル「桜の花びらたち」でデビューする。この楽曲はNTTドコモ「テレビ電話」CMに使用された。センターポジションは高橋みなみが務めた。続けて、2006年6月7日にインディーズ2ndシングル「スカート、ひらり」が発売され、歌番組「ミュージックステーション」に初出演を果たした。
- (61) 2006年10月25日、「会いたかった」でメジャーデビューする。選ばれたメンバーが歌うという「選抜メンバー制」が初導入され、前田敦子が初センターを務めた。
- (62) 2006年7月23日、シングル購入特典イベント「AKB48メンバーと行く浅草・花やしきツアー」が開催された。
- (63) 初めての冠番組「AKB1じ59ふん！」（日本テレビ系、毎週水曜）（2008年10月～、現在の「AKBINGO.」）まで、デビューから2年以上要したのは、あえてテレビとの距離を置いた戦略の一つであった。
- (64) 境「2014」145p.
- (65) 境「2014」112p.
- (66) 西原「2014」
- (67) 東山紀之は、「少年隊」のメンバーで、「ヒガシ」の愛称で親しまれている。
- (68) 山下智久は、「NEWS」の元メンバーで、脱退後はソロとして活動。愛称は山P。
- (69) 相葉雅紀172cm、松本潤170cm、櫻井翔169cm、二宮和也165cm、大野智163cmと公表されている。
- (70) 1996年5月、メンバーだった森且行はSMAPを脱退してオートレーサーになった。
- (71) 稲垣吾郎は2001年の道路交通法違反などで逮捕された。香取慎吾には2009年に泥酔騒動があった。
- (72) 2014年7月27日に放送されたフジテレビ「SMAP×FNS 27時間テレビ」では、司会のダウンタウン松本人志が「解散危機は何回くらいあったの？」と質問した。香取慎吾は苦悶しながら「3か4くらいですかね」と口を開いたが、他のメンバーは沈黙した。たまたま香取慎吾が「言っちゃいけない感じが分からないけど、あったじゃん」と促す。中居正広が「開けたらいけないチャックってある」と公開説教を始めると、香取慎吾は「26、7年やってきて1回も解散危機ないって訳ないじゃん」と反論した。そしてクライマックスのノ

- ンストップ野外ライブを終えてフジテレビに向かう途中、加藤綾子アナウンサーが森且行からの手紙が読み上げるとメンバーは感涙した。グランドフィナーレでは口々に「あれはダメ！あれはもう…」と感極まる反則だと訴えた。そこで中居正広は改めて森且行の脱退時を振り返り「香取君と一緒にね、森君の最初のレースを二人で観に行っただですよ。覚えてる？負けちゃったけど…」と優しい口調になった。その途端、再び香取慎吾は「森君が辞めるって言った時、中居君が僕に『解散しようか？』と言ったのが解散危機1回目です」と暴露してみせ、慌てた中居正広は「やめなさい」と苦笑いした。最後は解散話を楽しむ節となり、グループの結束を証明してみせた。
- (73) 2013年フジテレビ「SMAPxSMAP」。
- (74) 2015年3月30日放送フジテレビ「SMAPxSMAP」スペシャル。
- (75) 韓国では、グラビア・アイドルというあり方は、インターネット上でしか成立しない。
- (76) 君塚 [2012] 107p.
- (77) 君塚 [2012] 151p.
- (78) 2012年韓国デビューのVIXXは、EXO、B.A.Pなどの同期グループに当初は人気で劣ったが、2013年「傷つく準備はできている」で試みたダークなコンセプトのイメージを受け、認知度がアップした。
- (79) 防弾少年団は、2013年6月に韓国でデビューした。2014年1月に大阪、東京で実施した有料ライブ3公演に計6,500人を動員した。2014年6月、日本でのデビューに合わせ、東京、大阪でリリースイベント＆ハイタッチ会を開催した。ヒップホップにありがちな悪ガキのイメージを覆し、アイドル的ルックス、実力を武器にする正統派である。
- (80) EXOは、東方神起、少女時代らが所属する「S.M.ENTERTAINMENT」が2012年4月に韓国でデビューさせた12人組の男性グループである。韓国人6人と中国出身者6人で構成されていたが、中国人メンバー2人が脱退し10人になった。2014年は17都市30公演のアジアツアーを開催した。4月にさいたまスーパーアリーナで催された初の単独公演には、5公演に10万人のファンが詰めかけ、チケットは売り切れた。今や最もチケットが入手困難な韓国歌手と言われる。
- (81) WINNERは、BIGBANGの「YG ENTERTAINMENT」の新人5人組。2013年に韓国のサバイバル番組で勝ち抜き、歌手デビューの権利を得た。同番組はYouTubeでも配信され、日本でも人気になった。
- (82) GOT7は、2PM所属の「JYP Entertainment」から2014年1月にデビューした7人組。2014年4月にMネットが横浜アリーナで実施したイベントに出演した。女子学生ら若年層の声援を独り占めにした。
- (83) 東方神起は2015年、活動休止した。メンバーのユンホが29歳（数え年30歳）でのタイミングは、数え年30歳の誕生日を迎えるまでに軍隊に入隊する義務への対応であった。
- (84) デビュー当時、野獣アイドルで一世を風靡した2PMも今や30歳目前である。ニックンの飲酒運転で活動を自粛している間に、韓国では大型新人が続々登場し、賞レースからも遠ざかっている。しかし、日本では安定的な人気を誇り、2014年はソロツアーも活発であった。
- (85) 1985年4月にデビューした「おニャン子クラブ」は、1987年9月に代々木第一体育館で解散コンサートを行い、2年半で活動を終了した。
- (86) 2013年のNHK連続ドラマ「あまちゃん」では、主人公の実母・天野春子役を小泉今日子、芸能界の母・鈴鹿ひろ美役を薬師丸ひろ子が演じたが、二人ともトップアイドルであった。天野春子の「元ヤンキー、離婚、元アイドル」というキャラクターは、小泉今日子と重なっている。
- (87) 「アイドルの寿命は7年」と言われていたアイドルの常識を変えたのが松田聖子である。結婚や出産してからもずっと第一線で活躍することにより、「ずっとアイドルをやっているんだ」という雰囲気が生まれた。
- (88) 2014年末の「第65回NHK紅白歌合戦」には、松田聖子、中森明菜、薬師丸ひろ子の1980年代のトップアイドル3人が一堂に会した。中森明菜は2014年夏にリリースしたオリジナルとカバーの2枚のベストアルバムが25万枚を突破する大ヒットを記録、大物アーティストが新譜を出しても3〜4万枚しか売れない時代に、根強い人気を示した。
- (89) 2008年2月に発売したシングル「桜の花びらたち2008」でデフスターズレコードとの契約が終了した。そして、2008年10月に約8か月ぶりのシングル「大声ダイヤモンド」がリリースされた。
- (90) モーニング娘。の成功は、1999年8月に第3期メンバーとして当時13歳であった後藤真希が加入したことが大きい。13歳の金髪美少女は、圧倒的な存在感を持っており、インパクトは大きかった。
- (91) 「大声ダイヤモンド」は、10万枚のヒットを記録した。「桜の花びらたち2008」2.5万枚から4倍に伸びた。それまでの6位を更新する3位を記録した。
- (92) 太田 [2011] 15p.
- (93) かわいさを売りにするアイドルの場合、25歳が一区切りとなる。トーク力やセクシーさなど、別の魅力を備えていないと、生き残ることは難しい。
- (94) AKB48の板野友美は22歳、前田敦子は21歳、高橋みなみは24歳、篠田麻里子は27歳で、SKEの松井怜奈（1991年7月27日生まれ）は24歳になった2015年8月末に卒業した。
- (95) 2005年10月30日に最終審査が行われたAKB48オーブニングメンバーオーディションに合格した24名のうち、2015年末時点でAKB48に在籍し続けるのは、小嶋陽菜（合格時17歳）、峯岸みなみ（合格時12歳）の2人のみである。
- (96) 人材育成システムの構築は、吉本が中心のお笑い芸人にも見ることができ。
- (97) 週刊東洋経済 2013.12.28-2014.1.4号, 171p.
- (98) AKB48の握手会では40代、50代の中年男性が目立つようになっている。新しくファンになる層が年々目減りする影響により、ファンの平均年齢は上がっている。現在、AKB48劇場では、50歳以上のみ入場可能な「シニア公演」も定期的に行われている。
- (99) AKB48総監督の高橋みなみは、「前田敦子はものすごく輝いていたし、ものすごく面白かった。『普通じゃないアイドル』を作ってくれたのが前田敦子だった。AKB48に憧れる理由を前田敦子が作ってくれたんだと思います」と語っている。

- (100) 2004年1月「ハロプロ・キッズ」に所属していたメンバー8人で結成、同年3月にCDデビューした。2005年に石村舞波が卒業、2007年末に紅白歌合戦に出演した。シングル36枚、アルバム13枚を発表、出演コンサートは計666公演(うち海外公演8公演)。
- (101)℃-uteは、2015年に結成10周年を迎え、横浜アリーナへも進出した。モーニング娘。の道重さゆりの卒業に伴い、℃-uteキャプテンの矢島舞美(1992年2月7日生まれ、埼玉県出身)がハロプロの5代目リーダーに就任した。Berryz工場の活動停止により名実ともに最年長としてハロプロ全体を引っ張るグループとなった。
- (102)℃-uteキャプテンの矢島舞美は「℃-uteもデビュー8年。私たちが不安はありますが、今は目の前のことをやっていくだけです」と言った。
- (103)モーニング娘。は、2015年に結成18年目を迎えた、女子アイドルとしては異例の老舗グループとなっている。2014年11月に道重さゆみが卒業して、2014年9月に新加入した12期メンバー4人が2015年正月のハロコンから本格的に活動開始した。
- (104)岡島・岡田[2011] pp.61-62
- (105)岡島・岡田[2011] 61p.
- (106)生身のアイドルがキャラクターと異なる特徴として、スキャンダルの危険性がある。女性アイドルのスキャンダルは、芸能人生命を奪うダメージになりうる。
- (107)濱野[2012] 150p.
- (108)AKB48の握手会は、CD1枚で握手券1枚を入手でき、人気メンバーは1日でのべ3,000人と握手する。メンバーにとっては握手会で人気を上げることが、自分のグループ内のポジションを上げることになる。不人気メンバーにとっては、自分のレーンがガラガラであれば、精神的に疲弊するため、ファンにとってはそんなメンバーを支えなければと更にCD代を注ぎ込む流れになっている。
- (109)北川[2013] pp.5-6
- (110)握手会の回数は、2014年岩手での握手会中に起きた襲撃事件以前よりも増えているが、不人気メンバーにとってはガラガラになった自らのレーンを見て精神的に疲弊するばかりである。ファンにとってはそのようなメンバーを支えようと更にCD代を注ぎ込む流れになっている。
- (111)HKT48メンバーの矢吹奈子は「フライングゲット」の際の握手会で指原莉乃のレーンに並んだ際、指原から「可愛いね」と言われ頬を触られながら「AKB48のオーディション受けなよ、入れるよ」と言われたことにより応募してメンバーに加わった。
- (112)2015年1月25日、新潟を拠点に国内4つ目となるAKB48の姉妹グループ「NGT48」の結成と、2015年10月1日に専用劇場で初公演を行うことが発表された。新潟市の人口は80万4,315人にしか過ぎず、「地元ファンと熱心な首都圏からのリピーターだけで採算が採れるのか」という心配の声も挙がる。人口100万人以下の年に専用劇場を設けるという試みは、「ご当地アイドル」の将来を占う試金石となる。
- (113)コンサートにサプライズ演出を入れ、メンバーの成長物語を見せるという売り出し方は、プロレスを参考にしたとされる。日常にはないドラマがある。
- (114)ももいろクローバーZは、2015年も福岡ヤフオクドームで行った2日間が盛況に終わるなど、ライブは安定した動員力を誇る。一方で、映画主題歌やKISSとのコラボ曲などのCD売り上げは芳しくない。
- (115)境「2014」16p.
- (116)身長の高いアイドルは「かわいらしいアイドル」として推しても、ファンには好かれにくい。小さい方がファンの人気を得やすく「アイドルの黄金比率」が存在する。
- (117)杏、松下奈緒(174cm)、とよた真帆(173cm)、田丸麻紀、松嶋奈々子(172cm)、天海祐希、藤原紀香(171cm)、榮倉奈々、江角マキコ(170cm)、木村佳乃、山田優(169cm)、新垣結衣、長澤まさみ(168cm)など高身長女優は多い。女優の高身長化の原因となっているのが、モデル出身の女優が増えたことである。杏はパロコレクションに出演歴がある。
- (118)乃木坂46は、AKB48第3回選抜総選挙が行われ大島優子に対し前田敦子がリベンジを果たした2011年6月、国民的アイドルとなっていたAKB48の公式ライブをソニー・ミュージックが募集するという形でオーディションが開催され誕生した。募集のポスターは、雑誌、テレビ、駅、インターネットと至る所に貼られた。2011年8月22日に、日本アイドル史上最大規模となるオーディション応募総数38,934人の中から選ばれた36人によりAKB48の公式ライブとして誕生した。グループ名の「乃木坂」は、最終オーディションの会場となった「SKE乃木坂ビル」から、「46」はAKBよりも人数が少なくても負けないという意気込みが由来である。私立の女子高のような清楚さがウリで、ビジュアル面においてはAKB48よりも上という声も多い。シングルCDの売り上げも50万枚超えを続けており、「AKB48公式ライブグループ」の名は偽りのないものとなっている。「乃木坂46新プロジェクト」メンバーの募集が行われることも明らかになっており、妹グループ的な存在になる予定である。一方で、人気メンバーと下位メンバーの間にAKB48以上に厚い壁が存在することも知られる。
- (119)西野七瀬は、1994年5月25日生まれ。大阪府出身。もはや押しも押されぬ大エースに成長した。天性の守ってあげたい感じと「この娘なら振り回されたい」感じを有すると言われる。
- (120)圧倒的美貌と知名度を兼ね備えた白石麻衣は女性ファッション誌「Ray」の専属モデルとなり、女性ファンが憧れる存在になっている。
- (121)生駒里奈は、1995年12月29日生まれ。生駒里奈は秋田県出身で東京に馴染めず、猫背で自信がなく、いつも泣いてばかりいた。しかし、デビュー前から活動が続いていくうちに、どんどん綺麗になり、身長も伸びて行った。「アイドルは成長を見守りたい存在」という王道から、メジャーデビュー曲「ぐるぐるカーテン」ではセンターに抜擢された。
- (122)生田絵梨花は、1997年1月22日生まれ。幼少期をドイツで過ごし、歌唱力抜群。ピアノも弾けて、英語も喋れる天才美少女として、デビュー当初から中心メンバーとして活躍。幼少時代からピアノエリートとして育った生田絵梨花は、メジャーデビュー曲「ぐるぐるカーテン」で生駒里奈と共にフロントを務めた。
- (123)秋元康・総合プロデューサーは「乃木坂46はAKB48の5年間を5カ月で追いつく」というスロー

- ガンの下、AKB48の「神7」にあたる「七福神」を発表して、「メンバー同士で戦うこと」を求めた。
- (124) メジャーデビュー曲「ぐるぐるカーテン」では、西野七瀬は16人の選抜メンバーから漏れアンダーメンバーだった。デビュー曲のタイアップである明治「手づくりチョコレート」のCM撮影では、「選抜のみんなが撮影している間、ずっと待っていて。他のメンバーと『私たち、必要なかな?』って話していました。『選抜と私たちじゃ、こんなに違うんだ』と雑誌インタビューで語っている。
- (125) テレビ東京の冠番組「乃木坂って、どこ?」で、メジャーデビューシングル「ぐるぐるカーテン」のPRとして、京都でティッシュ配りを行った際に、なかなか通行人にティッシュをもらってもらえないことから、鴨川の橋のたもとで、西野七瀬は泣いた。西野七瀬は当時のことを「他のメンバーはティッシュを受け取ってもらえなくても前向きに配ってるんですよ。でも私は無理で。悲しくなってきた、ずっと川の方を見て泣いてました。たくさんのカモをいるのを見ながら『私、ダメだ。何してるんだろう・・・』って。でも3人が凄く励ましてくれたり、現場に来てくれていたファンの方が『俺が配ろうか?』って声を掛けてくれたりして。そこから何とか立ち直って、ティッシュを配ることができました。当時は本当に弱かったから、いっぱい迷惑をかけましたね」と語っている。
- (126) メジャーデビューを果たし握手会が始まって、西野七瀬の口数はなかなか増えない。慣れてきても相変わらず無口で控えめのままであった。しかし、ブログに載せるオリジナル度の高い絵や文章は、口下手な彼女にとってファンを楽しませる大きな武器となっていた。
- (127) 握手会人気やグッズ売り上げは、グループでダントツのNo.1である。2015年版乃木坂46オフィシャルカレンダーでは、2位の白石麻衣に比べて約1.5倍の販売部数があった。
- (128) 初期の頃の握手会での対応は、ファンが「俺も応援するから頑張れ」と言ったら、西野は「ななだって頑張ってるねん!」と声を張り上げることもあったが、成長するにつれ、西野の握手は「神対応」と呼ばれるようになっていた。しかし、それは決して生まれながらにして人とコミュニケーションが上手かったからではない。ブログのコメントを全てチェックし誰が何を書いたかを記憶したり、握手会は絶対に休まなかったりという目に見えない努力が西野の評判に繋がっている。BUBUKA (2014年11月号) pp.18-19
- (129) ファンの間では、西野は踊りを頑張ることで知られる。西野は「歌も上手くないし、面白いことも言えない。だからみんなに自分を伝えるなら大きく踊るしかないと思って、そこだけは頑張る」と言う。BUBUKA (2014年11月号) pp.18-19
- (130) 秋元康総合プロデューサーは「本当に美しいお姉さんになってきた白石、ファンに圧倒的な人気の西野」「西野七瀬の油断している時の表情が素敵だ。素顔の西野七瀬が素敵ってことだ」「どちらかと言うと一般人に近い雰囲気なのに、いつの間にか癒されたり温かい気分になってしまう」とコメントしている。「日経エンタテインメント2015年2月号」59p.
- (131) 生田絵梨花「あなたのために弾きたい」、西野七瀬「ひとりよがり」などソロ曲を持つメンバーが「歌で計算できる」と言われるが、数人に限られ、AKB48に比べ歌唱力が課題とされている。
- (132) 会話も成立しないほど控えめな性格で「アイドルに向いていない」と思われていた西野七瀬が選抜の端から努力して少しずつ上がって来て、ついにセンターまで上り詰めた経緯は、AKB48の前田敦子や大島優子と異なる。泣き虫で引っ込み思案な性格の女の子が少しずつ成長し、やがて夢を掴むというシンデレラストーリーに、ファンは共感した。ファンは「乃木坂46で初期の頃と一番変わったメンバーは誰かと聞かれたら、乃木坂46ファンのほとんどが西野って答えると思いますよ。本当にそれくらい変わったし、変わった分だけセンターに近づいていったんです」「西野七瀬の成長の過程を見てこられたことが、自分は何よりも嬉しいんです。だからこれからも応援したいと思えるんです」と証言する。BUBUKA (2014年11月号) pp.18-19
- (133) デビュー以来、CDの売り上げは右肩上がりである。2015年は「NHK紅白歌合戦初出場」という目標を明確に掲げてスタートした。結果、大晦日の「紅白歌合戦」には初出場して、メンバー37人全員で「君の名は希望」を披露した。
- (134) アイドリング!!!は、タレントや女優として活動する菊池亜美、森田涼花、谷沢恵里香らを輩出したが、活動期間9年で終了した。2015年10月5日に日本武道館でラストライブが行われた。
- (135) アイドリング!!!は失敗したが、アイドル・ブームが長期に亘り継続する中、若者の「テレビ離れ」に苦しむテレビ局は、アイドルを番組コンテンツとしてだけでなく、動画配信事業、グッズ販売、イベント事業などの多角化でビジネスの拡がりや成長の可能性を期待できるとして、積極的に展開しようとしている。フジテレビは2010年から毎年夏に「TOKYO IDOL FESTIVAL」(TIF)を開催し、アイドルのビジネス多角化を図って来たが、2015年3月から同イベントのスケールを拡大し、「TOKYO IDOL PROJECT」をスタートさせ、夏に行われるTIFを軸にして、ライブとウェブでの展開を強化している。吉本興業はCS放送の「スカパー!プレミアムサービス」に24時間アイドル専門チャンネル「Kawaii TV」を2014年12月に開局した。
- (136) 東京、大阪、名古屋、福岡に次ぐ国内5番目の48グループとしてNGT48が2015年10月に発足した。しかし、これまでの4都市が人口100万人を超えるのと比較すると、新潟市の人口は約80万人であり、都市サイズが小規模である。唯一、地下鉄など私鉄が走っておらず、自動車移動が多いため、劇場環境は大きく変わる。また、メディアの数が少なく、メンバーが増えても、それだけの仕事はない。準キー局のテレビ局が多いNMB48には研究生レベルでも仕事があるのに対して、メディアが少ない名古屋のSKE48は人気メンバーでも仕事が少ない。新潟ではなおさらの状況が懸念される。
- (137) 北川 [2013] 182p.
- (138) 橋本環奈は、1999年2月3日生まれ。福岡県出身。小学3年生から芸能活動を開始。ほっともっと、マクドナルドのCMに出演、2009年より、Rev.from DV

- に所属する。2013年11月2日～4日に上京するに合わせ、過去のライブ写真がネット上で広まりブレイクを遂げた。11月7日にはヤフーのトップページに「福岡のアイドルに騒然」の見出しが掲載され、1週間での人になった。2014年1月に発売された女性誌「an・an」の女性アイドル特集号では弱冠15歳で単独で表紙になった。2015年2月3日に16歳になった橋本環奈は、地元の福岡から全国を巡る毎日を送る。
- (139) 西日本短期大学メディア・プロモーション学科は、在学中からオーディションを受け、芸能事務所入りやデビューを目指すのが主な目的である。メイク、オーディション対策などの実務科目の他、学科内でアイドルユニットが結成されて地元の祭りやイベントに出演している。
- (140) 2015年7月29日付日本経済新聞
- (141) 「乃木坂46」メンバーの衛藤美彩は大分県のアイドルグループ「CHIMO」のリーダーとなりメインボーカルとして活動、「ミスマガジン2011」で約1万5000人の応募者の中からグランプリになりつつ、「乃木坂46」に入った。
- (142) 岡島・岡田[2011] 52p.
- (143) YouTubeの再生回数は1億回を超えるというPVでは画期的な人気となっている。監督が蜷川実花でメンバーが下着姿になって女の子のエロスを見せた。なお、AKB48が下着姿でPVに出るのは、モーニング娘。が水着姿で登場して成功したことに影響されている。1998年にリリースされたモーニング娘。のファースト写真集は「モーニング娘。」では、白い砂浜でメンバー5人が水着姿を見せている。当時アーティスト寄りのグループであれば水着になることはなかった。
- (144) 歌番組の1時間に、日本の大衆音楽が凝縮された。その中から自分の好みの歌を選択した。
- (145) ピンク・レディーの曲は、キャッチーで踊りが分かりやすいため、子供たちが真似したが、「渚のシンドバッド」や「ウォンテッド」は大人でも聴くことができる歌であったため、全世代にヒットした。
- (146) 著名人や一般人のつぶやきをのぞき見することができるトークアプリ。またそれに対して、「やじうまコメント」を送ることで、会話を楽しむこともできる。発案者が「ホリエモン」こと堀江貴文と、サイバーエージェントの藤田晋社長であったことも話題となった。
- (147) ツイッターは決して有名人と会話するために作られたツールではないが、有名人にも気軽に話し掛けることが出来るし、場合によってはそれに反応してくれる人もいる。「有名人と話せる」という副作用をメインの目的として特化したサービスが「755」である。
- (148) 「たとえばAKB48とも話せる時代となった。」というコピーで、ライブ中にメンバーがケータイでファンとやりとりしている様子を描く。
- (149) テレビCMでは「いまや、乃木坂46だってハマってる。」のコピーで、メンバーとファンがトークを楽しむ様子を描く。
- (150) 島崎遙香は、AKB48第9期生。AKB48の40枚目シングル「僕たちは戦わない」で単独センターになった。
- (151) 「日経エンタテインメント2015年5月号」83p.
- (152) フェアリーズは、2011年9月にメジャーデビューした。日本テレビの番組「スッパリ」でグループ名が公募され、所属事務所の先輩の安室奈美恵やSPEEDらのDNAを受け継ぐ本格派のダンスと歌で注目を集め、2011年の日本レコード大賞最優秀新人賞を受賞した。
- (153) アイドルグループのセンターが全国的に認知されたのは、1970年代のキャンディーズが最初である。お姉さんの存在であった伊藤蘭をセンターにしたことにより、人気が過熱した。センターの存在がグループの人気を左右するということが確認された。1980年代には、おにゃん子クラブが新田恵利、中島美春、福永恵規、内海和子のフロント4人をセンターとして売り出す手法で成功した。その後、誕生した人気グループ「うしろ髪ひかれ隊」の工藤静香、「少女隊」の安原麗子などは、3人組ゆえにセンターが誰なのか見た目にも分かりやすかった。1990年代後半にはモーニング娘。が、安倍なつみ、後藤真希らを輩出し、メンバーの卒業や加入を繰り返して、センターを次々に抜擢するスタイルを確立した。2000年代には、AKB48が総選挙などファンを巻き込んでの一大イベントへと進化させた。一方、2005年にデビューしたPerfumeはセンターを決めずに曲の中でセンターが次々と変わっていくスタイルを取り入れた。
- (154) センターアイドルに求められる資質としては、ルックス、歌唱力、トーク力など色々挙げられるが、一番重要であるのは、多くのファンを惹きつけるキャラクターである。
- (155) アイドルの人選に関わる出版社が時にアイドルに対し有利な立場を利用した不祥事を起こすことがある。2014年10月、乃木坂46のメンバー松村沙友理が、集英社編集者との不倫を報じられた。編集者は漫画雑誌「ヤングジャンプ」でグラビアを担当しており、乃木坂46が表紙に登場したこともある。漫画雑誌においてグラビア頁は、登場タレントで部数が左右される重要項目であり、人選やタレントの扱いにおいて公平性に十分配慮する必要がある。マスメディアが介入することにアイドルファンに不信を持たれることがあり、特に若者には直接的なコミュニケーションが採れる「ヴァーチャル空間」が好まれる傾向にある。
- (156) 岡島・岡田[2011] 72p.
- (157) 2014年5月25日、岩手県滝沢市の岩手産業文化センター（アビオ）で開催した握手会において、のこぎりを持った男がメンバーの川栄李奈と入山杏奈、2人を守ろうとした男性スタッフを切りつけた。事件直後にメンバーがSNSを自粛するなど影響が及んだ他、他のアイドルも予定イベントを中止したり内容を変更したりするなどの措置が取られた。川栄李奈は、本事件の後遺症を理由として、2015年3月26日、グループからの卒業を発表した。襲撃事件以降わずか41日で握手会は再開したが、握手会の回数は事件前よりも増加している。
- (158) 「アクターズスクール広島」出身の西脇綾香、櫻野有香、大本彩乃による3人組アイドルユニットであるPerfumeは、1995年、メジャーデビューを果たした。地元である広島ローカルアイドル「ばぶゆ〜む」として活動していたが、2003年に上京しユニット名も「Perfume」に変更した。メンバーが住む女子寮にはWebカメラが設置され、24時間配信が行われていた。

- 告知や独り言を言うためにメンバーがカメラに姿を見せた。
- (159)「でんぱ組.inc」は2008年に活動を開始した。
- (160) Wakana, Keiko, Hikaruの3人組女性ボーカルユニット「Kalafina」は天使の声でアニメソングを歌う。アニメ「劇場版 空の境界」の主題歌でデビュー後、ファン層を拡大している。「魔法少女まどか☆マギカ」など多くのヒット曲に携わると同時に、NHK番組「歴史担当ヒストリア」の楽曲も担当するなど、幅広い年齢層のファンを獲得している。
- (161)「秋葉原ディアステージ」では、毎日何かしらのイベントが開催されている。イベントの内容は、キャストの女子たちが考えている。ある歌手の誕生日が近いため、その歌手の「曲縛りイベント」、夏だから「夏の上がる曲イベント」、とことんヲタ芸が打てる「ヲタ芸ソングの日」など、ヲタ芸を見られる場所として有名である。客はアニメやゲームに詳しい女子や、男装やダンスユニットのクオリティも高い。今やワールドクラスの人気を獲得しつつあるでんぱ組.incの妹分として2013年3月に同じディアステージ所属の最先端ユニットとしてデビューした「妄想キャリブレーション」は、カラフルでポップな衣装、めまぐるしい曲展開と独自の世界観、めまぐるしく変化するダンス、オタク要素の強いメンバーのユニークなキャラクターは、他のアイドルグループにはない強烈な個性と、熱いファンと一緒に作り上げる熱いライブパフォーマンスで注目されている。
- (162) AKB48の曲は、ファン向けではなく、よりマスに届く分かりやすくキャッチーな曲が多い。「ヘビローテーション」の「I want you」などファンが輪唱したり、コールを入れたりして、一緒に盛り上がる余白を残していることも特徴的である。
- (163) 仮面女子は、アイドルとしては極めて異端とも言えるホッケーマスクがトレードマークの「芸能界に選ばれなかった者たち」で構成される地下最強のアイドル集団である。秋葉原にある常設劇場を拠点に1年365日ライブ活動を行っている。2015年1月にリリースした「元気種★」が、インディーズの女性アーティストとしては史上初となるオリコン・チャート1位を獲得した。「アリス十番」「スチームガールズ」「アーマーガールズ」の3グループから構成される。
- (164) izu (出岡美咲) は、1990年9月24日生まれ。三重県出身。ファッション誌「JELLY」の専属モデル。「東京ガールズコレクション」「神戸コレクション」などに多数出演している。2013年にはCD「ティーンズ」で歌手デビューした。2014年にはYouTubeデビューも果たした。
- (165) 西川瑞希は、1992年11月16日生まれ。東京都出身。「Popteen」専属モデル。中国語の話せるモデルとして台湾でも活躍中。
- (166) 木花清佳は、1995年4月19日生まれ。東京都出身。「チャンスの神様」でデビュー。iTunesで配信した。
- (167) 滝口ひかりは、1994年9月20日生まれ。千葉県出身。日本ツインテール協会から誕生した2.5次元のアイドルグループ「drop」に所属する。バラエティ番組で「2000年に1人の美少女」として取り上げられ注目された。
- (168) 木下ゆうかは、数々の大食い番組に出演。福岡県出身。
- 身。
- (169) まなこは、1993年3月3日生まれ。神奈川県出身。
- (170) 田中セシルは、1998年9月21日生まれ。東京都出身。モデル。側転からハンドスプリング、プロペラなどあらゆる回転動画を投稿している。
- (171) 柴 [2015]
- (172) 太田 [2011] 265p.
- (173) 初音ミクのライブイベントは、楽器演奏と初音ミクが連動する「シンドロイド」という技術を用いる。
- (174) 乃木坂46メンバーは次々とファッション専属モデル契約を結んでいる。メンバーは、白石麻衣「Ray」、西野七瀬「non-no」、齋藤飛鳥「CUTiE」、橋本奈々未、松村沙友里「CanCam」という女性ファッション誌専属モデル5人を擁する。2015年5月20日発売の「an-an」では、白石麻衣、西野七瀬、橋本奈々未、松村沙友里と乃木坂46を兼任していたSKE48松井玲奈の5人が表紙を飾った。
- (175) AKB48はアイドルをやりながら、水着グラビア、バラエティ番組、ファッションモデルなど全部を行い、アイドルの枠を飛び越えて、アイドルだけの人気に甘んじなくなっている。過去の「グラドル(グラビア・アイドル)」は、写真集やDVDを出す以外に活動域をあまり広げなかった。以前は、モデルがグラビアをやると女性人気は低下するという風潮があったが、現在は男性ファンがモデル目当てで女性ファッション誌を購入したり、女性ファンがグラビア目当てで男性誌を購入したりしている。
- (176) 佳子内親王は、2013年4月に学習院大学文学部に進学して小学校の教員免許も取得できる教育学科で授業を受けていたが、2年生だった2014年8月に中退し、2014年10月にICUの特別入学選考に合格、2015年4月に教養学部アーツ・サイエンス学科に入学した。幅広い分野について学んだ後、3年生になる段階で専攻を決める予定である。
- (177) 佳子宮が2009年、中学生時代に学校で撮影されたとみられる制服姿の写真がネットに公開された。実姉の眞子宮は所属していた大学スキー部の合宿で前年に撮られた写真がネット上に公開された際は、酒類の容器が写っていたこともあり、飲酒疑惑まで取り沙汰される騒ぎとなった。
- (178) 恰好を代表する王女のうち、誰が最も美人かをネット投票で競う企画で、ドバイ王女に次いで2位に輝いた。
- (179) 2015年4月2日の国際基督教大学(ICU)の入学式では、実際の佳子宮が帰宅するところを見ようと約80人が出待ちした。望遠カメラで撮影しようとするパパラッチもどきの学生も登場している。アイドルのプライベート写真は1点3,000～5,000円であるが、佳子宮の写真は1万円以上の価格が付いているためである。
- (180) 1970年代前半まで、女性アナウンサーは目立つ存在ではなかった。女性の働く環境が整ってはならず、フジテレビでは1972年まで女性社員は25歳が定年で、それ以上は臨時職員としての雇用だった。テレビ東京は専門職としての女性アナウンサー採用が始まっておらず、他部署から選抜している状態であった。
- (181) 下僕的・社会的な男性アナウンサーとして典型的と呼ばれるのが、TBS安住紳一郎アナウンサーである。

- 40代を超えても威厳や貫禄がないとされる。フジテレビの伊藤利尋アナウンサーや笠井信輔アナウンサーもこれに近い。
- (182) 1985年に男女雇用機会均等法が成立すると、女子アナの採用、番組出演が増えるようになる。1988年には、フジテレビの新人だった有賀さつき、河野景子、八木亜希子が「花の三人組」として売り出され、2年目の中井美穂（1987年入社）が「プロ野球ニュース」のメインキャスターに抜擢された。
- (183) 1980年代に入り、女性アナウンサーが「女子アナ」と呼ばれるようになった。きっかけは、フジテレビの山村美智子（1980年フジテレビ入社）と益田由美（1977年フジテレビ入社）である。山村は「オレたちひょうきん族」で初代ひょうきんアナとして人気を集め、益田は「なるほど!ザ・ワールド」のレポーターとして世界中を飛び回った。
- (184) TBSを定年退職した吉川美代子は、頑なに「女子アナ」ではなく「女性アナ」と言って、この2つの仕事を区別している。
- (185) フジテレビが女性アナを女性芸人やグラビア・アイドルのように使っているのに対して、日本テレビやNHKでは、ニュースや情報番組でメインの男性司会者の横にいるアシスタントという扱いであり、「ハイ、続いては」という進行を行っている。
- (186) 韓国の女性アナウンサー、特にお天気キャスターは、セクシーな服装がネット空間で話題になることが多い。韓国では、日本と同様に女性アナウンサーのアイドル化が進行している。最近バラエティ番組などのタレント的活動も目立ち、若手女性アナウンサーが肌を露出した大胆ファッションで男性誌のグラビアにも登場した。「放送人として品位がない」として波紋を呼び、社会問題にもなった。
- (187) かつて女人禁制だったスポーツの取材現場に女子アナが訪れることも頻繁に行われた。フジテレビ「プロ野球ニュース」で1988年に中井美穂が局の女性アナウンサーとして初めてMCに抜擢されて以来、後任にも女性アナウンサーが起用されるようになった。2000年から担当した大橋マキは野球をまったく知らなかったため、「右中間ヒットは宇宙まで飛んでいくのかと思った」という迷言を残した。1990年代になると各局の看板アナウンサーが球場に集まるようになり、プロ選手と交際する女性アナウンサーも増えた。スポーツを担当した福島弓子（1989年TBS入社）、木佐彩子（1994年フジテレビ入社）、柴田倫世（1998年日本テレビ入社）らは、のちのメジャーリーガー（イチロー、石井一久、松坂大輔）と結婚した。また、河野景子（1988年フジテレビ入社）は横綱・貴乃花と結婚した。欧米のメディアであれば「取材源との距離」が問題になるところであるが、未熟な日本の女子アナに対して報道者としての「倫理感」を求めることができないため、長野翼（内川聖一）、榊田絵里奈（堂林翔太）、下平さやか（長野久義）など、女子アナとプロ野球選手の結婚はその後も続いている。
- (188) フジテレビのアナウンサーである三田友梨佳の父親は、東京日本橋で明治時代から続く有名劇場「明治座」のオーナーであり、祖父の代から続く創業百年の老舗である高級料亭「玄陶店 濱田家」(ミシュラン三ツ星)のオーナーとしても知られる。また、フジテレビ・秋元優理とテレビ東京・秋元玲奈の姉妹の父親は外務省キャリア官僚である。
- (189) NHK：杉浦友紀（ミス上智）、日本テレビ：畑下由佳（ミス成蹊）、鈴江奈々（ミス慶応）、TBS：古谷有美（ミス上智）、吉田明世（ミス成城）、田中みな実（ミス青学）、出水麻衣（ミス上智）、青木裕子（ミス慶応）、フジテレビ：内田嶺衣奈（ミス上智）、本田朋子（ミス立教）、テレビ朝日：久富慶子（ミス青学）、竹内由恵（ミス慶応）、久保田直子（ミス立教）、テレビ東京：相内優香（ミス立教）、大橋未歩（ミス上智）他、多数存在する。テレビ局は採用する理由に「ルックスもさることながら、ミスキャンに出場すると、キャンパスでも注目される存在になる。学生時代から見られることに慣れているため、新人アナ時代から物怖じすることがない。即戦力として活躍できるため、おのずと経験値が上がって行く。そのため看板アナになる女子アナが多い」ことを挙げている。ミス慶応大学に選ばれた中野美奈子（2002年入社）は「日本テレビではミス慶応と言わず面接で落ちたので、フジテレビでは前面に押し出した」と女子アナの採用基準について指摘している。
- (190) フジテレビのアナウンサーである永島優美の父親は、サッカー解説者の永島昭浩である。フジテレビからフリーへ転出した高橋真麻の父親は、有名俳優の高橋英樹である。
- (191) アメリカにはコロンビア大学、ミズーリ大学、ノースウェスタン大学、カリフォルニア大学バークレー校、南カリフォルニア大学など大学院レベルの著名なジャーナリズムスクールが存在する。ジャーナリズムスクールは、専門職業人としてのジャーナリストに欠かせない倫理や技能を身に付けることを目的とする。日本のマス・コミュニケーション業界は大学新卒一括採用の慣行が根強く、社員教育は今でもほとんどすべて社内教育になっているため、社員の能力は専門職というより組織人としての色彩が濃い。このあたりの能力の脆弱性が、社員に「終身雇用」が多い理由とされる。
- (192) フジテレビの早朝の情報番組「めざましテレビアクア」のメインキャスターを2015年3月末から務めている牧野結美は、2010年のミス同志社大学を経て2012年に静岡朝日テレビに入社したが、新人時代に担当したローカルニュースをきっかけに「カワイすぎる」と人気が出た。放送中、何度も原稿読みを間違え、「かいしゃい（開催）されてます」「～でしゅ」とカミまくりした様子が動画サイトに投稿されると、一瞬懸念な姿が「萌える」「守ってあげたい」と男性に受けファンが激増した結果、人気は一気に全国区になった。テレビ局も本来なら社員の未熟なスキルを批判すべきところであるが、逆にアイドル性の高さから抜擢人事を行った。視聴者だけでなくテレビ局も女性アナウンサーにアナウンス技術よりもアイドル的「カワイさ」を期待している証左である。
- (193) 1988年にフジテレビに入社した八木亜希子、河野景子、有賀さつきは「花の88年組」と呼ばれ、ニュース番組には出ず、バラエティやドラマ出演をこなした。女性アナウンサーのアイドル化（アナドル化）を決定づけた存在である。しかし、アイドルとしての扱いのために、「初々しさ」を失うと人気は急落した結果、有賀は1992年（4年間）、河野は1994年（6年間）に

- 退社するなど、寿命は非常に短かった。
- (194) テレビ局が女性アナウンサーにアイドルとしての役割を期待したことを示したのが、日本テレビが若手女子アナウンサーの永井美奈子（1988年入社）、藪本雅子（1991年入社）、米森麻美（1989年入社）で3人組歌手ユニット「DORA」を結成させ、アイドル衣装に身を包んで歌わせたことである。「DORA」のデビュー曲「いつまでもそばにいて」はオリコン43位を記録した。また、DORAに習って系列局の讀賣テレビが当時の若手女子アナ3人衆だった植村なおみ、脇浜直子、徳山順子で「NORA」を結成させた。更に、1993年にバラエティ番組「ウンナン世界征服宣言」の企画で入社2年目の大神いずみがDORAに挑戦状を叩きつける形で歌手デビューした。フジテレビと日本テレビのアナウンサーアイドル（アナドル）対決は激化して、TBSやテレビ朝日もアナドルを生み出して対抗していく流れになり、現在は「女子アナ戦国時代」と呼ばれるようになっている。
- (195) フジテレビ加藤綾子アナ（2008年入社）は、フジテレビ、日本テレビ、TBSに内定し、「スーパー綾子」として内定時から騒がれていた。
- (196) 滝川クリステルは、フランス人の父親と日本人の母親を持つ。
- (197) フジテレビ斉藤舞子は「ミス湘南コンテスト」でフォトジェニック賞を受賞、その後、水着撮影会を開催した。TBS佐藤渚はジュニアアイドルとして「週刊プレイボーイ」にグラビアを掲載、DVDをリリースして、本格的に芸能活動を行っていた。フジテレビ平井理央（2005年入社）は写真集も出した元アイドルであった。元「おはガール」で、女優としても活躍、「すぼると！」で「春の高校バレー」のリポートを担当していた。同じくフジテレビ本田朋子は「ミス立教」受賞後、大手アナウンサー事務所に所属して、学生ながら「すぼると！」のキャスターを務めた。2011年には元「モーニング娘。」5期生の紺野あさ美がテレビ東京に入社した。2012年フジテレビ入社の宮澤智は「ホリプロスカウトキャラバン」ファイナリストで、学生時代に情報番組「PON！」（日本テレビ）のお天気お姉さんを務めた。2014年TBS入社の皆川玲奈は、2003年に「全日本国民的美少女コンテスト」に出場し審査員特別賞を受賞、2005年に「ミスセブンティーン」に輝き、その後はモデル・女優として活躍していた。「アイドルが女子アナになる」という逆転現象が起きている。1990年代まではテレビ局が新人を一から育て上げるという方針であったため、変に色の付いた女性は敬遠されたが、視聴率争いを勝ち抜く「即戦力」が求められるようになっている。
- (198) かつて女性アナウンサーは、まだ色の付いていない、「清廉性」のある純朴な女性が採用されていた。ミスコン受賞歴はむしろ「手垢が付いている」と敬遠されていたが、近年は元タレントが多く入社するなど即戦力が求められるようになっている。
- (199) 2015年4月にキー局に入社した女性アナウンサーは計11名であるが、ミスコン優勝者やタレント活動歴のある大卒ばかりであり大学院を修了した高学歴者は一人もいなかった。一度は日本テレビに内定を取り消された笹崎里菜は2011年のミス東洋英和、TBSに入社した宇内梨沙は2013年のミス慶應、フジテレビに入社した小澤陽子は2012年のミス慶應、宮司愛海はミスサークルコンテスト2010である。そして、入社前にもかかわらず、彼女たちの私服姿や太もも露出写真が雑誌に掲載された。
- (200) 海外では同ステージの学歴をイコールパートナーとしてみる概念が根強く浸透しており、修士号の取得は非常に重要視される。
- (201) 1988年に八木亜希子、河野景子と共にフジテレビに入社した有賀さつきは、クイズ番組で珍回答を連発し、旧中山道を「きゅうちゅうさんどう」と読むなど、バラエティ番組専用アナウンサー（バラアナ）として活躍した。フジテレビの寺田理恵子（1984年入社）は、「オレたちひょうきん族」でスカートをめくられたり、水を掛けられたりしていた。近年も、バラエティ番組で芸人にキャラクターをイジられる女性アナウンサーが増加している。「サンデー・ジャポン」の「ぶりっ子キャラ」で脚光を浴びたTBSの田中みな実、「モヤモヤさまぁ〜ず2」でのホンワカした天然ぶりで人気を集めたテレビ東京の大江麻里子（2001年入社）、錦野旦に「うるせえよ、おしゃべり野郎」と暴言を吐いたフジテレビ三田友梨佳など、独自のキャラや芸人との掛け合いで人気を得る女性アナウンサーが増加している。フジテレビの看板アナウンサーに成長した加藤綾子も、明石家さんまとの掛け合いで人気に火が付いた。
- (202) 女性アナウンサーの中ではベテランである安藤優子（フリー）は、東日本大震災時の報道で、水没する街の映像に対し「家も車も人も流されていきます」とスポーツ中継のような実況を行い、ネットを中心に批判された。フジテレビ・秋元優里アナウンサーは、震災直後の菅直人首相の会見中に「アハハッ、笑えてきた」と発言、津波の被害現場をレポートする同僚に「やっとな水が引いてきたってとこですか？」という質問を行った。
- (203) 2015年3月に放送されたフジテレビ「ボクらの時代」で、元フジテレビの八木亜希子（1988年入社）は、新人時代、初仕事のゴルフ大会のプレゼンターで、パニーガールの衣装を着せられそうになったと語っている。近藤サトは、温泉中継でバスタオル1枚でレポートした。寺田理恵子（1984年入社）は、「オールスター水泳大会」のレポーターの時に水着を着用、エアロビクスが日本に上陸した時にレオタードを着たと語っている。テレビ朝日「ニュースステーション」でサブキャスターを務めた小宮悦子も水着になっていたことがあった。日本テレビ・藪本雅子は「スーパーJOCKY」（1993年放送）の熱湯コマーシャルで、スタジオで水着に着替えた。テレビ東京の亀井京子（2005年入社）は、体を縛られて「どうですか？」と聞かれたり、バナナを食べさせられたりした、と語っている。また、スポーツ番組では、胸を強調するためにわざと横からのカメラアングルで撮られたこともあった。番組進行表には「YC（横乳）」や「UC（上乳）」と記載されていた、と言及した。
- (204) 1990年代、NHKも民放と同様に「女子アナ」を多ジャンルに抜擢するようになった。久保純子（1994年NHK入社）はNHKでは異例の早さの3年目で東京アナウンス室に配属され、ニュース番組でスポーツなどを担当した。国民的人気を博し、1998年に26歳



- の若さで「紅白歌合戦」の司会に抜擢された。モデルになった局のPRポスターが相次いで盗難されたほどの人気であった。
- (205) 2008年に入社したフジテレビ・加藤綾子、椿原慶子、TBS・橋田絵理奈、加藤シルビア、日本テレビ・小熊美香、テレビ朝日・竹内由恵、テレビ東京・相内優香、秋元玲奈は「新黄金世代」と呼ばれるが、30代直前の年齢に差し掛かっている。1985年4月23日生まれで30歳になった加藤綾子には、フリー転向やフジテレビ退社に関する報道が盛んに行われた。
- (206) 30歳でフリーに転身する女性アナウンサーが多いことは男性アナウンサーと異なる役割を担っていることの証左である。30歳のフリー転身は、草野満代(NHK)、大神いずみ(日テレ)、柴田倫代(日テレ)、田丸美寿々(フジ)、中井美穂(フジ)、中村江里子(フジ)、31歳のフリー転身は、渡辺真理(TBS)、滝川クリステル(共同テレビ)、膳場貴子(NHK)、永井美奈子(日テレ)などがいる。
- (207) 1976年、日本テレビの村上節子(当時39歳)は、「容姿が衰えテレビ映りが悪くなった」という理由で異動を命じられた。裁判で争って勝訴したが、その後、異動した。日本テレビ大神いずみは「スーパージョッキー」で水着姿を拒み、視聴者から抗議が殺到した。
- (208) 反発する小島慶子(1995年TBS入社、フリー)も39歳で水着グラビア写真集を出している。また、著書「わたしの神様(幻冬舎)で、女性アナウンサーの枕営業(優良顧客を確保するために性交渉する営業活動)の実態を明らかにしている。「女子アナ限界年齢は30歳」と言われ仕事が減った段階になると、半井小絵(42歳)、青山麻里子(35歳)、竹中知華(33歳)など30歳を過ぎて水着写真集を出すアナウンサーが多い。現在の女性アナウンサーは清廉な優等生ではなく、したたかな野心家であると衆知され、「女子アナ幻想」は崩れつつある。
- (209) 2005年、アーケードゲームからスタートした「アイドルマスター」は2011年にテレビアニメ化され、2014年には劇場版も公開された。ゲームの頃からの熱狂的なファンの期待に応え、芸能事務所765プロダクションに所属する新人女性アイドルを瑞々しく描いた。2015年に放送された派生作品「アイドルマスター シンデレラガールズ」は関連CDが15作品がランクインして、シリーズもの全体の累計で1位になった。10周年の目玉となる、2015年7月18日、19日に行われた西武プリンスドームでのライブは計10万人を動員した。
- (210) 「アイカツ!」は、親友の霧友あおいに誘われ、アイドルの養成の名門校「スターライト学園」に編入した星宮いちごは、アイドル仲間との数々の出会いを通じ成長し、いつしかトップアイドルへの道を歩み始める。そして、いちごは、強力なライバル校「ドリームアカデミー」と力を合わせたステージ対決という大舞台で、憧れのトップアイドル・神崎美月とついに競い合う。ドラマの盛り上がりとし、2年間の放送によるCG技術の進化が、見事な相乗効果を生み出している。
- (211) 「ラブライブ!」は、2010年6月、雑誌「電撃G's magazine」のショートストーリーから始まったアイドル物語である。「みんなでかなえる物語」をキーワードにオールメディア展開するスクールアイドルプロジェクトで、男女問わず幅広い層から人気を集めている。都内にある廃校危機にある女子高校(「音ノ木坂学院」)の女子高生9人がアイドルを目指す内容で、AKBグループのようにセンターを決める選挙も行う。2013年のアニメ化で人気が発火し、熱狂的なファンを「ラブライバー」と呼ぶ。2014年1月に発売されたシングル「タカラモノズ」はオリコン・チャートでデイリー1位、2015年5月27日に発売されたベストアルバムは、6月8日付のオリコン週間アルバムランキングでウィークリー1位を獲得した。テレビアニメ2期でアイドルグループ「μ's」がラブライブ!で優勝したように、ストーリーと大きくリンクする結果となった。アイドルグループ「μ's」を讀者が育てるようなイメージである。2015年6月13日公開の映画「ラブライブ! The School Idol Movie」は、全国121館の公開規模ながら興行収入で3週連続1位となり、観客動員は100万人を超えた。2015年夏の東北地方の夏祭りにおいて、「弘前ねぶたま祭り」(8月1日)、「青森ねぶた祭」(8月2日)で、キャラクターをかたどったねぶた3台が運行されるなど大きな話題にもなった。
- (212) 「AKB0048」の舞台は芸能活動が禁止された遙か未来、伝説のアイドルグループとなったAKB48の名を襲名するグループ「AKB0048」は危険を顧みず、ゲリラライブを続けていた。オーディションで選ばれたAKB48の声優選抜メンバーが主要キャラクターを演じている。歌もダンスも現行のAKB48のモノを使用。AKB48メンバーの名前を代々襲名するという設定やグループのセンターポジションのアイドルが消滅する(センターノヴァ現象)という設定が、アイドルに神秘性を与えていた。第1話はAKB0048に憧れる主人公が故郷を飛び立つ、アイドルアニメの王道になっている。
- (213) 「うたの☆プリンスさまっ♪」は、女性向けの人気恋愛ゲームのアニメ化。作曲家を目指して芸能専門学校「早乙女学園」に入学した七海春歌が、アイドルを目指す男子たちにパートナーとして自分の曲を作曲してほしいと望まれる。女性ファンにも受け入れられる逆ハーレムの構造となっていて大ヒットしている。
- (214) 「少年ハリウッド」は、劇場「ハリウッド東京」を拠点に活動するアイドルユニット「少年ハリウッド」のメンバーが、日に日にアイドルになっていくことで、人間としても成長、変化してゆく物語。小説「ハリウッド物語」の15年後を舞台に、原作者・橋口いくよがアニメのシリーズ構成・脚本・構成を担当している。
- (215) 「幕末ロック」は、後に「幕末」と言われた時代、徳川幕府は、「愛護(アイドル)」の歌う「天歌(ヘブン図・ソング)」により民の心を奪い、いつわりの泰平の世を築いていた。自由とロックを愛する男・坂本龍馬と仲間の「志士(ロッカー)」達は、熱いロック魂を胸に、幕府の支配に立ち向かう。そんな史実に大胆なアレンジを加えたユニークなキャラクターと世界観、そして激しく華麗な音楽で、女性ファンを中心に大きな反響を呼んだ。
- (216) 「魔法の天使クリィミーマミ」は、「スタジオぴえろ」が贈る魔法少女シリーズ第1弾。妖精から1年間の期限付きで「願いがかなう魔法」を授けられた森沢優は、アイドル歌手クリィミーマミとなってデビュー

- 一する。現実と地続き感のある舞台設定や、優の心の揺らめきに注目する作風は魔法少女のジャンルに新風を吹き込んだ。
- (217) 「Wake Up, Girls!」は、仙台の芸能事務所が地元少女をオーディションしてアイドルグループを結成する、生々しいタッチでつづられるアイドルアニメ。実際に新人声優をオーディションし、キャラクター名に声優の名前を使用、声優ユニットをデビューさせるという、アニメと現実をリンクさせたプロジェクトとなった。アイドルファン側やプロデューサー側など、大人の視点を交えて芸能界の泥臭さを描いていることも注目である。
- (218) 「WHITE ALBUM」は、少し変わった性格だが平凡な大学生の藤井冬弥と、彼の恋人でアイドルの森川由樹、大人気アイドルの緒方理奈が織り成す三角関係を中心に、狂騒のバブル景気を迎える直前、1986年の日本を舞台にした若者たちのナイーブな青春群像が描かれる。音楽アニメとしては、1980年代アイドル・ブームの頃の雰囲気巧みに再現している点が魅力である。
- (219) 「プリティーリズム・レインボーライブ」は、ゲーム「プリティーリズム」を原作とするTVアニメ。リズムショーはリズム空間で行う、フィギアスケートなどを組み合わせたエンタテインメント。彩瀬なるは、普通の中学生であったが、ショップの店長に選ばれたことをきっかけにリズムショーの世界に入っていく。
- (220) 水樹奈々は、NHK紅白歌合戦を6年連続で出演するなど、声優の代表格となっている。2013年11月には自身初となる海外出演を台湾で行った。
- (221) 竹達彩奈は、「けいおん!」中野梓役、「俺の妹がこんなに可愛いわけがない。」の高坂桐乃役で、天性のアニメ声でブレイクした。
- (222) 花澤香菜は、2004年、「LAST EXILE」で声優デビューした。見た目通りのやわらか癒し系ボイスで、多くのアニメファンを虜にする。2012年4月から歌手活動も行っている他、声優ユニット「RO-KYU-BU!」のメンバーとしても活躍中であり、現在、日本一忙しい声優と言われる。声優になる前は、売れない地下アイドルとして活動していたことが有名である。実写映画にまで進出して、多くのファンを獲得した。2015年3月14日のホワイトデイ、花澤香菜は、主演する実写映画「君がいなくちゃだめなんだ」の主題歌で8枚目のシングルとなる「君がいなくちゃだめなんだ」のリリースイベントを開催したが、イベント中にスーツを着たファンがステージに乱入する事件が起きた。
- (223) 堀江由衣は、ゲーム『To Heart』のマルチの声を担当してブレイクした。アニメ「ミス・モノクローム -The Animation-」ではミス・モノクローム役のほかにキャラクター原案も担当している。
- (224) 悠木碧は、4歳から子役として映画やテレビドラマで活躍した。2003年、「キノの旅」のサクラ役で声優を経験し、声優業に関心を持った。2012年の第6回声優アワードで主演女優賞を歴代最年少の19歳で受賞した。代表作には、「魔法少女まどか☆マギカ」の鹿目まどか役、「戦姫絶唱シンフォギア」の立花響役がある。
- (225) 小倉唯は、「神様のメモ帳」アリス、「ヤマネソスメ」青羽ここな、「ロウきゅーぶ!」袴田ひなた、などの役を演じている。2012年7月、「カンビオーネ!」のエンディング曲「Raise」でソロデビューを果たした。熱狂的なファンが多いことでも知られ、2015年7月5日にはパシフィコ横浜でファーストソロライブを行った。
- (226) 日笠陽子は、「けいおん!」秋山澪役でブレイクした。2009年に若者の間で流行した「てへべろ」の情報発信者でもある。2013年2月に「美しき残酷な世界」で歌手デビューして、2013年10月に初のワンマンライブを開催した。「ハイスクールD×D」リアス・グレモリー役、「健全ロボ ダイミダラー」楚南恭子役、「生徒会役員共」天草シノ役などエッチなお姉さんの役を演じることが多い。
- (227) 喜多村英梨は、2003年、「VS オーディション 2003」でグランプリを獲得、同年に「LAST EXILE」のタチアナ・ヴィスラ役で声優デビューした。「WORKING!!」轟八千代、「このものがかん」九重りん、「這いよれ! ニャル子さん」八坂真尋など、クールな女性から幼女、少年まで多彩な役柄で活躍している。
- (228) 高垣彩陽は、「桜蘭高校ホスト部」上賀茂椿役で声優デビュー。大学では音楽を専攻していて歌唱力が高い。「TARI TARI」坂井和奏役などで劇中で歌うシーンがある。
- (229) 豊崎愛生は、2007年、「ケンコー全裸系水泳部 ウミショー」の鯉川あむろ役で初出演し、「けいおん!」の平沢唯役でブレイクした。ほかに「とある科学の超電磁砲」初春飾利役、「めだかボックス」黒神めだか役など。
- (230) 戸松遥は2007年に「がくえんゆーとびあ まなびストレート!」のスイーツ生徒役で声優としてデビューした。アニメ「妖怪ウォッチ」で主人公ゲータを演じる。2009年に声優ユニット「スフィア」を結成して、ビジュアル系声優アーティストとして注目される存在となった。「スフィア」では、ムードメーカーとしてチームを盛り上げる。「かんなぎ」ナギ役、「ソードアート・オンライン」アスナ役などが代表作である。
- (231) 寿美菜子は、「けいおん!」琴吹紬役でブレイクした。声優ユニット「スフィア」の最年少メンバーであるが、一番のしっかり者と言われている。振付を覚えるのが早く、他のメンバーたちの指導役に回っている。ほかに「響け! ユーフォニアム」田中あすか役など。
- (232) 「i☆Ris」は、エイベックスと声優事務所81プロデュースの共同オーディションで選ばれた6人で2012年に結成された。2014年春からメンバー全員が主要キャストとして出演しているアイドルアニメ「プリパラ」の主題歌としてオンエア中の「ドリームパレード」が2015年7月20日付オリコン週間シングルランキングで8位にランクインした。
- (233) 「プリパラ」は、アーケードゲームが人気の女兒向け作品である。ファッションやダンスなど女の子の憧れが詰まった「プリパラ」を舞台に、主人公たちがアイドルチームを結成して神アイドルを目指す物語である。
- (234) 洲上舞は、もともとは弁護士志望だったが、水樹奈々に憧れて声優を目指した。「暗殺教室」潮田渚、「蒼き鋼のアルペジオ -アルス・ノヴァ-」イオナ、「ガー

- ルズ&パンツァー」西住みほ、などの役を演じている。
- (235) 青木瑠璃子は、2012年に声優デビューした。「アイドルマスター・シンデレラガールズ」多田李衣菜役を演じた。
- (236) 藤井ゆきよは2009年に声優デビューした。映画「サカサマのパテマ」パテマ役で主演に抜擢された。「アイドルマスター」ではライブにも出演している。もともとは女優業がメインであったが、現在の青二プロダクションに移籍後は声優業に力を入れている。ミスインターナショナルの出場経験がある。
- (237) 山本希望は、「アプソリュート・デュオ」ユリエ・シグトウーナ役、「アイドルマスター・シンデレラガールズ」城ヶ崎莉嘉役を演じた。
- (238) 飯田里穂は、2002年から芸能活動を開始。2013年、「ラブライブ！」星空凛役で声優としての活動をスタートした。
- (239) 楠田亜衣奈は、16歳から専門学校に通って声優の勉強をして、2011年「ラブライブ!!」東條希役で声優デビューした。
- (240) 今村彩夏は、「アプソリュート・デュオ」で穂高みやび役を演じている。
- (241) 田所あずさは、2011年10月10日、第36回ホリプロスカウトキャラバンの次世代声優アーティストオーディションでグランプリを受賞した。「極黒のブリュンヒルデ」鷹島小鳥、「電波教師」式鳥切子などの役を演じている。
- (242) 優木かなは、2013年に声優デビューした。「精霊使いの剣舞」リンスレット・ローレンフロスト役を演じた。
- (243) 田村ゆかりは、デビュー以来、声優アーティストとして第一線で活躍している。「王国民」と呼ばれる熱狂的ファンが多いことで知られ、全国ツアーには5万人超のファンが詰めかける。主な主演作は、「魔法少女リリカルなのはViVid」高町なのは役、「波打際のむろみさん」むろみさん役、「のうりん」木下林檎役、「旦那が何を言っているかわからない件」カオル役などがある。
- (244) 松井玲奈は2015年4月から「電波教師」で声優を行った。
- (245) KARAの元メンバーで2014年に女優業を本格始動させた知英（ジョン）は、2015年4月18日に劇場公開された「名探偵コナン 業火の向日葵」で、作品の舞台となる美術館の案内人の声でコナンを迎え入れる役で声優デビューした。なお、同作品では女優の柴倉奈々も声優している。
- (246) アニメ映画「それいけ!アンパンマン ミージャと魔法のランプ」で大島優子は声優を務めた。
- (247) スマートフォンで自撮りできる装置
- (248) 君塚 [2012] 73p.
- (249) BABYMETAL は、2010年11月、「アイドルとメタルの融合」をテーマに結成されたアイドルグループ。メンバーは、SU-METAL、YUIMETAL、MOAMETALの3人。「さくら学院」から派生したクラブ活動ユニットの「重音部」としてスタートした。海外からも大きな注目を集めている。「さくら学院」は「義務教育限定ユニット」のコンセプトから、活動は中学3年生までになっているが、SU-METALの卒業を睨んで結成された。なお、YUIMETALとMOAMETALは、2015年3月29日に「さくら学院」の卒業公演を行い、卒業した。
- (250) 日経エンタテインメント2015年3月号, pp.84-85
- (251) 2010年、イギリスのオーディション番組「Xファクター」から誕生した「ワン・ダイレクション」は、デビューアルバム「アップ・オールナイト」が初登場で全米1位となった。5人組であったが、2015年3月25日、メンバーのゼイン・マリクが脱退すると公式サイトで発表され、以降は4人で活動を続けている。2015年、京セラドーム大阪、さいたまスーパーアリーナで行われた日本ツアーでは6公演で20万人を動員した。
- (252) アリアナ・グランデは、2015年1月、ひらがなを練習している様子をTwitterに上げるなど日本のファンへのアピール度が高い。
- (253) KPOPアーティストは、日本に長期滞在することなく、日韓を行き来しながら、アジアの他国や欧米まで視野に入れた活動を行っている。コアなファンから「KPOPはハングルで聴きたい」という要望があっても、日本語版のCDリリースが行われるのは、カラオケでの普及や幅広いユーザー層への訴求を考えれば、日本語版がやはりまだ必要であると判断されているためである。
- (254) 君塚 [2012] pp.77-78
- (255) 東方神起は、2004年にベ・ヨンジュ主演のドラマ「冬のソナタ」がNHKで放送され、韓国ブームが巻き起こっていた2005年に日本デビューした。音楽業界においては、女性歌手では事務所の先輩BOAが日本で活動していたが、男性グループはほとんど目立っていなかった。韓国ではスターであったが、日本では「J-POPの新人」として位置づけられ、小ホールから活動を開始した。日本語を勉強して、デビュー時から曲はすべて日本語で歌った。当時は他グループでは考えられなかった、トークも通訳を介することなく日本語で行った。
- (256) 2012年から2015年まで実施した全国ツアーの観客動員数は4年間で275万人であり、海外アーティストとして突出している。シングル売り上げ枚数425万枚も海外アーティスト歴代1位、アルバムやミュージックDVDと合わせると913万枚で329億円となる。
- (257) KARAは、2010年に日本デビューし、男性歌手中心だったKPOPブームにガールズ人気を起こした。2014年にニコルとジョンが事務所と契約でもめた結果、脱退した。一時はグループ存続すら危ぶまれたが、新メンバーに選抜オーディションを勝ち抜いたヨンジが2014年に抜擢された。キュートなルックスと天然キャラで人気が発した。バラエティにも引張りだこで、今ではすっかりKARAの顔になっている。元メンバーのジョンは日本で女優やモデルとして活動し、同じく脱退組のニコルは韓国でソロ歌手になった。
- (258) 少女時代は、韓国の8人組女性グループ。2007年に韓国でデビューした。日本では2010年8月にシングル「GENIE」でデビューした。美脚を活かしたダンスとキャッチーな音楽性が人気を呼び、2010年10月発売の「Gee」はアジアの女性グループ初のオリコン2位を獲得、日本レコード大賞新人賞を受賞した。2011年にはNHK「紅白歌合戦」に初出場した。9人グループであったが、2014年にジェシカが脱退し、

現在は8人で活動中。2014年1月にヨナ、スンヨの熱愛が報道され、その後もメンバーの熱愛が続々発覚して、ファンをやきもきさせた。2014年末には、日本デビューから4年で東京ドーム公演を実現した。

- (259) B.A.Pは、女性グループSECRETと同じ「TS Entertainment」の弟分6人組。2013年10月に日本でCDデビューし、2014年末から代々木競技場第一体育館の2公演の他、14公演を実施した。
- (260) BTOBは、BEAST、4Minuteらの「CUBE Entertainment」から韓国で2012年3月デビューした。2013年末の台場、2014年5月の千葉、7月の大阪と、日本での活動も活発である。
- (261) CRAYON POPは、2013年発表曲の「Bar Bar Bar」の不思議なダンスや衣装で一大ブームを巻き起こした。ヘルメットや赤い頬かむりなど、奇抜な衣装、ユニークなダンスがYouTubeで話題になった。来日イベントには、衣装を真似たファンが多く来場した。2013年末に発表した新曲に盗作疑惑が発生した。衣装でのパクリ疑惑と散々で人気失速した。しかし海外では個性的なスタイルが大絶賛で、2014年、レディー・ガガの招聘でツアーの舞台に立った。
- (262) A Pinkは、BEASTや4Minuteの「CUBE Entertainment」の子会社に所属。KPOPガールズブーム以降、王道女性アイドルの新顔が不在であった中で、男性を中心に人気を得た。清純派アイドルとして2011年デビュー当初から男性人気は抜群だったが、2013年にナウンがSHINeeのテミンと「私たち結婚しました」に共演してSHINeeファンの集中砲火を浴びる羽目になった。しかし、おおもね男女ともに人気は高く、2014年日本デビューした。
- (263) Girl's Dayは、2010年7月韓国でデビューした。日本未デビューだが、日本語公式サイトを立ち上げ、イベント参加や単独公演など、積極的な活動を日本で行った。2014年4月には東京でファンミーティング

を開催した。恋愛体質の肉食系セクシー路線で成功した。2013年に16歳年上のトニー・アン(元H.O.T)との熱愛・破局が報じられるなど、恋愛が解禁になった途端、スキャンダルを連発した。2014年はリーダーのソジンがEXOのD.Oとの交際をほのめかしてファンをやきもきさせるなど、セクシーがアイドルの面目躍如ぶりを見せている。

- (264) AOAは、FTISLAND、CNBLUEの事務所「FNC Entertainment」初の女性アイドルとして、デビュー当初は楽器演奏(当て振り)していたが、売れずに断念した。セクシー路線に方向転換してから人気が出始め、2014年は「Like a Cat」の猫ダンスと猫耳ダンスで人気者になった。2014年3月、日本武道館での事務所公演に登場した。先輩の力で日本での活動も有利となる。
- (265) 日本と韓国の音楽業界の最大の違いが著作権に対する慣習がある。日本では通常、コンサートや交流イベントの撮影・録画を観客に認めていないが、韓国では許可する。ファンが映像をインターネットで公開するため、宣伝効果があり、効率的にファンを増やすことができる。
- (266) 日経エンタテインメント2014年7月号, pp.104-105
- (267) ダンスアイドルグループ「4minute」のメンバーで、ソロ歌手としても活躍している。エキゾチックな風貌から「21世紀韓国のセクシーアイコン」とも呼ばれる。
- (268) 2015年7月25日に収容人員18,000人の上海メルセデス・アリーナで「SNH48 選抜総選挙」が開催された。投票券が付いたシングル「盛夏好声音」のMVは、24人の選抜メンバーが中国では珍しい全員水着姿で撮影された(サイパン)。
- (269) 「元AKB48・篠田麻里子、『老婆のように』劣化!!!」のような記事が掲載される。